

特徴はどのようなものなのかという問題意識から始めました。そして、佐原真先生の有名な論文（佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58巻2号、1972年）を読んで、その方法論に沿っていった場合に、模骨痕があるものとないものということでは、漢城とか扶餘では模骨痕をもつ例が多く、はつきり言ってしまえば百濟と新羅とで分かれる可能性がある、ということを述べたわけです。それから少し時間がたっていますが、基本的に、大きな枠組みは変わっていないだろうと判断しています。

そして、製作技術的には、時間性と地域性の両面があると思います。まず、時間性ということから見ると、最近になって、風納土城では模骨痕跡があるものとないものの両方が共存していますが、一つの建物で模骨を使ったものと円筒形のものが両方が一緒に葺かれていることは、ますますないのではないかと思います。その理由の一つは平面形の違いです。模骨を使うものは平面が台形に近く、一方、模骨の痕跡がないもの、つまり模骨を使わない円筒形のものは平面が長方形に近いというような違いが、最近ではずいぶんわかるようになってきています。風納土城についても、廃棄の段階では一緒に捨てられたのかもわかりませんが、導入の段階についてはちょっと時期差を考えたほうがよいのではないかと考えています。

また、慶州の勿川里ですとか雁鴨池などには、平面が台形に近い平瓦もありますので、模骨の桶が全く使われなかつたというわけではないだろうと思います。それでも、新羅ではやはりほとんど模骨を使っていない。とくに新羅への瓦の導入・成立段階では、非常に少なかったのではないかと判断しています。

韓国の竹状模骨、亀田先生の言い方だと簾状模骨についてですけれども、これは桶のようなもの

と判断するよりは、やはり何かが内側にあって、布の代わりに巻いたのではないかと考えています。単純な見方かもしれません、いくら丈夫な簾のような棒状の素材で作ったとしても、それだけで叩きに耐えるような内型にはなりえないのではないかと判断しています。

司会（亀田） ありがとうございました。先ほども申しましたように、簾状になっており、その合わせ目が認められますので、桶状のものに巻いて布の代わりにしたということもあるかと思います。それから、私は繩縫紋、「簾」という言葉を使つたんですが、凹面に、繩ノレンふうのものを巻いたものもあります。簾状のものと両方あるわけですが、今のところ、こういうものが百濟と新羅の国境地域にありながら、一方で新羅に関しましては、初期の段階から円筒桶を使つてゐるわけです。新羅の円筒桶の起源、どこから来たのかという点についてはいかがでしょうか。

崔 少なくとも、風納土城までは遡るだろうということは言えます。その後、問題になるのは高句麗だろうと思います。高句麗の瓦製作技術が南朝と北朝のどちらの影響を受けているのか、そういうところが問題になってくると思います。

司会（亀田） ありがとうございました。今も申し上げましたが、韓国、朝鮮半島の中でもわかってきた部分が増えるとともに、わからない部分もまた増えてきたというのが現状ではないかと思います。日本との関係についても同様なのでしょうけれども。

当初の予定より5分ほど過ぎておりますが、会場の皆さまどなたか、これだけは聞いておきたいという方はおいででしょうか。

山路直充 時間がないのに申し訳ありません。本日ほとんど扱われなかつた文字瓦、丸・平瓦にか

かわる文字瓦について、朱先生、賀先生、亀田先生に質問したいと思います。北朝には工人名、もしくは瓦を作る工程に関する文字を記した文字瓦が多いと理解してよろしいでしょうか。

朱 文字瓦の比率についてははつきり言えませんが、印象としては、北魏洛陽城のほうが多いように思います。たとえば1号房址などではかなり多く、軒瓦と平瓦の両方があります。しかし、ハンコ（印）による文字は少なく、ほとんどが手で書いています。人名とか日付、それから製作工程に関係する文字ですね。それに比べて鄆城のほうは、組織のハンコ、当時は軍隊に関係して、瓦を作る組織がありますし、人名、それから日付ぐらいでしょうか。工程にかかる文字瓦についてはよくわかっていないません。

山路 そうしますと、基本的には、工人とか瓦を作る組織とか、そういうものを管理するようなイメージということでしょうか。

朱 はい。個人のものという性格ではないと思います。

山路 いずれにしても、グループとかそういう組織を表しているということですね。

朱 はい。グループというか、国の工房ですね。

山路 ありがとうございます。次に賀先生にお伺いしたいのですが、揚州城では後半になると、スタンプも「西窯」とか「東窯焼造」といった、製造にかかるものが出てきている。今日のお話では、後半に北方の技法が入ってくる段階で、そういう文字瓦も出てくるということですが、南朝の段階にそういった文字瓦はあるんでしょうか。

賀 南朝の文字瓦ですけれども、まず数からいうと非常に少ないです。おもにハンコ（スタンプ）のタイプのものです。一つは「官」という文字を書いています。これはおそらく官窯を示している

と思います。政府が管理している窯という意味ですね。もう一つは、昨日お話しした郊壇（鐘山南朝祭壇遺跡）では、大地を祀る壇のところに建物があるわけですけれども、そこから出土したスタンプには、「東」とか位置を示す内容のものがあります。ですから、今のところ、スタンプで2種類。そのほか、自由にヘラ書きのように書いた文字もありますが、量は少なく、内容がほとんど読めないという状態です。

山路 ありがとうございます。次に亀田先生に伺いたいんですけども、先ほど軍守里廃寺の瓦で「南」と書いてある文字瓦をお示しいただきましたが、これについては大盛先生から、北魏の永寧寺の影響ではないかというお話をありました。そうすると、技法そのものを持って、瓦生産に関わる工人を管理するシステム的なものが一緒に伝播している可能性があるのでしょうか。先ほどの亭岩里の丸瓦にも「玉」とヘラ書きがあります。スタンプは別にして、こうした文字瓦がどのくらいの量出しているのか存じませんが、そういう点についての検討をなしうるものなのかどうか、お教えいただければと思います。

司会（亀田） 私自身もよくわかっておりませんが、軍守里廃寺のものは「南」でしたよね。そうすると、管理とはまた別かもしれません。ただ、どこからそういうものが入ってくるのかというのには、スタンプ自体もそうですけど、問題だと思います。それから、スタンプはそれなりにありますが、文字を書いているものは、そんなに多くないですね。1字だけのものも、複数のものも含めて。山路さんがおっしゃるようなかたちで、北朝系のもの、管理体制みたいなものも確かにあるかとは思いますが、残念ながら、今のところ、まだそこまで細かい話はできていないという状況か

な、と感じております。

百済の文字瓦は、「大通」と書いてあるものが、今のところ最古ですよね。それが寺名なのか年号なのか、両説がありますが、いずれにしても南朝に関わることを書いたものが出ているのは事実です。そうすると、そのあたりはどうなるのか。正直な話、北朝系でそうしたものがあれば面白いと思いますが、お答えできるところまで至っておりません。

山路 ありがとうございます。

司会（龜田） 時間の関係で、そろそろ終わりにさせていただきたいと思いますが、これだけは聞いておきたいということが何かありますでしょうか。それでは、最後に安家摺先生、金誠龜先生にそれぞれご挨拶をいただきたいと思います。

安家摺 皆さん、こんにちは。日本の奈良文化財研究所の皆さんと中国社会科学院考古研究所の漢唐研究室がおこなった「古代東アジアの造瓦技術の変遷と伝播の考古学的研究」というテーマの共同研究は、2005年に始まりました。日中双方の研究者は、これまでに大同の北魏平城、それから鄆鄆にあります鄆城、南京の建康城、隋唐時代の揚州城、北魏洛陽城、隋唐洛陽城、隋唐長安城などの資料を調査してきました。また、中国側の研究者も、奈良を訪れて学術交流をおこないました。本日、この場で共同研究テーマに沿った研究成果の発表を聴いて、非常に多くの成果を上げていることを嬉しく思っております。

瓦は、私達が発掘現場で常に目にする資料でなければ、これまで私達は、瓦の研究について、あまり重視していませんでした。しかし、この共同研究を通して、瓦や瓦当にはたくさん情報が含まれているということを認識いたしました。瓦の起源そのものは中国にありますが、その研究に

関しては、日本や韓国にまだ追いついていないと思います。今回のこの共同研究によって、中国における瓦研究は非常に発展するでしょう。

瓦葺の建物は、中国では西周の時代まで遡ることができますが、それから千数百年のちの唐や宋の時代になっても、一般の民衆の家に瓦を使うことはほとんどありませんでした。宮殿や大寺院、役所など、限られた場所にしか使われていなかつたのです。

ここで、唐代の杜甫の詩を取り上げてみたいと思います。「茅屋為秋風所破嘆」という有名な詩ですが、これを書いたとき、杜甫は今の四川省の成都の草堂に住んでいました。詩の内容を見ますと、彼の家にも瓦は葺かれていませんでした。雨漏りがするかなり悲惨な状況で、彼と家族はとても苦労したということが描写されています。

いま、画面に映し出しているこの詩には、いろいろなことが詠まれていますが、その中で、もしできるならば「広廈」に住みたいと、そういう希望が詠んであります。杜甫が住みたいと願った理想の家、「広廈」とはどんな建物かと言いますと、次の韓愈の詩から、そのようすがわかります。韓愈の詩によれば、「広廈」とは、軒が深く、屋根に瓦がたくさん載っている大きな家です。もう一つ、宋代の詩人の詩を見ると、瓦を作る職人が住んでいる家は瓦を葺いていないのですが、瓦を作らない、言ってみればお金持ちの家にはたくさん瓦が葺いてある、ということがわかります。

このように、いくつかの史料を調べていきますと、瓦を葺いた大きな建物のことを「広廈（大厦）」と言いまして、それは杜甫が夢ましまがった理想の家だということがわかります。ただ、11世紀の宋代でも、そういう建物に住めるのは、非常に地位の高い高官だけで、一般の民衆の家は瓦を葺か

ない、本当に粗末なものだったということです。

一方、5世紀には、中国の瓦の技術が朝鮮半島に伝わり、さらにそれが日本へ伝わっていったわけです。このような早い時期に技術が諸国に伝わったということは、東アジアの文化交流の中でも非常に重視すべきことだと思います。今後も、東アジアにおける造瓦技術の研究が進み、さらに大きな成果を得られることを期待したいと思います。本日はどうもありがとうございました。

金誠龜 二日間、私も一生懸命勉強させていただきました。このような瓦を愛する方々の集まりに招待していただいたことに對して、奈良文化財研究所、それからこの研究会の前代表の毛利光さん、現代表の山崎さんに深く感謝したいと思います。また、司会をしていただいた佐川さん、亀田さん、そして進行を担当していただいた小澤さん、通訳の今井さん、高田さんをはじめ、皆さんに感謝申し上げます。瓦を愛する研究者の方達が一緒にになって、このシンポジウムが成功したのだろうと思っています。

古代の東アジアの瓦と言いますけれども、ある意味では世界の古代の瓦と評価することができると思います。今回、日本で、日本、中国、韓国それぞれの研究者が発表したり議論したりしていった成果が、今後の瓦の研究の進展に大きな役割を果たすことでしょう。とくに日本側の研究者の方々は、製作技法を中心にして、中国、韓国、そして日本の瓦を幅広く検討されました。中国の研究者の方、韓国の研究者の方には、少し申し訳ないかもしれませんのが、私としては、中国や韓国では、まだまだ日本のように細かい部分の製作技法の観察ですかと、そういう調査がおこなわれていない状況だと感じています。しかし、今回の成果を、中国の研究者の方は中国に持ち帰って中国

の瓦を、韓国の研究者の方は韓国に持ち帰って韓国の瓦をというように、それぞれの国での研究が進展すれば、今後、日本、中国、韓國のお互いの研究成果を、より深く交流させられるだろうと思います。

そういった意味で、本日はシンポジウムの結論を出すというよりは、お互いに問題意識を共有し合い、研究を深めていく重要な契機になったのではないかと思います。このような機会を作っていた奈良文化財研究所の皆様方には、改めて御礼申し上げたいと思います。また、二日間ご静聴いただいた皆様方に深く御礼申し上げます。

もう一つ、安家播先生は私とお歳が同じらしいのですが、今回、ともに閉会の辞を述べさせていただいたこともありがたいと思っています。これからも、皆様ご健勝で研究を続けていただくことを願います。どうもありがとうございました。

山崎 では、これでシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

附載 四～十世紀の中国の造瓦技術

1 北魏平城出土瓦の基礎的研究

劉俊喜
(大同市考古研究所)

A はじめに

紀元 386 年、道武帝拓跋珪は北魏を建国し、398 年に盛樂から平城に遷都した。これより大同は北魏の都城となり、孝文帝拓跋宏の太和 18 年（494）に洛陽に遷都するまで、計 6 帝 7 代、97 年間つづいた。この 1 世紀の間に平城宮においては大規模な造営がおこなわれ、方山水固陵、円丘、明堂などの大型陵墓や礼制建築および雲岡石窟寺院、方山思遠佛寺、永寧寺、皇舅寺などの寺觀はみな相応の規模をそなえていた。洛陽遷都以前に首都平城はかなりの規模で壯観な建物群を建設し、もともと荒涼とした小城は壮大な国際的都市に変貌した。

1995 年と 1996 年に発掘した明堂遺跡は大同市柳航里住宅小区付近に位置し、北魏太和 15 年（491）に造営した重要な礼制建築である⁽¹⁾。遺跡は 100 畝（667a）近くあり、直径は 290m におよぶ。主体建物である明堂は遺跡の中央に位置し、方形の版築基壇は一辺約 43m ある。外周には円形の濠がめぐり、周長は約 900m、幅 6~16m、深さ 1.4m 前後、両側は砂岩を積み上げて側壁とする。円形濠の内側には東西南北に各 1 門あり、それぞれ中央の建物に対応している。2003 年に発掘した大同市操場城街東側に位置する北魏 1 号建築遺跡⁽²⁾は、版築基壇の規模が東西 44.4m、南北幅 31.8m、版築層の厚みは 2 m ある。出土遺物は北魏の黒色磨研の丸瓦と平瓦が主体である。2007 年 6 月に発掘した操場城 1 号遺跡の北 150m のところで、北魏の倉庫跡を検出した。4 基の地下式円形建物は東西向きに整然とななり、底部には炭化した殻つきかあるいは脱殻したアワが残っていた⁽³⁾。同時に、いくつかの北魏時代の建築材料が出土した。1981 年に発掘した方山思遠佛寺遺跡⁽⁴⁾、1993 年に発掘した雲岡石窟第 3 窟前遺跡⁽⁵⁾も大量の建築材料が出土した。2005 年、日本の研究者が大同で調査をおこない、上述の遺跡から瓦を探集した。

以下では、発掘した遺物と採集資料とを総合したうえで、北魏平城遺跡で出土した瓦について再度検討をおこなう。

B 平 瓦

平瓦は、大同の北魏時期の瓦のなかで数量がもっとも多い。その作用は屋根の葺土の上に仰向けにして敷き詰め、屋根から雨漏りがしないようにする。その製法は手づくり、あるいは模骨を使用して、上部が小さく下部が大きい円筒をつくり、刃物で円筒の内側から切り込

みをいれて4分割し、4枚の平瓦にする。

大同における北魏時代の平瓦は灰色（均質な胎土で還元炎焼成）で、平面は上が小さく下が大きい台形を呈する。やや狭い一端を狭端（原文では「小頭」）、幅広の一端を広端（原文では「大頭」）とする。広端面はすべて波状文をかぎり、狭端面にも一部に波状文がある。断面は円周の約4分の1を呈し、凹面は研磨して黒色を加える。凸面はミガキがあり、無文の黒色か灰色。両側面には分割痕跡がある。全体に重厚で硬く焼きしまる。瓦の大きさ、厚み、色調、類型などは平瓦の大型化と多様化を示している。

製作技法や色調光沢、規格の違いによってI～III式に分類した。

I式：凹面、凸面は黒色磨研で、一部に赤色もある。胎土は緻密で焼成は硬質、質も比較的良好である。出土量は少なく、破片のみである。完形品の寸法は不明。

II式：凹面は黒色磨研で表面はかなり緻密で光沢がある。凸面は無文の黒色か灰色。広端には波状文がある。この種の形式の平瓦は全体の90%以上を占め、凹面を上にして葺く。操場城1号遺跡T510③：13（附図1-2）は、凹面が黒色磨研で凸面は黒色無文、広端に波状文がある。長81cm、広端幅60cm、狭端幅50cm、厚さ2.8cm。操場城倉庫遺跡のM204は、凹面が黒色磨研、凸面は黒色無文。広端面に波状文があり、長さ55.5cm、広端幅37cm、狭端幅31.2cm、厚さ2.8cm。

III式：凹面布目、凸面は灰色無文で広端面の下辺に手捻りの波状文がある。一部の資料では、凹面広端縁と凸面狭端縁にも手捻りの波状文がある。この形式の平瓦は量が少なく、ミガキもおこなわない。全体につくりが粗雑で、熨斗瓦に用いたと考える。操場城1号遺跡T201は、凸面灰色無文、凹凸面広端縁と凸面狭端縁に手捻りの波状文があり、長46cm、広端幅36cm、狭端幅31cm、厚さ2cm。操場城倉庫遺跡M201は凸面広端縁に手捻り波状文があり、広端面の厚さは1.2cmほど。長45.5cm、広端幅30cm、狭端幅24cm、厚さ2.2cm。

平城遺跡で出土した平瓦の広端面はすべて波状文があり、波状文の1単位は半円形で、細尖形と小方形などのバリエーションがある。それらは、先端の断面が円形の工具で施文するか、指で捻り出してつけた文様である。施文は焼成前である。

波状文の類型はI～IV式に分けられる。

I式：平瓦の狭端面と広端面に波状文

II式：平瓦の凹面広端縁は無文、凸面広端縁に波状文（附図1-3、附図3-1,2）

III式：平瓦の凹面広端縁は無文、広端面の中央に錐状工具でつけた1条の比較的深い沈線を境にして、その下辺（凸面広端縁）に波状文（附図1-2、附図3-3）

IV式：平瓦の凹面、凸面広端縁に波状文（附図1-1、附図4-3）

一部の平瓦には文字があり、字数は1文字から3文字までと異なる。へラ書きは焼成前で、鉄製か木製の工具を使用している。また、指頭や爪で書いた文字もあるが、大部分はへラ書きである。瓦工人は凸面に文字を書いているが、ほとんど書きなぐっている。へラ書きの位

置も定まらず、規則がなかったと思われる。最大の例は $7\times9\text{ cm}$ 角、最小は $3\times4\text{ cm}$ 角ある。書体は隸書、楷書、行書、草書があり、ある文字は勢いがあるが、認識できないものもある。文字の内容はおもに工人の姓名あるいは検品係の姓名であり、製作の過程で数量やその他の記載をする。たとえば作業内容や秘密の程度をあらわす専用の記号や刻文がある。

平瓦上の文字には、興(附図3-5)、兵、相、生、俟、頭(附図3-4)、五、七、白、奴、知、七頭、皇、十七頭、高(附図2-4)、徳、成、洛、清、泉、伏、貴、田(附図2-6)などがあり、大部分は鉄あるいは木製の工具で書いたものである。ただし、興と生の字はあきらかに指頭や爪で書いている。姓があつて名のないものは、白、高、田。名のなかの一宇を取ったものには、興、兵、相、奴、生、徳、成、洛、清、泉、伏、貴がある。五、七は数量をあらわし、頭、七頭、十七頭も数量か人名を示している。皇は作業内容である。

C 丸 瓦

丸瓦は、大同の北魏時代の瓦磚のなかでは出土量がかなり多い遺物である。その機能は、2枚の平瓦が接するところに覆いかぶせ、雨水が瓦の隙間から染み込むのを防ぐ。作り方は、まず粘土紐を巻き上げるか、あるいは模骨をつかって円筒をつくり、その後、上方に玉縁を作り出し、最後にナイフ状工具で筒の外側か内側から切り込みを入れて分割し、2つの丸瓦を作成する。

大同における北魏時代の丸瓦は、粒子の細かい胎土で、横断面は半円形。凸面はミガキをかけて黒色にするか、無文の灰色を呈する。まれに、青灰色や黄色を呈するものもある。凹面には、模骨を包んだ布目の痕があり、両側面には分割痕跡、後端には玉縁があり、ここに別の丸瓦が重なる。

製作技術と色調の違いによってI式とII式に分類する。

I式：凹面は布目、凸面はミガキで黒色に塗る。この種の形式の丸瓦は全体の90%を占めるものの、大小に違いがある。操場城1号遺跡T410③：3は凸面が黒色を呈し、胎土は緻密でミガキをかける。凹面は布目痕跡がのこる。全体は比較的大きく、つくりも精緻である。全長75.5cm、直径23cm、厚さ2~3cm、玉縁長7cm。操場城倉庫遺跡T517L204③は、凸面黒色、胎土は緻密でミガキを施す。凹面には布目痕跡があり、玉縁凸面に「白」字がヘラ書きされている。全長57cm、直径18~18.3cm、厚さ1.7~2.5cm、玉縁長5.8cm。

II式：凹面は布目、凸面は灰色で無文。操場城倉庫遺跡T613③：2は凹面布目、凸面灰色無文で、全体に焼しの痕跡がある。丸瓦の広端は蓮華文瓦当と接合する。製作法は、まず瓦当裏面に細い斜めのキザミをいれ、丸瓦と接合後に手で接合箇所を円弧状にナデつける。丸瓦の残存長19cm、直径14.5cm、厚さ1.5~2.2cm。

方孔をあけた丸瓦は軒丸瓦である。方孔は、通常、一辺が16.5~17mm。土製の瓦釘をこの穴に打ち込み、軒に固定する。丸瓦の広端は瓦当と90度の角度で接合させる。瓦釘は明

堂遺跡や操場城1号遺跡で出土しているが、完形品はない。軒丸瓦は胎土が緻密で、凸面はミガキを施して光沢があり、多くは黒色だが、熱をうけて浅黄色に変化したものもある。瓦釘の形は菱形で、中央に4つの孔があり、下方には長い柄をもつ。柄の断面は扁平な長方形で、ちょうど丸瓦の方形孔に合わせてある。瓦釘の形は、偃師龍虎灘にある北魏官衙遺跡で出土したものと類似している⁽⁶⁾。

文字のある丸瓦は、1~4字とばらつきがある。文字を刻むのは焼成前で、刻字の工具は鉄と木を組み合わせた尖頭の工具である。大部分は書き付けた陰文で、一部、スタンプや篆刻の陽文がある。瓦工人の棟梁の文字はすべて玉縁凸面にあり、字体は、場所が限られているため、かなり規則正しく詰めて書いている。隸書がもっとも多い。そのほか、スタンプの楷書や楷書化した篆書がある。文字の内容は平瓦と同様で、工人の姓名や品質検査係の姓名、製作過程中に数や備考を記したもの、工程の内容や等級を示すスタンプや刻文がある。

丸瓦上のヘラ書き文字には、おもに李、賈徳、道、侯、白、奴、胡、阿仁、徳、六、口日人走、莫、香（附図2-5参照）、香盧、百又六九、非、伯、天、保など、スタンプ文字には範黒太、容、莫問、皇などがある。

このうち、姓名がそろった例は範黒太と阿仁で、姓のみのものは、李、侯、白、胡。名前のみのものは賈徳、香盧。名前から一字とったものは、道、奴、香、徳、非、伯、天、保、容などがある。造瓦の過程で数やメモをあらわしているのは、六、口日人走、百又六九である。工程の内容や等級を示すのは、莫、莫問、皇である。

明堂遺跡の丸瓦96MN:20は、玉縁凸面に阿仁の2字が書かれている。阿字はいきいきとし、仁字は落ち着いて誠実であり、現存する魏碑の書体のなかでも上出来の作といえそうだ。明堂遺跡と操場城1号遺跡から出土した数点の丸瓦の玉縁凸面に書かれた香、香盧の2字は、下部を日ではなく田につくる。この種の書き方が、当時、民間で非常にやっていたことがわかる。明堂遺跡96MN:7の丸瓦は、玉縁凸面に奴字を書き、操場城1号遺跡出土の奴字と非常に類似している。瓦の刻文は明らかに同時期のものであり、同じ奴という名の工人の手になるものである。

丸瓦のスタンプにある範黒太や容の字体は、楷書化した隸書である。皇字は皇室の工房の印であり、莫問は作業中に規律を守るべきという要求か、あるいはそういう決まりがあったことを示している。この両種の字体は、事実上、一種の楷書化した篆書であり、方山思遠寺、操場城1号遺跡などで発見された「富貴萬歳」、「傳祚無窮」などの北魏瓦当の文字の風格と異なり、古朴かつ端正で、規則正しく簡潔な特徴をもつ。

D 軒丸瓦

大同北魏時代の軒丸瓦の胎土は、緻密で堅緻。表面は黒色でミガキが施され、光沢がある。また焼成技術によっては青白色、紅色を呈するものもある。瓦当の文様には文字、蓮華、獸

頭、人面などの図案があり、これらが4大類型となる。瓦当は型づくりで円形と半円形の両種がある。瓦当の文様は時代の特徴を現しており、標識としての意義がある。

(i) 文字瓦当

「大代萬歳」「皇魏萬歳」「萬歳富貴」「傳祚無窮」「永壽口長」「口賢永口」「□□太□四年」などの瓦当がある。文字の内容から分類すると、吉祥語と紀年の2種類になる。

「大代萬歳」瓦当は城東の建設現場で採集した⁽⁷⁾。瓦当面は、井字で9つの方格に分割される。中央には大きな乳釘をおき、その四隅に小乳釘がある。乳釘の外側には凸線の圏線が巡る。字体は上、下、右、左の順で隸書の陽文が書かれる。瓦当の直径は21cm、厚さ3.3cm、外縁の幅1.5cmである。外縁の内側には凸線の圏線が一周めぐる。操場城1号遺跡でも類似した瓦当片が出土している。

北魏王朝の前身は代国である。310年に穆帝猶蘆は、晋の并州刺史劉根を助け、反旗を翻した白部大人を撃破した。つぎに匈奴の末裔の劉虎を攻撃して、その營舎集落で虐殺した。「晋の懷帝は帝に大單于を進め、代公に封じた。……6年(313)に盛樂を築き北都とし、故平城を修理して南都とした。……8年(315)、晋の愍帝は帝に代王になることを進め、官属を置き、代と常山の2郡を食封とした」⁽⁸⁾。338年、昭成帝什翼健が代王に即位し、在位39年。376年、国内は大いに乱れ、代国が滅亡した。386年、拓跋珪が国を建て直し、代王を称して都を盛樂に定めた。この年の四月に、改めて魏王と称し、国号も魏とした。398年に平城に遷都し、拓跋珪は皇帝を称した。この後、平城を代と改名し、同時に平城を代京、恒代、代都、旧代などと称した。

「皇□口歲」瓦当は、操場城1号遺跡C1で出土。胎土は緻密でミガキをしていない。瓦当の中心文は大きな乳釘で、斜め方向の4つの辺にはそれぞれ等距離に小乳釘をかざる。乳釘の外の圏線はみな凸線である。大、小の乳釘の間には3本の短い凸線がつながり、4つの小乳釘の間に「皇□口歲」の4字がある。上、下、右、左の順に隸書の陽文を書く。瓦当の径は15cm、外縁幅は1.2cm、外縁の内側には凸線の圏線が一周めぐる。2004年5月10日に操場城付近で1点の完形の「皇魏萬歳」瓦当が発見され、それは操場城1号遺跡C1の瓦当片と字体や文様が一致する。欠けていた「魏」の字を補った意義は大きい⁽⁹⁾。

「萬歳富貴」の瓦当は、方山思遠佛寺(附図4-1)、操場城1号遺跡と雲岡第3窟の窟前遺跡などで出土した。瓦当の規格や装飾と文字には差異がある。瓦当面は、井字で9つの方格に分割される。中央には大乳釘文があり、四隅には小乳釘文を配す。乳釘の周りには凸線の圏線がめぐる。文字のうち「万」と「貴」字の変化は大きくないが、「富」と「歲」字はいくつかの書き方がある。上、下、左、右と上、下、右、左の順によむ隸書の文字が書かれている。方山思遠佛寺T110:2は灰黒色で、瓦当面はミガキをかけ、大小の乳釘文の周囲には圏線がない。わずかに「萬歳口貴」の3字が残る。字体は上下左右の順によむ隸書の陽文。瓦当径は16cm、外縁幅1.1cm。操場城1号遺跡T510③:8は灰黒色で、瓦当面はミガキを

施す。瓦当面は凸線の井字形文で9分割され、中央に大乳釘文、四隅に小乳釘文をおき、乳釘の外側には凸圓線をめぐらす。字体は、上下左右の順によむ隸書の陽文である。瓦当径13.3cm、外縁幅1cm、この瓦当の文字は整っており、瓦当全体のつくりもよい。

「傳祚無窮」瓦当は、雲岡石窟第3窟前遺跡で出土した。雲岡石窟研究院にある。瓦当は井字をもって9区画に分割される。中央には大乳釘、四隅に小乳釘をおき、乳釘の周囲には凸圓線文をかざる。字体は上下右左の順によむ隸書の陽文で、瓦当径15cm、外縁幅1.2cmある。北魏時代の「祚」字の意味は皇位をさし、「顯祖默然良久、遂傳祚于高祖」⁽¹⁰⁾、「傳祚無窮」は永遠に皇位を伝承するという意味である。

「□□太□四年」瓦当は、大同市陽高県で採集された⁽¹¹⁾。残念ながら瓦当の外縁が欠け、一つの菱形状の破片だけが残存している。これまで未発見であった紀年銘の瓦当は文献にも記載がなく、1点の破片ではあるが、一級の価値を有する資料である。瓦当面は井字形によって9つの区画に分割される。中央には大乳釘があり、乳釘の外周には凸線の圓線文をめぐる。乳釘の直径は3.2cmある。上方の区画には完全な「太」字があり、下方の区画にも文字があるが、不明である。左の区画には「四年」の2字がある。字体は隸書の陽文である。

北魏には太字からはじまる年号が計4つあり、そのうち太昌年号は1年も使用していないので除外することができる。そのほかの3つの年号は4年以上で、「太延」が6年、「太安」が5年、「太和」が23年ある。瓦当の下方の一字は、残っている字画から「延」や「和」ではなく、「安」字をもってその欠をおぎなうことができる。

瓦当左側の区画にも2字があったに相違なく、筆者は「大代」の2字があったものと推測する。平城期の北魏は代と称し、『魏書』にも多くの記載がある。たとえば、「天興元年、十有二月……徒六州二十二郡守宰、豪傑、吏民二千余家于代都」⁽¹²⁾、皇興三年（469）「顯祖平青齊、其族望于代」⁽¹³⁾、「鄆善國、……去代七千六百里」、「且末国、……去代八千三百二十里」⁽¹⁴⁾など、列挙にいとまがない。

また、2000年に発掘した北魏幽州刺史宋紹祖の墓から出土した磚には、「大代太和元年歲次丁巳幽州刺史敦煌公敦煌郡宋紹祖之柩」とあった⁽¹⁵⁾。また、2001年に発掘した七里村M35出土の磚には「大代太和八年歲在甲子十一……」⁽¹⁶⁾とあり、「大代萬歳」瓦当も出土していることは、「大」と「代」の両字がつねに組み合わさって使用され、北魏王朝の敬称でもあったことを示すものである。

以上から判断して、瓦当右側の方格内には「大代」の両字があったと考える。この瓦当の文字の全文は「大代太和四年」の6字であったに違いない。

（ii）蓮華文瓦当

大同北魏時期は仏教がひろく流行した時期でもあり、社会生活や思想意識などの方面にも大きな影響があった。仏教の観念は社会生活の各方面に浸透し、蓮華文は瓦当装飾文様として次第に盛行していった。

蓮華文瓦当 出土品からみると、単弁と複弁に分けられる。乳釘の装飾位置と規格の大小もまた違いがある。瓦当装飾の違いにより I ~ IV式に分類する。

I 式：単弁六弁、操場城倉庫遺跡 T411③：5 は六弁の蓮華文をかざり、みな単弁である。弁は比較的豊満で、瓦当の中心文は頂部が平坦な乳釘文が蓮弁と連結している。蓮弁の間に三角形の突起がある。瓦当裏面には丸瓦が接合している。残長 4.5 cm、瓦当径 14.3 cm、外縁幅 1.7 cm、瓦当厚 2 cm。

II 式：多くは複弁である。方山思遠仏寺 T016：1 は中心文が乳釘で、その周囲には圈文がめぐる。蓮華は八弁。瓦当裏面には一部丸瓦が残存し、方形の瓦釘孔がのこる。瓦当径は 14.5 cm、厚さ 2 cm、丸瓦残長 26.3 cm ある。操場城倉庫遺跡 T512③：8 は中心文が乳釘で、外周に圈線文があり、蓮華は複弁八弁で表面に紅色を塗る。瓦当径 15 cm、厚さ 2 cm。この瓦当は文様の割付が均等で、つくりもよい。

III式：複弁の連珠文瓦当である。操場城 1 号 C3 は黒灰色で、瓦当面はミガキを施す。中心文は乳釘で、その周囲には 15 個の珠文が配される。蓮華は六弁で、蓮弁の間には三角形文がある。瓦当径は 15.7 cm、外縁幅 2~2.2 cm。方山思遠仏寺 T006：5 は灰黒色で瓦当面は磨かれており、外縁には珠文が一周する。珠文の内側には比較的幅のある圈線がある。瓦当面は複弁の蓮華文で、蓮弁の間には三角形の突起がある。

北魏平城時期は、瓦当で蓮華装飾が流行しただけでなく、その他の建築部材、たとえば門簪や礎石および生活用具にも蓮華図案が用いられた。

宋紹祖夫婦墓から出土した石櫛外壁には 7 つの蓮華文があり、そのうち 5 つは南壁の門上方の 5 つの門簪で直径 11.8~12.8 cm、そのほかの 2 つの蓮華は 2 枚の扉板の円形の引き手で、直径 11~11.7 cm。前廊には計 4 つの平面八角形を呈する廊柱があり、底部の管脚ホゾと上円下方の覆鉢式の柱礎が組み合い、円形覆鉢の上半部には豊満な花弁が高く浮き出た蓮華文で、花弁の先端は下に向かってのびており、細部は陰刻する。

標本 M2：62、M2：63、M2：74 の陶罐と陶壺の器表にも蓮華文が描かれている。葉弁は太く隆起し、花弁先端はやや反りあがっている⁽¹⁷⁾。七里村北魏墓群出土の標本 M1：10 の直頸罐、標本 M36：3 の釉陶盤口罐は器表に浮き彫りの覆蓮華文が一周している。標本 M1：14、M37：1 の石帳礎石は、円形の鼓面上に花弁の先端を下向きにした蓮華文をかざる⁽¹⁸⁾。

複弁蓮華文生童子瓦当 方山思遠仏寺、操場城 1 号遺跡と金属鋳廠北魏墓葬⁽¹⁹⁾などから出土している。華美で肉厚な連弁の間には、豊かな体でかわいげな童子が飾られる。手には淨瓶を持つか、あるいは両手を十字にあわせている。瓦当文様から I ~ III式に分ける。

I 式：化生童子は手に淨瓶を持つ。方山思遠仏寺 T010：9 は灰黒色で、瓦当面はミガキを施す。瓦当中央に化生童子が手に淨瓶をささげている。童子の周りには複弁蓮華文を飾る。破片が多いが、瓦当径は 18 cm、外縁幅は 1.5 cm。

II 式：化生童子は両手を合掌している。金属鋳廠 M5：1 は灰褐色で、瓦当面はミガキを

施す。瓦当中央には化生童子が座して両手を合掌し、その周りに複弁十一弁の蓮華文をかざる。瓦当はほぼ完形で、径 15 cm、外縁幅 2 cm、厚さ 2 cm⁽¹⁹⁾。

III式：化生童子の繩文瓦当。方山思遠寺 T011 : 2 は灰黒色で、瓦当面はミガキを施す。瓦当中央には化生童子が淨瓶を持ち、外縁内側には 2 本の繩を撚った繩文が一周する。繩文内側にはさらに幅の広い圓線が一周する。瓦当は欠け、直径約 17 cm、周辺幅約 2 cm。

雲岡石窟と北朝墓葬にもこのモチーフがある。たとえば大同湖東 1 号墓から蓮華化生の青銅製品が 1 点出土しており、全体を塗銀する。中央に蓮華化生があり、細い眉に高い鼻、両手は十字に組む。像の光背には無文の円盤が表現され、光輪の外周に簡単な同心円の圓文がある。像の周囲には 10 組の複弁蓮華文と葉があり、外縁に 2 つの孔をあけている。孔内には鉄釘やさびなどが残っており、おそらく棺かその他の器具上に固定した装飾であろう⁽²⁰⁾。

（iii）獸面瓦当

明堂遺跡、操場城遺跡から出土している。北魏平城遺跡の出土瓦当中、高い比率を占めており、典型的な北魏時代の遺物である。建築上を装飾する大量の獸面瓦当は、一方では建物の威儀を示すことができ、邪惡な存在を震撼させる作用を引き起こすこともできる。

瓦当面はミガキをかけ、幅の広い外縁をもち、しっかりとしたつくりである。中心には高く浮き出た獸面があり、凶暴で威儀をもち、眼球が突出して短い鼻梁に両耳は先端の尖った円形を呈する。怒った口は大きく開き、そろった前歯と犬歯が露出している。額には比較的深い皺がある。大型の獸面瓦当の直径は 25 cm にも達するが、完形品はない。小型の獸面瓦当のデザインの細部には微細な差異があり、犬歯の位置で I 式と II 式に分ける。

I 式：鋭利な犬歯が唇の外に露出している。明堂遺跡 96MN : 4 は瓦当径 17 cm、厚さ 2.5 cm。操場城 1 号遺跡 T610② : 11 は土黄色で瓦当径 16.3 cm、外縁幅 2.5 cm。

II 式：鋭利な犬歯は唇の外に露出しない。明堂遺跡 96MN : 3 は瓦当径 17 cm、厚さ 2.5 cm。

獸面装飾は屋根に据えるだけでなく、石欄の外側、棺床、門の枕石、門敦、石窟頂部が収束する部分などにも多くみられる。宋紹祖墓から出土した石欄は 5 世紀の北魏時代の単体建築の貴重な実例であるが、外壁に 26 面のことなる獸面装飾を彫刻する。その機能は、装飾のほかに辟邪がある。古代建築の形態的特徴や装飾を直接的に表現している。

（iv）人面文装飾瓦

操場城 1 号遺跡から 6 点採取されている。この形式の装飾瓦は、大同地区でははじめての発見である。器表を黒く塗り、ミガキをしていない。平面は半円形を呈し、凸帯の枠を飾る。正面には明確に突出した人面文があり、高い鼻と長い目をもつ、髭は上に巻き、歯が露出している。裏面は平らである。河北省臨漳県鄆北城遺跡で同類の遺物が出土している⁽²¹⁾。

E おわりに

1 平城遺跡から出土した瓦に書かれた文字は数百をこえている。すべて平瓦の凸面と丸

瓦の玉縁凸面に刻まれている。北魏平城時期の「瓦刻文」の新しい書法は今後の研究課題となる。瓦刻文の書体は、隸書、楷書、篆書、行草書の4体がそろっている。一部の字体は隸書に似た楷書、別の字体は楷書に似た隸書など、自由でゆったりとしており、当時民間で流行した魏碑体である。

2 工人の姓名は、瓦刻文の内容の中でもっとも大きな比率を占めている。漢人の工人が80%以上を占めていることは、大規模な造営工事の場における工人組織では漢人が主体であったことを示す。これは文献の記載を証明するものもある。『魏書』によると、平城造営開始以降、各政権区域から強制的に平城に移民させ、南朝との戦争の捕虜や略奪した財宝を平城およびその付近に集中させた。その移民の数は膨大で、少なくとも100万人以上になる。強制移住の対象となった地域は、山東6州、閬中長安、河西州、東北和龍と東方の青斎など、いずれも当時の北中国における経済、文化の発達した地方である。移住と同時に注意したいのは、人材と技術の探求であった。ここに集積した労働力と北中国各地から調達された巨大な財によって、平城の内外に大規模な建物を造営したのである⁽²²⁾。

3 史料には、宮殿の造営工事に関する詳細な記載はないが、一部の瓦の刻文から、建設工事に関する情報を得ることができる。たとえば、数、人、事件などを記したもののは、確実に工事と関連するだろう。工事の過程ではかならず規定や規律があり、工人や管理監督員は幾重にも仕事ぶりを検査する。正確にそれを解説することができれば、知りうる情報はさらに多くなり、当時の大規模な工事における労働組織の序列や工事責任制の状況を再現することができる。

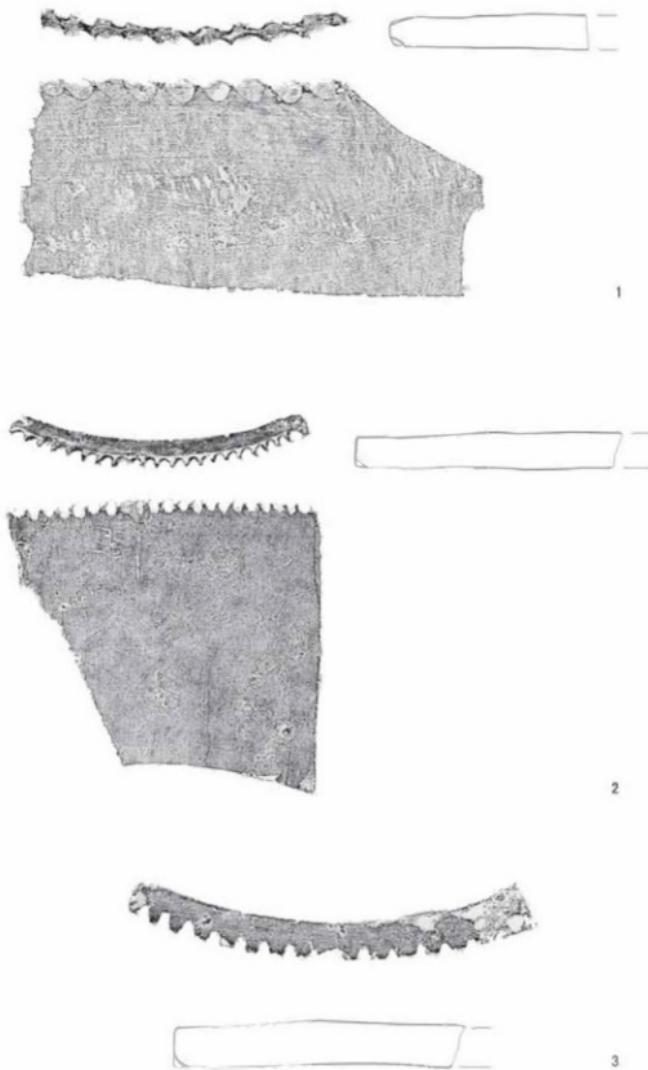
4 遺跡から出土した丸瓦、平瓦、瓦当、瓦釘などは、露出する部分にミガキをかけ、のちに滲炭処理をする。表面は青黒色を呈し、光沢がある。建物の屋根はすべて黒色となり、きわめて莊厳であつただろう。これは、北魏が黒色を非常に尊んだことを示している。史料にも「胡俗では水を尊び、またからみあつた黒龍を描き、それをまじないとある」とある⁽²³⁾。

5 明堂、操場城1号遺跡などの大型遺跡の瓦の特徴は基本的に一致しており、規格や製作技法も類似する。ミガキをかけた大型の丸瓦、平瓦と特殊な瓦当の出土は、かつて壯觀な明堂やその他の大型殿堂建物が存在したことを物語る。部材は精美で建物も莊嚴であり、格も非常に高く、皇室宮殿の規模を示している。同時に、拓跋鮮卑という少数民族の歴代執政者の革新性と勇壮な気勢を知ることができる。

註

- (1) 王銀田、曹臣明、韓生存「山西大同市北魏平城明堂遺址 1995年の発掘」『考古』2001年第3期。劉俊喜、張志忠「北魏明堂辟雍遺址南門発掘簡報」『山西省考古学会論文集』3。
- (2) 山西省考古研究所・大同市考古研究所・大同市博物館・山西大学考古系「大同操場城北魏建築遺址発掘報告」『考古学報』2005年第4期。
- (3) 資料は現在整理中。

- (4) 大同市博物館「大同北魏方山思遠寺遺址発掘報告」『文物』2007年第4期。
- (5) 雲岡石窟研究所・山西省考古研究所・大同市博物館「雲岡石窟第3窟遺址発掘簡報」『文物』2004年第6期。
- (6) 中国社会科学院考古研究所編著『中国社会科学院考古研究所考古博物館洛陽分館』文化藝術出版社。
- (7) 左雁・張海嘯「山西大同出土北魏大代瓦當」『中國文物報』1999年1月10日。
- (8) 『魏書』卷一 序記第一、中華書局校勘本、pp.7~9。
- (9) 『大同日報』2004年10月11日第5版。
- (10) 『魏書』卷九十四 趙黑傳、中華書局校勘本、p.2016。
- (11) 趙崇寧「北魏文字紀年殘瓦當」『考古與文物』1990年第2期。
- (12) 『魏書』卷二 太祖紀第二、中華書局校勘本、p.33。
- (13) 『魏書』卷四十八 高允傳、中華書局校勘本、p.1089。
- (14) 『魏書』卷一百二 西城傳、中華書局校勘本、pp.2261~2262。
- (15) 大同市考古研究所『大同雁北師院北魏墓葬』文物出版社、2008年。
- (16) 大同市考古研究所「山西大同七里村北魏墓群発掘簡報」『文物』2006年第10期、p.41。
- (17) 大同市考古研究所『大同雁北師院北魏墓葬』文物出版社、2008年、原色圖版35。
- (18) 大同市考古研究所「山西大同七里村北魏墓群発掘簡報」『文物』2006年第10期、pp.37,38,40。
- (19) 韓生存等「大同城南金屬金美斂北魏墓群」『北朝研究』1990年第1期、p.60。
- (20) 大同市考古研究所「大同湖東1号墓」『文物』2004年第12期。
- (21) 中国社会科学院考古研究所等「河北臨漳縣北城遺址勘探発掘簡報」『考古』1990年第7期。
- (22) 宿白「平城實力の集積と雲岡方式の形成と発展」『雲岡石窟第一』pp.178~179。
- (23) 『南齊書』卷五十七 魏虜傳、上海古籍出版社、上海書店第3本、p.104。



1. T201? 2. T510 ③:13 3. T410 ③
附圖 1 大同平城操場城1号建物出土瓦 (1:4)



1



2



3



4



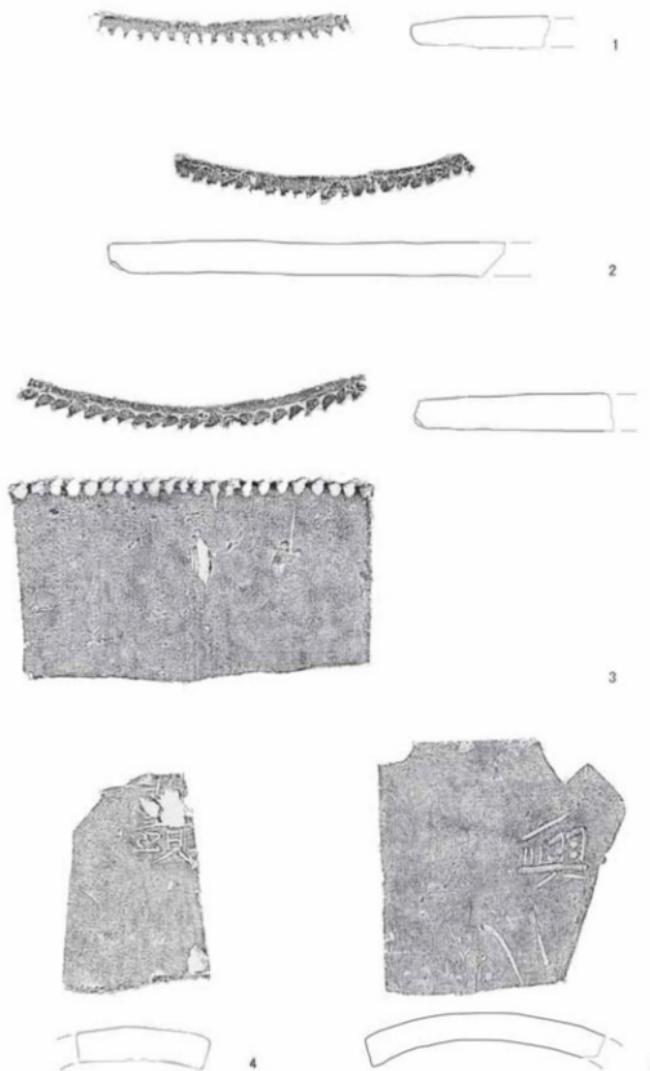
5



6

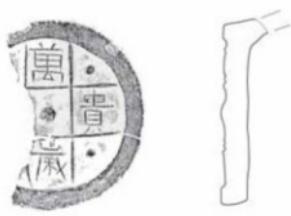
1. 未注記 2. T510 ③ 3. 未注記 4. T410 ③ 5. 未注記 6. T810 ③

附圖2 大同平城操場城1號建物出土瓦 (1:4)



1. 未注記 2. T703-40 3. T703-43 4. 未注記 5. 未注記

附圖 3 大同平城明堂遺跡出土瓦 (1:4)



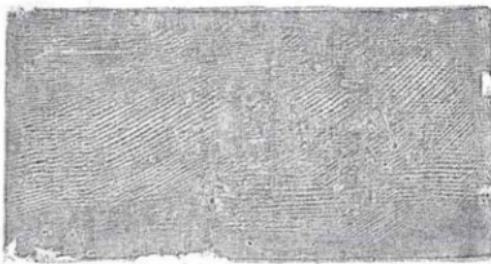
1



2

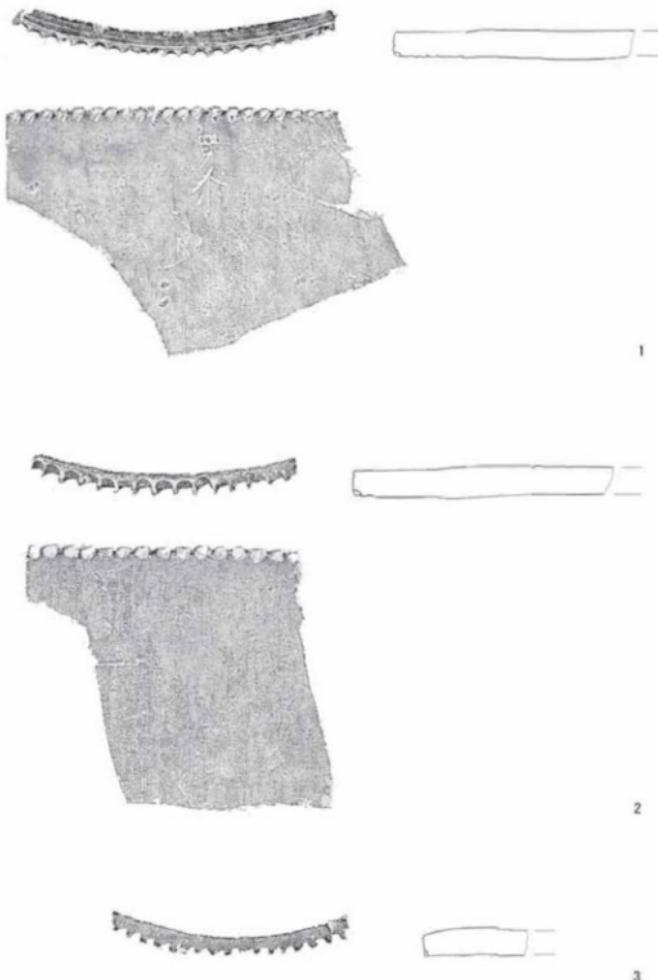


3



4

1. 方山思遠寺未注記 2. 方山思遠寺未注記 3. 方山未注記 4. 方山未注記
附図 4 大同方山思遠寺浮図および方山出土瓦磚 (1:4)



1. 未注記 2. 未注記 3. 未注記
附圖 5 大同平城遺跡出土瓦 (1:4)

2 北魏洛陽城出土瓦の考古学的観察

錢 国 祥・郭 晓 涛・肖 淮 雁

(中国社会科学院考古研究所)

A はじめに

北魏洛陽城は中国古代魏晉南北朝時期の重要な都城のひとつである。その都市の形態と建築技術は中国古代建築史上で重要な地位を占めており、都城研究上においても重要な対象である。1960年代から今日に至るまで、中国社会科学院考古研究所はこの都城遺跡で事前調査と発掘調査を実施してきた。また、考察や研究をおこない、重要な考古資料を獲得して成果をあげ、研究のための確実な基礎を築いてきた。

数十年来の調査研究により、北魏洛陽城遺跡で確認した北魏時代の建物遺構には、北魏内城の1号房址、内城中部の永寧寺遺跡、内城東城壁の建春門遺跡、宮城正門の閻闔門遺跡、宮城正殿太極殿遺跡、内城南郊の明堂遺跡、西外郭城内の大市遺跡などがある。

これらの遺跡からは大量の瓦が出土しており、なかでも北魏時代の宮殿建物あるいは格の高い建物で使用される磨研瓦は、上記したすべての遺跡から出土した。磨研瓦は北魏洛陽都城内の大型建物における重要な資料であり、建物の年代や性格、内部構成を理解するために重要な意義をもつ。以上のような認識に基づき、北魏洛陽城の磨研瓦について、製作技法と使用の両面から詳細な考古学的観察をおこないたい。

B 磨研瓦出土遺跡の概要

(i) 北魏内城南部1号房址

この房址は1963年に発見され、現在の偃師市首陽山鎮龍虎村西北の俗称「西崗」の高台にある。北魏内城南部のやや西寄り、宮城正門の南側の銅駝街東側に位置する(図1)。

この遺跡は古い版築基壇上に建設したもので、発掘した建物基礎は平面方形で、東西に長く、方位は5度振れる⁽¹⁾。版築の堀は残る高さが0.8m、東堀は厚さ2.1m、内壁の長さ11.8m。北堀は厚さ1.8m、内壁の残る長さ12.2m。南堀の内壁は2箇所外へ折れ曲がるところがある。厚さ3.5m、残長13.7m。西堀はすでに破壊され、残存していない。房址内の堆積は比較的単純で、耕作土の下には堀が倒壊して堆積した瓦礫があり、その厚さは0.3mある。出土した遺物はおもに瓦磚類で、平瓦、丸瓦、瓦当、瓦釘および獸面文磚の破片である。

この房址から出土した瓦は、種類が豊富で質がよく、豪華な建物の基礎とわかる。発掘担当者は、『洛陽伽藍記』に記載された官署府廟の方位に基づいて、この房址は北魏の宗正寺か

大廟建物の一部ではないかと推測している。

上述したように、1号房址から出土した瓦磚類は、平瓦、丸瓦、瓦当、瓦釘および獸面をあしらった磚の破片である。これらの瓦は表面を磨いており、あきらかに北魏時代の建物遺構である。以下、個別に叙述する。

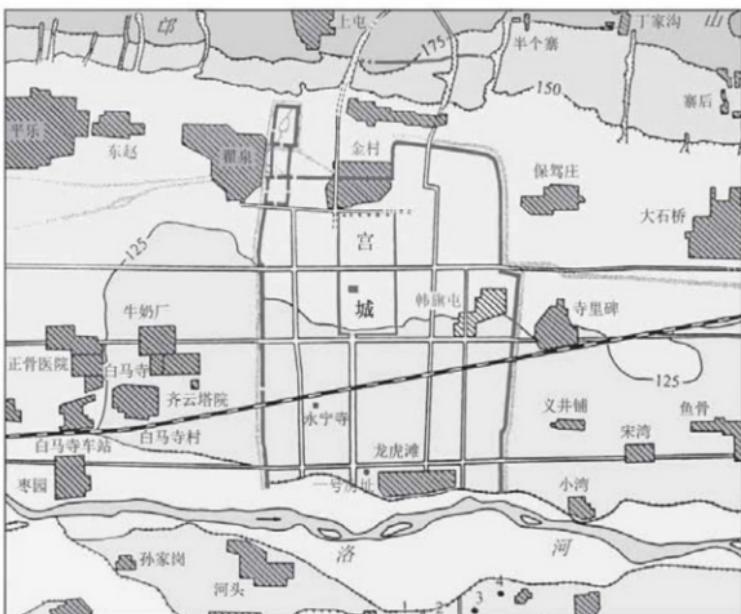


図1 北魏1号房址と永寧寺の位置図

平瓦 平瓦の量は非常に多く、一端は幅が広く一端は狭い頭広尾狭の形である。完形の平瓦は3点あり、字を刻んだ瓦片は663点ある。これらの平瓦は深褐色で光沢があり、胎土は堅緻でつくりもよい(図2)。凹面は研磨し、さらに陶衣をほどこしている。一部の瓦の凸面の広端に近いところには、幅2cmの朱色帶がある。通常の平瓦の凹面は研磨され、光沢があり、かつ黒色の陶衣をほどこし、深い黒色で豊潤な光沢を有する。凸面は凹面よりも粗雑で、全体にケズリ調整し、両側面もケズリ調整している。

出土瓦を観察すると、平瓦の広端面に手でひねり出した波状文をかざるのは、すべて軒平瓦である。波状文には2種あり、ひとつは花弁状に捻りだしている(附図1-3)。もうひとつの波状文は三角形の鋸歯状を呈する(附図2-1)。波状文の具体的な施文法は、広端面に1条の凹線を描き、線の凸面よりに波状文をキザミ出す。1号房址から出土したものは单層

の軒平瓦である。

1号房址出土の完形の平瓦から推算すると、この類の平瓦は長さ49.5cm、幅33cm、厚さ2.5cm、重さ12kg。平瓦の大きさや重さにはこまかに差異があるが、全体からみればこれらの瓦には規格があり、大きさの差異も小さいと思われる。



図2 1号房址出土平瓦

丸瓦 丸瓦の量も多く、文字をもつ丸瓦片は248点ある。この類の丸瓦は凸面を研磨し光沢があり、凹面は布目で胎土は緻密で堅く、全体は比較的重厚である(図3-1、3-2)。玉縁は円弧形で、一般に下向きになる。一部の玉縁凸面上には文字が刻まれるか刻印が押されている(附図2-2,3、附図3-1)。丸瓦の凸面は、平瓦の凹面と同様、すべて丁寧に磨かれている。全体に青黒いか浅い灰色を呈する。丸瓦凸面と平瓦凹面の技法は完全に一致している。丸瓦の凹面にはすべて布目があり、布目はかなり明瞭で、一部には布の皺の痕跡もある(附図2-2,3、附図3-1,2)。丸瓦の側面も多くはケズリ調整されるが、一部には筒の内側から切り込みをいたれた分割痕跡が残る(附図3-2)。丸瓦のうち、あるものは凸面に文字が刻まれ、狭端側は薄く削られている。

完形に近い丸瓦の寸法をはかると、長さ49.5cm、径13cm、厚さ2.3cm、重さ約8kgある。丸瓦の長さは、同じ遺跡で出土した平瓦の長さと完全に一致する。

軒丸瓦 出土した軒丸瓦にはおもに2種類あり、蓮華文と獸面文である。

蓮華文瓦当の数量はかなり多く、50点以上ある。おもに複弁蓮華文で、色調は青灰色、焼成温度は高く良質で、表面は黒色で光沢がある。つくりは精巧で、図案も整っている。瓦当のなかでは複弁六弁の宝相蓮華文がもっとも多く、瓦当径15.6cm、厚さ1.6cmある(図3-1、附図1-2)。その瓦当の外縁は幅があつて平らで、外縁の内側には、凹凸の明瞭な六弁宝相蓮華文の図案をかざる。蓮華の構図は斬新で、線も流麗であり、あたかも露のなかの蕾のように活力にみちている。中房は突出した円形乳釘文で、その周囲には小さな珠文が一周し、蓮華の花托を構成する。花弁は幅の広い複弁で、比較的肉厚であり、瓦当の外縁より高く隆起する。宝相蓮華文瓦当には七弁や八弁のものが少量ある。また、別に出土した小型の蓮華文軒丸瓦は八弁の宝相蓮華文で、瓦当径10.7cm、厚さ2cmある。

單弁八弁の蓮華文の瓦当は、浅い灰色を呈し、瓦当径もやや小さい。外縁は幅があり、平たい。中房はいわゆる蓮華の花托状で、中房上には7つの珠文をかざる。つくりは粗く、八弁の花弁は単弁で、幅も狭く短い。

獸面文瓦当は15点あり、瓦当径は15.6cm、厚さ1.6cmある（附図1-1）。胎土は精良で青灰色を呈する。焼成温度はかなり高く、表面は黒光りしている。瓦当の外縁は幅があり、平たい。外縁内には、かなり高く突出した獸面の浮き彫りをかざる。

瓦釘 この遺跡から出土した瓦釘は50点以上で、扁平な菱角状を呈する。上部には菱形の透かしが4つあり、下部は扁平で長い柄をもつ（図3-1）。色調は浅い灰色で、長さ31.5cm、幅14.5cm、厚さ1.4cm。この菱形の瓦釘は六弁宝相蓮華文瓦当の丸瓦部に差し込む。

獸面磚 1号房址からは、灰褐色を呈する獸面磚が2点出土している。磚にはかなり凶暴な獸面文様が浮き彫りされている。見開いた眼と縦耳をもち、口は大きく開き、牙がみえる。小ぶりの方は長さ43cm、幅34cm、厚さ5cmである（図3-3）。大きい方は長さ57cm、幅45cm、厚さ6cmある。2点の獸面磚は、それぞれ房址の南壁の内側の東西両端の瓦磚堆積から出土した。磚の背面は平滑で獸の両目には孔が空き、おそらく釘を打ち込んで貼り付ける貼磚（すなわち鬼瓦）であろう。これらの獸面磚の表面は陶衣を一層塗ったようで、研磨し、青黒い光沢面をつくっている。研磨と陶衣を施す方法は平瓦、丸瓦、瓦当と一致する。



図3-1、3-2 1号房址出土の軒丸瓦と瓦釘、丸瓦



図3-3 1号房址出土獸面磚

鶴尾 鶴尾が1点出土している。色調は灰褐色を呈し、比較的大きい。尾部は翼状を呈するが、破損が激しく復元できない。この鶴尾の破片の表面は、平瓦、丸瓦、瓦当や獸面磚の表面と同様に、陶衣を施して研磨している。

(ii) 北魏永寧寺遺跡

永寧寺は北魏洛陽城内最大の仏教寺院で、文献によると宮城西南部にあった大尉府の西側に位置し、孝明帝熙平元年（516）に創建された。当時の皇太后胡氏が皇室の資金を用いて造営したが、孝武帝永熙3年（534）2月に塔が落雷で消失し、永寧寺もこれ以後破棄された。

70年代から90年代にかけて、中国社会科学院考古研究所はこの寺院址に対して度数発掘調査をおこない、伽藍配置を確認して瓦磚の出土資料を得た⁽²⁾。寺院は北魏洛陽城内城の西

南部に位置し、宮城の南約 500m、銅駄街の西約 200m にある。寺院の平面は長方形を呈し、四面は堀で囲まれており、南北 301m、東西 212m ある。寺院の中央には高大な木塔の基壇があり（図4・5）、これは寺院のなかでもっとも残りのよい建物基壇である。木塔の基壇は約 38.2m 四方で高さ 2.2m。中は版築で充填され、基壇外装は青石（石灰岩）の切石を積み上げて構築し、4 面に各 1 基の階段がある。木塔の基壇は、地下に 100m 四方、深さ 6 m の掘込地業をおこなっており、建物の規模は巨大である。このほか、寺院の南門と西門も発掘調査をおこなった。南門は殿堂式の山門で、規模が大きい（図6）。東門、西門（図7）の規模は南門よりやや小さい。



図4 永寧寺塔基壇遺址



図5 永寧寺塔基壇第一重前の堀



図6 永寧寺南門基壇址



図7 永寧寺西門基壇址

塔基壇と寺院の門遺構の発掘調査では多くの瓦磚が出土した。平瓦、丸瓦、瓦当、獸面磚、鶴尾の破片などがある。永寧寺遺跡の創建と廃絶の年代はかなり明確で、これらの遺物は北魏時代の瓦の重要な資料である。

平 瓦 永寧寺遺跡からも多くの磨研平瓦が出土している。50 点以上を採集しているが、すべて破片で完形品はない。平瓦の規格、胎土、色調と製作技法は、北魏 1 号房址から出土した大量の磨研平瓦と基本的に一致することから、北魏時代の瓦である。これらの平瓦は比較的重厚で、胎土も精良・緻密。焼きも硬く、凸面には研磨した痕跡があり、色調は青灰色を呈する。凹面は黒灰色で光沢があり、厚さは一般に 2 ~ 3 cm である。

平瓦のうち、狭端は平らに整えられ、広端は調整するか施文しているものがある。文様をもつ平瓦は 1 号房址よりも種類が豊富で、単層の軒平瓦だけでなく（附図 5）、重層の軒平瓦

もある（図8、附図4-5）。単層か重層の文様をもつ平瓦は、丸瓦の瓦当と同様に、軒部分を装飾する軒瓦である。これらは平瓦で文様をもつ最古級の例であり、後世、軒平瓦文様が多様化していく雛形となる。



図8 北魏永寧寺から出土した重層の波状文をもつ磨研軒平瓦

丸瓦 永寧寺から出土した磨研丸瓦も破片である。20点以上を採集している。丸瓦も磨研平瓦と同様、全体に重厚で胎土は精良。焼きも堅く、表面には研磨痕跡がある。色調は鮮明な青灰色を呈し（附図6-3）、凹面は黒灰色で光沢がある。丸瓦の直径は15cm前後で厚さは2.3cm。玉縁は比較的長く、肩が高くて傾斜がきつい。玉縁の長さは3.5~6cm、肩の高さは1~1.4cmある。

軒丸瓦 永寧寺遺跡から出土した北魏時代の瓦当はすべて範型で成形している。瓦当に使用する胎土は非常にきめ細かく、水簸している。瓦当は円形で色調は鮮やかな青灰色を呈する。瓦当表面は丹念に研磨し、陶衣を塗ったように青黒色か灰褐色の光沢を呈する。これらの瓦当は、文様から蓮華文、蓮華化生文、忍冬文、変形忍冬文、獸面文など数種類に分けられる。蓮華化生文や忍冬文の瓦当は、仏教寺院のために特に用意されたのであろう。

忍冬文あるいは変形忍冬文の瓦当（図9-2・3）は少數で、永寧寺でも比較的特徴的な瓦当である。

蓮華化生文の瓦当は、花弁が幅の広い宝相式で中房は仏像になっている（図9-1、附図4-4）。仏像が蓮華の中から生まれるという图案は、想像力ゆたかで、仏教の繁栄と密接な関係にある。この種の瓦当は、近年、山西省大同や内蒙ゴル和林格爾などからも出土しており、何らかの関係があると思われる。

永寧寺遺跡から出土した蓮華文瓦当は、完形あるいは復原した資料が20数点ある。その中房には蓮子を配し、複弁蓮華文（図9-4）、単弁蓮華文（図9-5）があり、蓮華文の変遷の過程で重要な位置を占める。

獸面文瓦当はおもに2種類の图案からなる。1種は数量が多く、その表情は凶暴で目は多角形で眼窓が突出する。短い鼻は穴を上に向け、耳は小さく先端を尖らせた円形で、両目外側上方に配置する。口は大きく開き、ニンニクの房状の歯と鋭利な犬歯をむき出しにし、口角は鼻より高い位置にある。額には3条の皺があり、唇の下には顎鬚が表現されている（附

図4-1・2)。この種の獸面文瓦当は漢魏洛陽城ではもっとも一般的である。

このほか、双角をもつ獸面文の瓦当は、獸面の内外に弦文と珠文を飾り、獸面の形状も龍の頭に非常に似て、ほかの獸面文とは明らかに異なる。ただし数量は少ない(図9-6、附図4-3)。この種の図案は、獸面文瓦当の原型を研究する際に特に注意する必要がある。

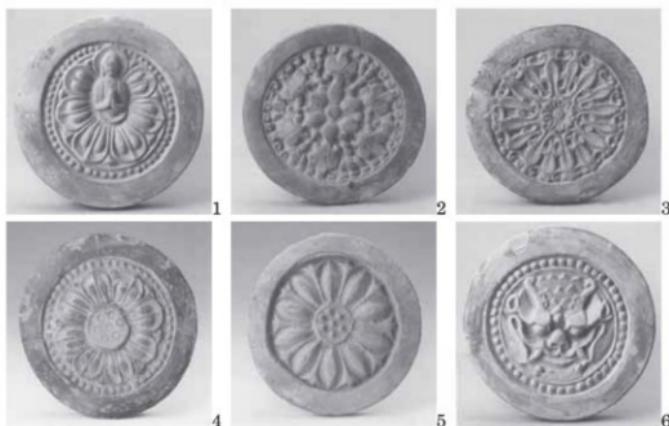


図9 北魏永寧寺遺址の北魏時代の瓦当

獸面磚 永寧寺遺跡出土の獸面磚の数量は多いが、完形品ではなく、多くは磚の端部か獸面部の破片である。獸面の特徴は、2脚の前脚が上向きの鼻の獸面の両側であぐらをかいていいるが、獸面の全体を復原できる例はない。獸面磚の表面は黒灰色の光沢面を有し、北魏の平瓦、丸瓦、瓦当の上に陶衣をかけ研磨した光沢のある面と同じ製法である。

鶴尾 西門遺跡から出土した鶴尾の破片が10数点ある。すべて鱗の縁部分の破片で、全体を復原することはできない。ただし、おおかたの形状は北魏1号房址出土の鶴尾の破片と類似している。これらの鶴尾の表面も黒灰色で、光沢のある製法である。

C 瓦の製作技法の観察

北魏洛陽城の発掘調査で出土した大量の瓦は、北魏時期の瓦の製作技法および建物の特徴を研究するうえで、きわめて価値のある基礎資料である。磨研瓦はその大多数を占め、大量の磨研瓦片をとおして当時の瓦製作の過程を観察することができ、古代の造瓦技術を復原するための重要な資料となる。以下の考察では、研磨した丸瓦、平瓦、瓦当を中心とし、鶴尾や獸面磚などの磨研瓦類については別に論じたい。

(i) 磨研瓦の規格

1号房址と永寧寺遺跡の磨研瓦の規格については簡単に紹介したが、平瓦の寸法は、一般

に長さ 49 cm、幅 33 cm、厚さ 2.5 cm である。丸瓦は、一般に長さ 49.5 cm、直径 13 cm、厚さ 2.3 cm、玉縁の長さは 5 cm ほどである。

北魏洛陽宮城の闕闌門遺跡から出土した磨研瓦の規格もだいたい同じくらいで、発表された資料によると、平瓦は、一般に長さ 48.2 cm、広端幅 34 cm、狭端幅 28.5 cm、厚さ 2~3 cm である⁽³⁾。丸瓦の長さは 43.5 cm、直径は 13~16 cm、厚さ 1.5~2.0 cm で、1 号房址出土の丸瓦と近似し、一部の丸瓦の瓦当寄りの凸面には、方形の瓦釘を差し込む孔がある。

北魏時代の磨研瓦の規格はかなり大きく、重い。大型建物に使用する瓦の形状はかなり大きく、その製作技法は小型の瓦にくらべて複雑である。この技法の考察は北魏時代の造瓦技術あるいは建築を研究する際の突破点となるだろう。

(ii) 磨研瓦の製作技法の考察

出土瓦をみると、その製作技法はかなり高度である。磨研瓦の破片の断面は、製作技法を研究する際に参考になる。以下では、出土瓦の観察から製作過程の各段階を考察する。

瓦の胎土の水築 破片の断面観察をすると、磨研瓦の胎土は一般に非常にきめ細かく緻密で、色調は青灰色か灰白色を呈する。胎土にはわずかながらその他の物質も含まれている。この土は水築していると考えるとなる。胎土の成分分析はおこなっていないが、これまで発掘した同時期の瓦窯跡と考え合わせると、胎土は近隣の黄土であると推測できる。断面にみえる土の色は一般に灰色で、わずかに白色がある（図 10）。円形の瓦当の色調は深灰色である。



図 10 瓦の色調と光沢の観察

粘土紐巻上げ法あるいは粘土片貼り付け法 磨研丸瓦の凹面には、布目以外に、粘土紐巻上げの痕跡をみることができる（図 11）。粘土紐と粘土紐の間には、不規則な曲線の隙間があり、これは粘土紐を重ねているときにできたものである。粘土紐の幅は約 2.5~6 cm と不均等で、この方法は磨研平瓦を作成するときも適用しており、平瓦の凹面に粘土紐の痕跡をみることができる（附図 5）。

比較的大きい平瓦には、大きな粘土片を貼り付けて作る方法が採用されており、出土した平瓦の破片は粘土片どうしの結合部から断裂している。したがって、粘土紐巻上げ技法と粘土片貼り付け技法は、製作時の模骨のうえに粘土を置いていく際に 2 つの方法があることを示している。これは轆轤で円筒を調整する前段階となる。



図11 粘土紐巻き上げの痕跡

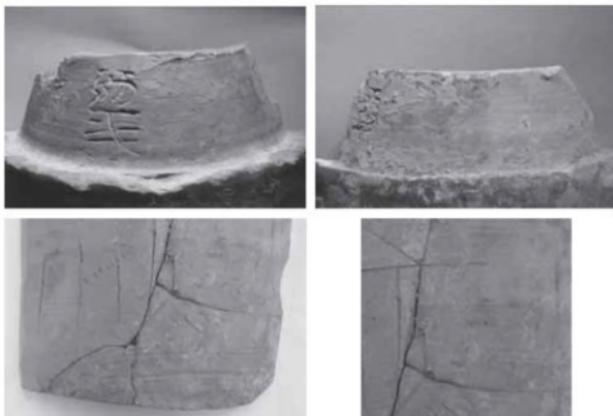


図12 轆轤の回転痕跡

輶轤による調整 粘土紐巻上げ法あるいは粘土片貼り付け法を採用する際には、粘土塊（円筒の状態）にある程度手を加えた後、必要な瓦の形に整形する。輶轤を使用して粘土塊の形をととのえ、表面を調整することができる。この技法の過程について観察した。

磨研丸瓦は凸面を研磨しているので、その輶轤の回転痕跡は消えて残らない。しかし、研磨していない玉縁の凸面には、はっきりと輶轤の回転痕跡が残る。磨研平瓦の凸面は葺いたときに外に露出しないため、研磨していないので回転痕跡が残っている。観察すると、平瓦凸面および端部には多くの輶轤の回転痕跡があるが、平瓦凸面は輶轤の調整にもかかわらずその表面は必ずしも平滑でない。これは、平瓦凸面が外に露出しないため、丁寧な調整を必要としないからであろう。

分割 輶轤による調整後、粘土の円筒を分割する必要がある。分割方法は技術の進歩の度合いによって異なる。北魏の磨研平瓦の側面はほとんど調整されているので、観察することはできないが、磨研丸瓦の側面は一部調整していないものもあり、分割の痕跡が残っている場合がある。北魏の磨研丸瓦の凹面側縁（布目に近い方）には、工具による縱方向の分割痕跡がある。刀による分割痕跡は筒状の模骨の湾曲に沿っているので（附図3-2）、おそらく

く模骨の表面に、あらかじめ切り込みをいれる工具がつけられていたのであろう。

粘土紐巻上げや粘土片貼り付けをおこなうときに、粘土は自然と内側から切れ目がはいるが、外側の粘土は切れずに連結している。観察時に注意したのは、丸瓦の凸面に自然にはいったひび割れがあり、平滑でないことである。円筒を模骨からはずしたあと、まだ乾かないうちに円筒に軽い力がかかり、内側の切れ目に沿ってひびが入ったものと思われる。

ケズリ 平瓦の凸面は、一般に葺き土に密着させてるので、露出しない。平瓦の凸面は、凹面のように研磨して水を流れやすくする必要はないので、凸面には削った痕跡がのくる。凸面のケズリは通常、縦方向で、平瓦の側面に平行している。ケズリ痕跡は多くのところで重複する。一般にケズリの幅は2~4cmほどで(附図2-1)、長さは一致しない。ケズリの痕跡は表面の平滑度合いによって異なる。ケズリの施された面は比較的平滑で、鋭利な刀などを使用したに違いない。ケズリ痕跡は側面近くに集中している。磨研丸瓦の凹面には側縁近くに縦方向のケズリの痕跡があり、その幅は2cmほどである。

研 磨 北魏時代の磨研瓦の表面はすべて光沢があり、明らかに研磨している。平瓦と丸瓦の粘土円筒の製作では、粘土紐巻上げか粘土片貼り付けの方式を採用している。表面に凹凸ができるることは避けがたいが、木製の轆轤型模骨の表面でも光沢を出すことは不可能である。瓦の表面の平滑の程度はすべて研磨の工程による。一般に、平瓦凹面、丸瓦凸面をすべて研磨している(附図2-3)。研磨は非常に緻密で、何度も繰り返している。

陶衣をほどこす 北魏の磨研瓦には、一層の薄い黒色の陶衣があり、一般に平瓦の凹面、丸瓦凸面、瓦当面など露出する部分に施す。露出しない部分、つまり平瓦凸面、丸瓦凹面、瓦当裏面にはおこなわない。出土した平瓦の凹面には緻密な刷毛の痕跡があり(図13-1)、これは陶衣を塗るときについたものである。刷毛の痕跡が細かいのは軟質の毛で塗ったからであろう。陶衣と瓦自体はかなり密着しており、非常に薄い層をなしている。出土した磨研瓦のうち一部は陶衣が剥落しているものがある。しかし、大部分の陶衣は密着しており、わずかに細かい亀裂が入る程度である(図13-2)。窯入れする前に陶衣を塗った資料があるので、陶衣を塗るのは瓦を乾燥させてから焼成する前までであろう。



1 陶衣を塗った縦方向の痕跡



2 陶衣の亀裂

図13 陶衣の観察

軒丸瓦の製作 瓦当は非常に精良で、瓦当面の文様の彫刻も精密である。とくに獣面文瓦当と蓮華化生文瓦当はもっとも出来がよい。精良な瓦当の製作技法について考察する。獣面文瓦当と蓮華文瓦当では、瓦当面の文様は範型を用いて作成し、そのあと少し彫刻している。獣面文瓦当の鼻の穴の作り方からみると、鼻孔はやや内湾しているので、范で作ることはできない。大部分は型押しで作成したのち、個別に一部の装飾を施すのである（図 14）。



1 獣面文瓦当の観察



2 獣面文の細部の加工痕跡

図 14 瓦当面の製作痕跡の観察

今回観察した磨研瓦当の中心文部分と外縁部分は、一体で型押ししてつくっている。

瓦当本体を製作した後、どのようにして丸瓦と接合するか。時期が異なれば、その方法も変わってくる。今回、この点に注目して観察した。大部分の瓦当は、出土した時点ですでに丸瓦部がはずれており、そのはずれた部分をみると接合方法を知ることができる。磨研瓦当裏面の接合部には、一般に刀状の工具で凹凸のある細かいキザミをつける。こうすることで丸瓦を接合しやすくする（図 15）。丸瓦を接合した後、丸瓦の凹面と瓦当裏面に接合粘土を加え、接合を補強しているようで、接合粘土の痕跡は多くの瓦当裏面に確認することができる（図 16）。接合粘土の厚さは一定せず、薄いもの、厚いものがある。



図 15 瓦当と丸瓦の接合部のキザミの痕跡

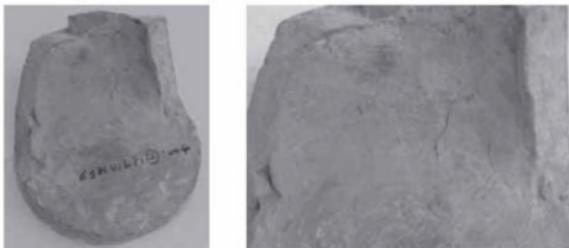


図16 瓦当と丸瓦の接合部の接合粘土の痕跡

軒平瓦の施文 軒平瓦は、美観を施すために露出する部分に装飾を加える。これは北魏時期の磨研平瓦でとくに目立つ。一般的の施文方法は、平瓦の広端面を工具で上下に2分する(附図4-5)。平瓦の広端面を2層か(附図5)、数層に分ける場合もある。つぎに波状流水曲線文を施す。その施文方法は2つあり、ひとつは指で押圧する方法(附図6-2)、もうひとつは刀状工具でキザミを入れる方法である(附図6-1)。これらは同時期に存在する。

以上は、出土した瓦のうち観察できる現象だけに限ったものである。観察した現象から出した推論もあるが、すべては考古学の資料から導き出したものである。以上に基づいて、北魏時期の磨研瓦の製作工程を描き出してみたい。

D 磨研瓦の製作技法

Cの瓦の観察は、北魏時期の磨研瓦の製作技法を追究する手がかりとなった。また、磨研瓦の製作技法については、瓦上にその記録が残されている。北魏洛陽内城の中南部にある1号房址から出土した大量の瓦には刻字があり、製作工程と関連する文字である。文字と瓦の考古学的観察を結びつけると、この時期の瓦の製作工程の大部分を復原することができる。

上述の瓦の観察をとおして、北魏の丸瓦と平瓦の製作工程は、以下のような主要な段階を想定できる。

- ① 粘土を水簾する。
- ② 粘土片や粘土紐を巻き上げるか、重ねて成形する。
- ③ 輪轤上で粘土円筒を調整する。
- ④ 円筒を分割する。
- ⑤ 分割した生瓦をケズリ調整する。
- ⑥ 生瓦を研磨する。
- ⑦ 生瓦に陶衣をかける。
- ⑧ 生瓦を焼成する。

このほか、軒平瓦の場合は施文する工程、軒丸瓦では瓦当と丸瓦を接合する工程がある。

再び北魏洛陽内城中南部の1号房址の出土瓦の製作技術の記録を見てみよう。1号房址から出土した文字瓦は計911点で、そのうち刻字瓦が868点、印文瓦が43点ある。刻字系の瓦工人は、瓦が乾燥する前に文字を刻んでいる。刻字の内容は、製作工程の種類や姓名と製作の時間である。まだ乾燥していない瓦に記録した工程なので、記録した仕事内容の大部分は生瓦の製作と関係するものである。

刻字が言及する各種の工程は、『遺主』、『輪』、『削』、『昆』、『磨』、『匠』である。目下、学界では『遺主』と『匠』について論争がある以外は確定しており、出土瓦の観察からも裏付けられている⁽⁴⁾。

上述の瓦の胎土や色調の観察から、製作の第1工程は粘土の水鍛であるが、この段階はまだ円筒になっておらず記録もないため、上述の刻字とは関係ないだろう。

粘土を水鍛した後、粘土の塊をつくって扱いやすくする。大量の粘土は大きな塊にして捏ねて、粘土紐や粘土片をつくる原料とする。この段階もまだ円筒になっておらず記録もないが、製作工程の前後関係からこの段階を第2工程とする。

粘土紐巻上げは木質の轆轤上の模骨でおこなうもので、この段階の最後には粘土円筒の表面を調整する。ここで瓦の刻字の「輸入」の出現となる。轆轤で調整後に円筒を分割するが丸瓦の観察によれば、この分割方法は轆轤の一工程であり、分割後に生瓦は轆轤から取り外され、つぎの工程へと進む。分割は轆轤作業のなかでの一工程であり、瓦の刻文では記録されない。したがって、轆轤と分割は第3工程である。

1号房址から出土した刻文には、「削人」の記載が比較的多い。瓦を削る技法は、前述のように、磨研平瓦の凸面の側面近くにケズリの痕跡があり、分割後に平瓦にケズリ調整をおこなったものである。丸瓦凹面の布目部分にもケズリの痕跡があり、轆轤台からはずして瓦を分割してから削られたことを裏付ける。瓦のケズリ調整は生瓦を整形するときにおこなうもので、第4工程である。このとき、生瓦の表面は文字を刻むのに最適な状態で、「削人」に関する記載はかなり多く、たとえば「六月十三日削人宋」などがある。

ケズリは瓦の表面の初步的な調整であり、瓦の表面に光沢を出すためには、削るだけでは十分ではない。研磨面は丸瓦凸面、平瓦の凹面（すなわち轆轤回転時の模骨に接する部分）、瓦当の外縁と獸面磚の外縁と侧面に研磨の例がある。この工程について、北魏洛陽城1号房址から出土した刻文には、『昆』、『磨』の2字がある。たとえば「六月十六日僧朗昆元」、「磨護秉」などである。昆磨、つまり第5工程をへた後に生瓦は完成する。

その後、生瓦を乾燥させ、窯に入れて焼成する。乾燥した生瓦は硬くなり、刻文をするには不便である。したがって、この工程についての刻文は見あたらない。当然、湿った瓦のうえに刻んだ後にも工程はあるはずである。ある研究者は、「『遺主』は瓦窯の管理人である」というが、反対意見もあり、この論争は古文字研究の範疇に入るため、本文では議論しない。しかし、瓦の刻文がすべて造瓦工程の各段階であることは肯定できる。こうした方法は造瓦の全工程を管理するのに有益で、高品質な大量生産を可能にする。

E おわりに

本稿は、漢魏洛陽城から出土した発掘資料から、遺跡の時代的特徴を考慮し、北魏時代のもっとも典型的な磨研瓦について、あらゆる角度から考察してきた。その結果、北魏時代に製作された瓦の技法を理解することができた。同時に、出土した瓦の刻文から考古学的に観

察した製作技術の過程についても検討し、両者を相互に補いながらこの時期の磨研瓦の製作工程について分析を進め、かなり明確な認識をえることができた。

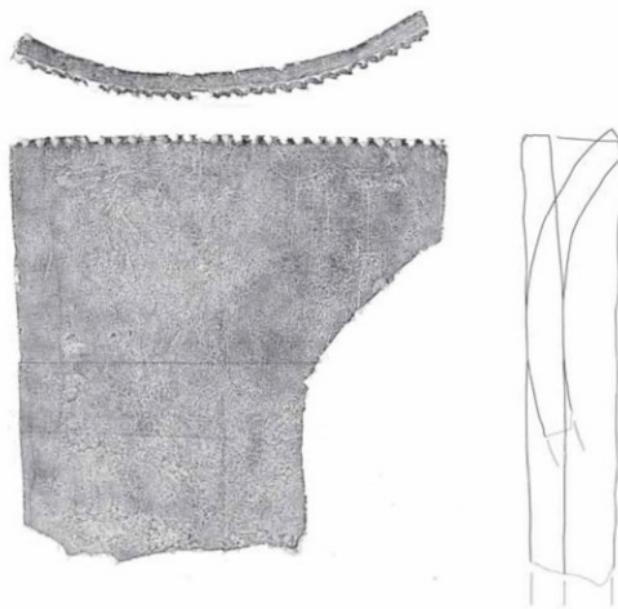
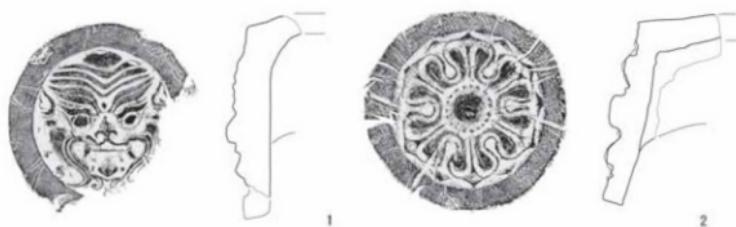
全体の製作工程は以下のとおりである。このうち、施文段階は瓦の種類によって異なる。

粘土の水築 → 粘土捏ね → 粘土紐巻き上げあるいは粘土片貼り付け → 粘土円筒の輪軸整形 → 分割 → ケズリ調整 → 研磨 → 陶衣かけ → 乾燥 → 窯入れ

北魏時代の出土瓦の観察は、都城考古学研究のなかの一課題にすぎないが、こうした研究は、北魏の生産形態、官営工房の技術や管理形態、造瓦技術ないし大型建物の特徴についての理解を深めていくことを可能にする。

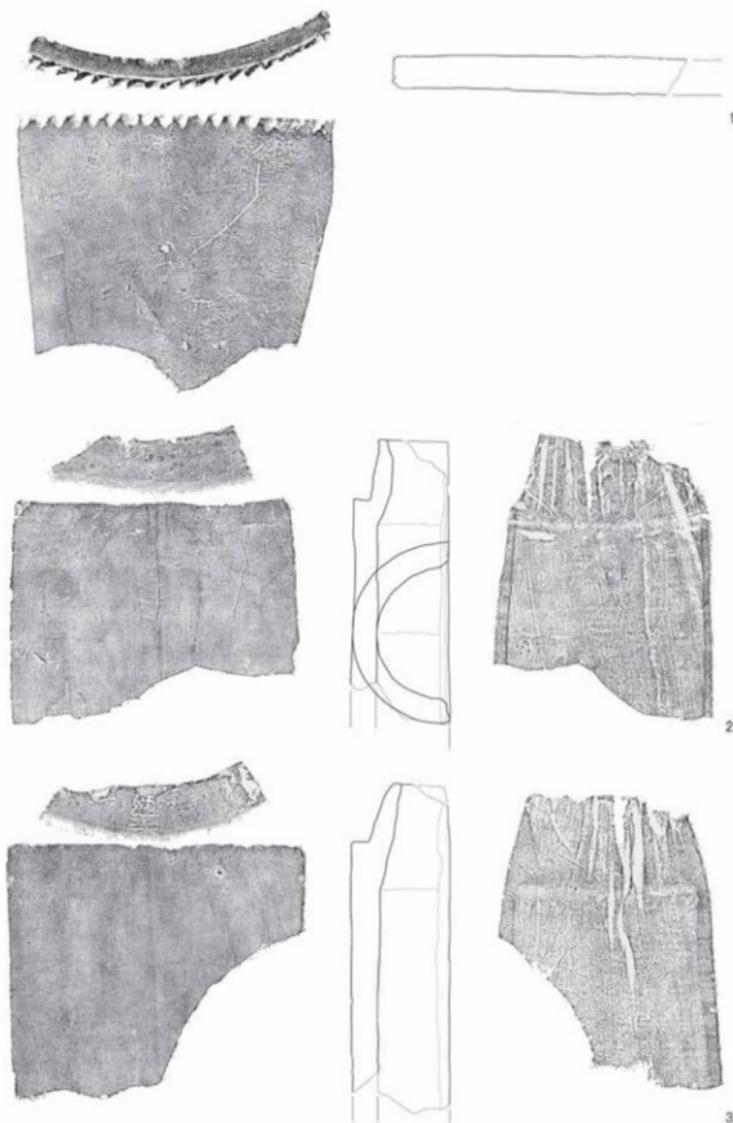
註

- (1) 中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城一号房址和出土的瓦文」『考古』1973年第4期。
- (2) a.中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「北魏永寧寺塔基发掘簡報」『考古』1981年第3期。b.中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊「北魏洛陽永寧寺西門遺址發掘紀要」『考古』1995年第8期。c.中国社会科学院考古研究所『北魏洛陽永寧寺 1979年～1994年考古發掘報告』中国大百科全書出版社、1996年。
- (3) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「河南洛陽漢魏故城北魏宮城闕闥門遺址」『考古』2003年第7期。
- (4) a.中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城一号房址和出土的瓦文」『考古』1973年第4期。
b.張克「北魏『瓦削文字』考」『文博』1989年第2期。



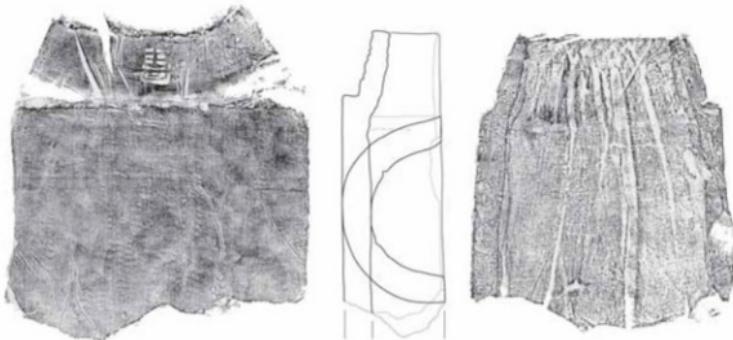
1. 63HWL F1 ② : 021 2. 63HWL F1?;013 3. 63HWL F1

附图 1 北魏洛阳城1号房址出土瓦 (1:4)

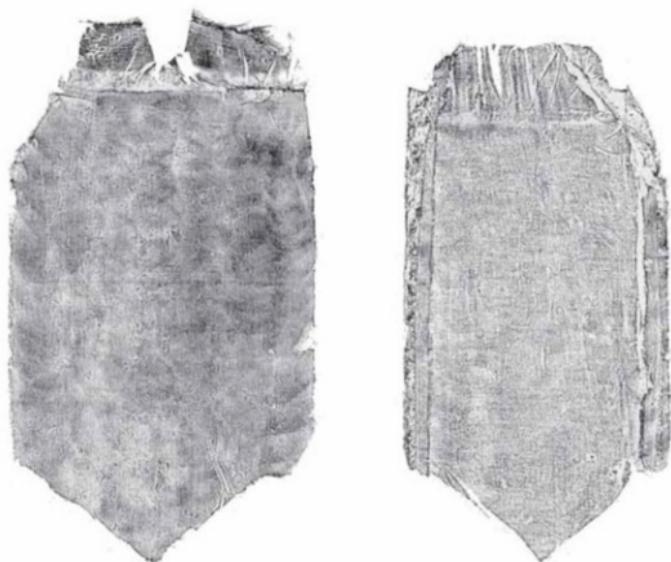


1. 63HWL F1 2. 63HWL F1 ②:40 3. 63HWL F1 ②:41

附圖2 北魏洛陽城1號房址出土瓦(1:4)

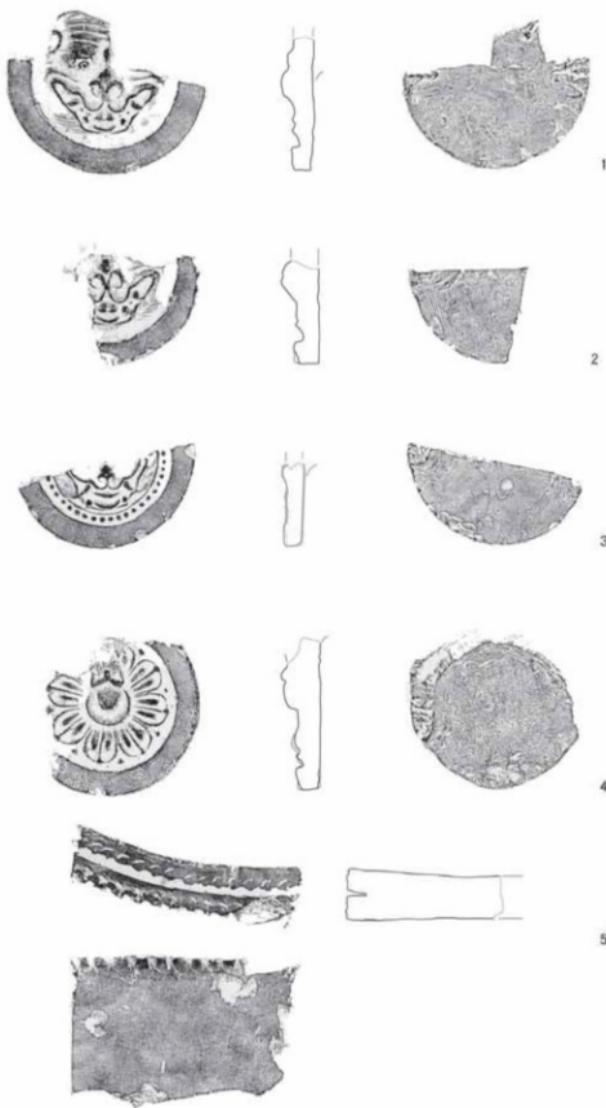


1



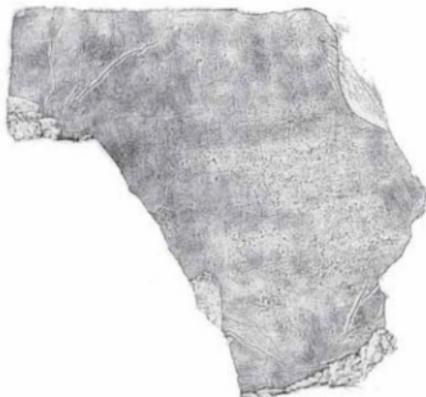
2

1. 63H WL F1 ② 2. 63H WL F1 ②
附图 3 北魏洛阳城 1 号房址出土瓦 (1:4)



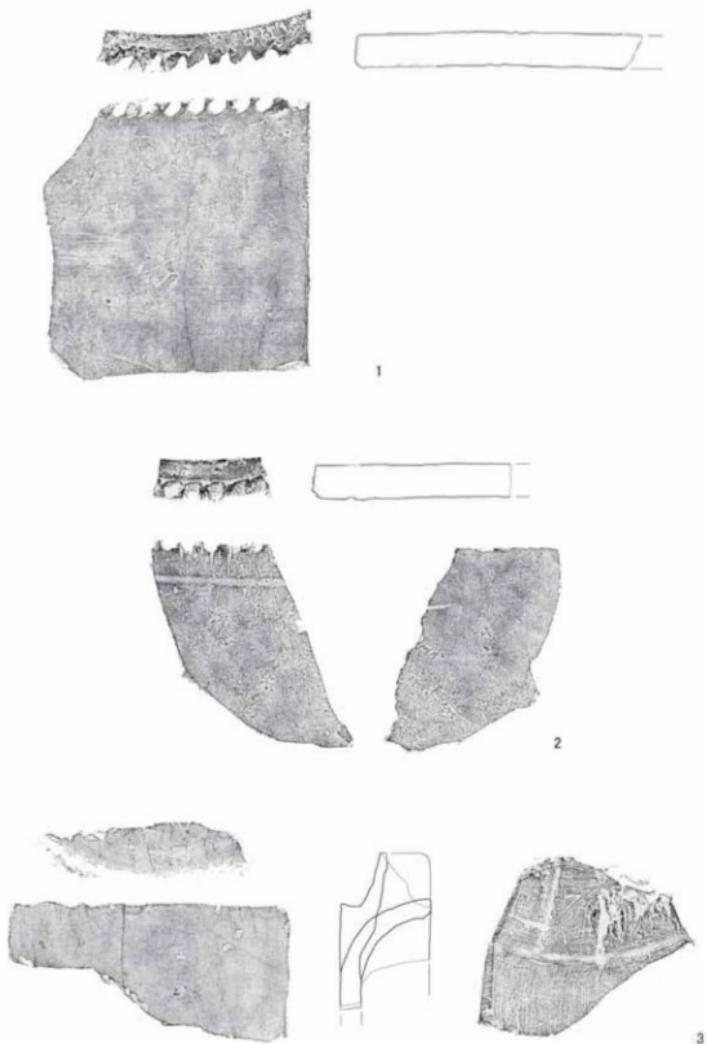
1. 80LYT11:3205 2. 79LYL1:3210 3. 80LYT14 ② 3143
4. 80LYT4:8182 5. LYL0:4186

附圖4 北魏洛陽城永寧寺出土瓦 (1:4)



LY404:189

附図5 北魏洛陽城永寧寺出土瓦 (1:4)



1. LY40:4187 2. LY:003 3. LY40:4188

附圖6 北魏洛陽城永寧寺出土瓦 (1:4)

3 郡城出土の北朝瓦の製作技法

朱 岩 石・何 利 群
(中国社会科学院考古研究所)

A 郡城の概要

郡城は曹魏、後趙、前燕、冉燕、東魏、北齊6代の都であり、遺跡は河北省臨漳県の西南20km、河南省安陽市から北へ18kmのところに位置し、南北に並ぶ2つの城址からなる。郡北城は曹魏時代に創建され、十六国時代の後趙、前燕、冉燕がここに都を定めた。その後、534年、北魏が分裂して、東魏が洛陽から郡城へ遷都した。文献では、このとき40万戸が移住したが、北城が荒廃し狭いことから、郡北城の南に南城を造営したとある。そして580年に北周の楊堅（のちの隋の文帝）が尉遲週の乱を平定し、郡城を破壊した。

1983年より中国社会科学院考古研究所と河北省文物研究所が合同で郡城考古隊を編成し、郡城において20数年、調査と発掘を継続している。その結果、郡城南北の城壁の方向、城門の位置、道路、宮殿区の分布などが判明した⁽¹⁾。また、郡南城の朱明門遺跡⁽²⁾、趙彭城東魏北齊皇家寺院⁽³⁾、郡城西の建物跡、窯跡、東魏北齊皇陵区の一部の墓葬を重点的に発掘した⁽⁴⁾。以上の調査と発掘は、郡城の都市構造に関する復原研究を大きく推進すると同時に⁽⁵⁾、大量の瓦磚類が出土したことから、北朝時期の瓦の製作技法やその変遷についても豊富な資料を提供した。



図1 郡城平面図

B 郡北城出土の瓦磚類

曹魏時代の郡城は郡北城ともいい、東魏の時に郡南城を造営したのちも郡北城は併用された。これまでの郡北城の発掘で大量の北朝瓦が出土しており、そのうち、銅雀三台、宮城西側の試掘などで出土した典型的な資料を以下に概述する。

(i) 軒平瓦

東魏北齊時期の郡北城出土の平瓦の多くは黒色か黒灰色を呈し、胎土は緻密で硬く、重厚である。凹面には光沢があり、一部に布目が残る。瓦をかざる1段あるいは2段の押圧波状

文の瓦には刻印があり、完形品は長さ41.5cm、幅31cm、厚さ2~3.5cmある。

標本87JYT14②：34の胎土は精良で灰色を呈し、残存長22.9cm、幅28.1~27cm、厚さ1.5cmある。凸面には格子状の叩きが施され、凹面の広端には方格文がある。凹面のほかの部位は布目である。広端がよく残り、指で押圧した波状文の一部に指紋が残る。平瓦の両側面は内側から外側にむかって切り込みがあり、切り込みの外側には破面が未調整のまま残る。分割の切り込みは、瓦の厚みの半分ほどまでである（附図1-1）。

標本88JYT19③：1の胎土は精良で黒灰色を呈し、長さ31.4cm、幅25~22cm、厚さ7.4~5.5cmある。広端面には2段の波状文をかざる。狭端は円い唇状を呈し両側面は内側に截面、外側に破面があり未調整である。截面は平瓦の厚みの4分の1ほどである（附図1-3）。

標本92JYT24①の胎土は精良で黒灰色である。広端に切り込みをいたあと、指頭で2段の波状文をかざる（附図1-2）。

（ii）軒丸瓦

丸瓦の多くは黒灰色を呈し、胎土はきめ細かく、硬く焼きしまって重厚である。凸面は光沢があり、研磨している。凹面は布目である。完形品は長さ41~48cm、幅15.5~18cm、厚さ1.8~2.5cmである。

標本92JYT29⑦：04は瓦当が欠けている。丸瓦部の長さ40.5cm、幅14.8cm、厚さ1.7cm。玉縁近くは平滑で、凸面に刻印がある。丸瓦部凸面の中央には瓦釘の孔があり、前端にはA1型の蓮華文瓦当がある（附図1-4）。

標本92JYT29⑦：220の瓦当の胎土はきめ細かく、表面は黒灰色を呈する。瓦当径17.5cm、厚さ1.9~2.2cmある。高く浮き出た単弁の蓮華文は、表面が黒色で光沢があるが、大部分は剥落している。八弁の蓮華文は弁の幅が広く、外縁に接近している。間弁はT字形で、蓮弁と間弁はともに外縁より高く突出する。中房には8つ（1+7）の蓮子を配する。瓦当裏面には小さな丸瓦がつき、接合痕跡とナデつけの痕跡が残る（附図1-5）。

標本92JYT29⑦：0254の瓦当は4分の1が残る。復原径約14cm、厚さ1.9cmである。泥質で灰色を呈する。瓦当面には宝相蓮華文をかぎり、外縁は幅が狭く、表面はかなり粗い。瓦当裏面は平滑で、丸瓦との接合するためにキザミをつけた痕跡がある（附図1-6）。

標本90JYT26⑤：09は、黒灰色を呈する軒丸瓦である。胎土は緻密で焼成は堅緻。瓦当は欠けている。凸面は光沢があり、黒光りした表面は一部剥落している。凸面中央には円孔があり、直径は1.2cm。おそらく瓦釘を差し込む孔であろう。丸瓦部凹面には布目があり、それをすり消した痕跡がある。丸瓦には蓮華文瓦当が接合され、複弁八弁で細長い間弁がある。中房は突出し、刺突で施した蓮子をかざる（附図1-7）。

標本86JYT13⑦：95の胎土は精良で、表面は黒灰色。瓦当径17.1cm、厚さ2.6~2.8cm。瓦当は浮き彫り状の蓮華文で八弁。弁は幅があり、中央が突出して弁端は反り返る。間弁はT字形で、中房には計7つ（1+6）の蓮子を配する。瓦当の表面は大部分剥落している。

瓦当裏面は平らだが中ほどは比較的粗いつくりで、周囲は平坦、瓦当と丸瓦の接合部は欠けている。接合部の縁にはナデつけ痕跡がある（附図1－8）。

標本86JYT13⑦：21は胎土が精良で、表面は黒灰色。瓦当径は12.7cm、厚さ1.2cm。瓦当は浮き彫りの蓮華文。八弁の間にはT字形の間弁があり、ともに瓦当外縁より高く突出する。瓦當の中房には7つの蓮子が配される。蓮弁の1つは欠けている。光沢があった瓦當表面は剥落している。裏面と丸瓦部の接合部は一部残り、工具の痕跡がある（附図1－9）。

（iii）磚

空心磚の92JYT29⑦：0209は破片で、残存長48cm、残存幅29.8cm、厚さ3.9～4.8cm。磚の表面には文字の刻印と文様があり、中ほどに朱雀と蓮華文の刻印がある（図2）。朱雀は高さ13.2cm、正面で翼を広げている。蓮華文は直径12.5cm、宝相で複弁、形式はIII式の蓮華文と同じである。磚の右側辺近くに重環文を刻印し、左側辺には「…齊天保… / …年造…」の銘がある。磚の上辺と下辺には忍冬文と回字文の刻印もある。



図2 磚（92JYT29⑦：0209）

C 鄭南城出土の瓦

鄭南城遺跡における最大規模の発掘は、1985年に実施した鄭南城正門の朱明門である。この城門の瓦磚類は一つの大型建物から出土した資料で、学術的価値はかなり高い。1990年代に鄭南城の性格について再検討した結果、確認した鄭南城は内城であり、外側には外郭城が存在している。したがって、90年代に発掘した鄭南城の西城壁の西、約1kmのところに位置する建物遺構、2002年発掘の趙彭城仏教寺院の塔基壇などは、東魏北齊鄭城の外郭城内の遺跡である。上述の地点から出土した瓦には共通性があり、また独自の特徴があるので、以下、出土地点別に記述する。

（i）朱明門出土の瓦

軒平瓦 鄭南城から出土した平瓦の表面はすべて光沢があり、一部の平瓦の端部には刻印がある。広端の文様から2つの型に分ける。

86JYT149②：01の胎土はきめ細かく、灰色を呈する。残存長15.3cm、幅27.5cm、厚さ2.7cm。凸面は無文で、やや凹凸がある。凹面は布目がある。広端面はほぼ完全に残り、上下二段に分けて工具で波状文を施す（附図2－4）。

85JYT141②：39の胎土はきめ細かく、灰色を呈する。残存長9.8cm、幅26.4cm、厚さ

2.8 cm。凹面、凸面はすべて光沢があり、黒灰色を呈する。広端に近いところには轆轤の回転痕跡があり、瓦の凹凸両面には一種の黒色物質を塗っている。広端面には深い沈線をいれて2段にし、さらに上下の層を2つに細分する。その後に指頭で波状文を施すので、2層の波状文装飾ができる（附図2-5）。

86JYT154 西拵張区⑤：08は、ほぼ完形品である。胎土は精良で、全体に濃い灰色を呈する。長さ50.7 cm、幅29.7～34.5 cm、厚さ2.8 cm。広端には沈線と押圧技法で2段の波状文を飾り、狭端部は丸く調整する。凸面の広端側半分は光沢があり、狭端側半分には轆轤痕跡が残る。また、狭端近くには刻印（おそらく五堯）がある。凹面はすべて研磨して、光沢がある（附図2-7）。

軒丸瓦 丸瓦と瓦当の表面は、基本的に濃い灰色を呈する。丸瓦凸面は光沢があり、凹面は布目。一部の丸瓦の玉縁凸面には刻印がある。

86JY T149②：50の胎土は精良で、全体に濃い灰色を呈する。瓦当径14.1 cm、厚さ1.5～1.7 cm。瓦当は浮き彫りの単弁蓮華文である。瓦当外縁は光沢があり、黒光りした色調を呈する。十弁の蓮弁はオーリーブ形で、中央の稜脊は明瞭である。間弁は三叉形をなす。中房には、管状工具で刺突した蓮子が7つ（1+6）ある。蓮弁は外縁より高く、中房は中くぼみとなる。瓦当裏面には、丸瓦のわずかな段や接合部分のキザミが残る（附図2-1）。

86JYT137②：51は胎土が精良で、全体に灰色を呈する。瓦当径14.3 cm、厚さ1.5 cm。蓮華文で、九弁が均等に配される。間弁はT字形を呈し、蓮弁と間弁は瓦当外縁より高い。中房は外縁より低い。瓦当外縁は研磨して光沢があるが、表面は大部分剥落している。瓦当裏面には接合部分の痕跡が残り、キザミがみられる。（附図2-2）。

86JYT116 西隔壁北訓④：46は完形の丸瓦部が残る。胎土は精良で、色調は濃い灰色を呈する。焼成も堅緻である。全長36.7 cm、丸瓦部分の幅は14.8 cm、厚さ1.5～2.8 cm。瓦当径は14.2 cm。丸瓦凸面は光沢があり、凹面は布目。布目には縦方向の皺の痕が残る。瓦当は単弁蓮華文で、復原すると十弁となる。蓮弁中央には明確な稜があり、間弁はT字形を呈する。蓮弁と間弁は瓦当外縁より高く、中房には管状工具で施した蓮子があり、中央に1つ、その周囲に数個が配される（附図2-3）。

磚 空心磚 86JYT154 西拵張区⑤：07は破片だが、残存長34.3 cm、残存幅13 cm、厚さ3.1～3.4 cm。表面は黒灰色から褐色、内面は黒灰色、断面は灰白色を呈する。胎土は緻密で、表面には光沢があり、内面はかなり粗く、不規則なキザミが残る。磚の表面中央には宝相蓮華文が刻印される。八弁で、蓮弁は短く平らである。周囲には3つの方形の忍冬文が刻印されている（附図2-6）。

(ii) 越彭城東魏北齊寺院等出土の瓦

04JYNH2：6は蓮華文軒丸瓦、胎土は精良で、全体に灰色を呈する。瓦当径は14.2 cm、厚さ2.2～1.5 cm。瓦当は九弁蓮華文で、表面は滑らかであり、蓮弁は細長い。間弁はT字形

で、蓮弁と間弁は瓦当外縁より突出する。中房は蓮弁より低く、 $1+6$ の蓮子が配される。瓦当と丸瓦の接合部分には放射状のキザミがあり、接合粘土の痕跡も残る（附図3-5）。

04JYNH2:aは蓮華文軒丸瓦。胎土は精良で、全体に灰色を呈する。残存部分の径6.8cm。瓦当には三弁の蓮弁が残り、全体で十弁あったと考える。瓦当表面と側面は光沢があり、蓮弁は幅が広く、間弁は短小である。瓦当裏面に残る網目状のキザミは珍しく、丸瓦の端面にもこのキザミの痕跡が残っているはずである（附図3-6）。

04JYNH2:3は蓮華文の軒丸瓦、胎土は精良で、全体に灰色を呈する。瓦当径6.7cm、厚さ1.1~0.9cm。瓦当は九弁蓮華文、間弁はT字形、連弁の外周には密な珠文がめぐる。中房には $1+6$ の蓮子がある。瓦当裏面と丸瓦の接合痕跡がある（附図3-7）。

04JYNH2:2の蓮華文瓦当は、胎土が精良で、全体に灰色を呈する。瓦当径7.9cm、厚さ1.4~0.8cm。瓦当は九弁蓮華文で、蓮弁はやや短い。間弁はT字形を呈する。中房には $1+6$ の蓮子がある。瓦当裏面と丸瓦の接合部には放射状のキザミがあり、接合粘土の痕跡もある（附図3-8）。

鶴尾は漳河で採集した資料で、胎土は精良、全体に灰色を呈する。表面は風化がはげしい。残存高29cm。頂部を欠いているが、大棟と接する部分には円孔が1つあり、孔の直径は0.7cm（附図3-1~4）。

（iii）鄆南城郭城内の建物遺構出土の瓦

軒平瓦と平瓦 計66点、ほとんどが破片で、A型～C型の3つに分類する。

A型：9点。青灰色で凸面には凹凸があり、すり消された太い繩叩きの痕が残る。凹面もそれほど平滑ではなく、すり消された細い繩叩きの痕がある。94JYT554-559②:7は、欠けていて長さは不明だが、幅は完全に残っている。残存長23.8cm、幅29.8cm、厚さ1.7~2.0cm。広端面には1段の波状文がある（附図6-1）。

B型 8点。灰色を呈し、凸面は無文で凹面には布目が残る。94JYT554-559②:8は破片で、残存長15cm、残存幅14.2cm、厚さ1.6~2.4cm。

C型は3つの亜型に分かれる。

C1型は12点。凹凸面とも無文で、光沢がある。94JYT555②:4は長さ33.2cm、幅21.5cm、厚さ1.6~1.9cm（附図6-2）。

C2型は5点。凸面は無文。凹面は黒灰色で光沢があり、広端面には1段あるいは2段の波状文をかざる。94JYT554②:1は、残存長16.7cm、広端幅26.3cm、厚さ1.8cm。1段の波状文をかざる（附図6-3）。

C3型は4点。凹凸両面とも黒灰色で光沢があり、1段あるいは2段の波状文をほどこす。94JYT554②:3は破片で、残存長14.6cm、残存幅19.7cm、厚さ1.8~2.4cm。2段の波状文で、凸面には朱色を塗った痕跡が大きく残る。

軒丸瓦と丸瓦 丸瓦は計42点。多くは破片で、2つの型に分類する。

A型 21点。半円筒状でつくりはよい。玉縁は傾斜して丸瓦の狭端と緩やかに接合する。凹面には縦方向の溝状の痕があり、いくつかの資料には横方向の粘土紐の痕跡がみられる。凸面は無文、凹面には布目がある。94JYT554②:2は、長さ31.6cm、幅14.1cm、厚さ1.3~1.6cm、玉縁の斜長は5.2cm。94JYT555②:2は、長さ35cm、幅14.8cm、厚さ1.5~1.9cm、玉縁の斜長は4.5cm(附図6-5)。

B型 21点。形や製作方法はA型と一致するが、凸面は黒灰色で光沢があり、凹面は布目が残る。94JYT555②:1は、長さ36.1cm、幅14.1cm、厚さ1.1~1.8cm、玉縁の斜長は5.0cm。94JYT554-559②:6は、長さ34.6cm、幅14.4cm、厚さ1.3~1.7cm、玉縁斜長は5.2cm(附図6-6)。

瓦当は計69点あり、すべて単弁蓮華文である。瓦当裏面は平らで、丸瓦接合部には放射状のキザミがある。色調は青灰色を呈するが、一部は黒灰色で光沢がみられる。破片のため分類できない24点をのぞき、そのほかのものを6つの型に分類した。

A型は2つの亜型に分かれる。

A1型 15点。中房は突出し、1+6の蓮子がある。蓮弁は九弁で細長い。94JYT557②:6は、瓦当径14.4cm、外縁幅1.8cm、厚さ1.0~1.5cm。中房部分は剥落しているが、外縁は残りがよい(附図6-7)。

A2型 8点。中房は突出し、蓮子は1+8。蓮弁は九弁で、短くまるい。94JYT554-559②:1は、瓦当径14.7cm、外縁幅1.5cm、厚さ1.0~1.7cm。外縁は残りがよく、瓦当裏面に丸瓦の一部が残っている(附図6-8)。

B型は2つの亜型に分類する。

B1型 4点。中房はくぼみ、蓮子は1+6。蓮弁は九弁で、比較的細長い。94JYT559③:1は半分ほどが残存し、瓦当径12.1cm、外縁幅1.8cm、厚さ1.3~1.6cm(附図6-9)。

B2型 9点。中房はくぼみ、蓮子は1+8。蓮弁は九弁で、短くまるい。94JYT559②:1は外縁がよく残り、瓦当径14.3cm、外縁幅1.6~1.8cm、厚さ1.7cm(附図6-10)。

C型 2点。中房は突出し、蓮子は1+6。蓮弁は十一弁で細長い。94JYT554-559②:4は半分ほどが残存し、瓦当径14cm、外縁幅1.5cm、厚さ1.3~1.5cm(附図7-1)。

D型 4点。中房はくぼみ、蓮子は1+6、蓮弁は十一弁で細長い。94JYT556②:1は半分近く残存し、蓮弁は摩耗している。瓦当径14cm、外縁幅1.5cm、厚さ1.6cm(附図7-2)。

E型 2点。中房は突出し、蓮子は1+8。蓮弁は九弁で、短くまるい。外縁は幅広い。94JYT557②:1は完形で、瓦当径13.5cm、外縁幅2.0cm、厚さ1.5~1.8cm(附図7-3)。

F型 1点。中房は突出し、蓮子は1+6。蓮弁は九弁で、比較的細長い。蓮弁の外周には珠文がめぐる。94JYT557②:5は一部欠けており、瓦当径15cm、外縁幅1.7cm、厚さ1.6cm(附図7-5)。

その他 鴟尾は1点出土した。94JYT557②:17は残存高39.2cm。胎土はきめ細かく、全

体に灰色を呈する。残存するのは鴟尾の左側後方部分で、後方に巻き上がる鱗5段と腹部である（附図7-5）。獸面裝飾は1点。94JYT557②：12は残存高15cm。胎土はきめ細かく、全体に灰色を呈する。獸面は左の頬の上唇、上の歯、髭と足の爪が残り、そのほかの部分は剥離している。内面は凹凸があり、平らではない（附図7-6）。方磚は1点。94JYT557③：5は正方形に近い。長さ34～34.7cm、厚さ6.9cm、両面とも無文で、磚の側面は磨いて斜面を形成している（附図7-7）。

D おわりに

(i) 郡城における北朝瓦の製作技法の特徴

郡城の銅雀三台からは、胎土が良好で焼成温度の高い瓦が多く出土する。宋代以来の文人は、それを研磨し、瓦硯として利用した。曹操の銅雀三台から出土したいわゆる銅雀瓦硯は懐古的で趣を備えた文房具となったのである。しかし、黒灰色で光沢があり、胎土が緻密で堅い瓦は、決して三国時代の遺物ではない。それらは、実は郡城の北朝時代の地層から出土したものなのである。

郡城の東魏北齊時期の地層から出土した平瓦、丸瓦の大多数は質が非常に高く、もっとも典型的な瓦当は黒光りする瓦である。それらを観察すると、瓦の表面の黒光りする現象は、おもに生瓦の状態でミガキと液体をかける工程によることがわかる。郡城出土の北朝の平瓦は、一般に全体に光沢があり、凹面は凸面にくらべて滑らかできれいである。一方、丸瓦は凸面を研磨し、凹面は製作工程でついた布目の痕跡が残ったままである。丸瓦と平瓦の研磨の重点部位は、いずれも屋根に葺いたとき、瓦の表面となる面である。

郡城の北朝時期の層から出土した平瓦、丸瓦の痕跡の観察をとおして、それらの製作技法を基本的に理解することができた。以下、おもな工程の区分を試みたい。

粘土作成 郡城出土の北朝時期の平瓦、丸瓦のほとんどは胎土がきめ細かい。一部の破片をみると、練りこんだあとにできた皺が残っており、瓦をつくる前に粘土を水簾し、捏ねる工程があったことがわかる（図3）。重厚な大型の平瓦は粘土の量が多いが、胎土には砂礫や夾杂物が非常に少なく、水簾をして一定時間粘土を寝かせていることは間違いない。

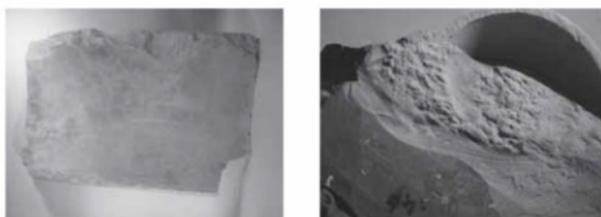


図3 瓦の破片や破面に胎土の細かさがあらわれている

粘土円筒の成形と轆轤による調整 現在知られる郡城の北朝時期の丸瓦と平瓦は、すべて粘土紐を巻きあげて製作しており、粘土片を貼り合わせた例はみられない。粘土紐巻上げの痕跡は丸瓦の凹面に顕著に残り、一部の平瓦の破片にも上記の結論を支持する痕跡がある。

粘土円筒を作成するさいには、まず轆轤の上に木棒で模骨を支え、つぎに粘土紐を模骨の外側に巻き上げていき、叩きをへて平瓦あるいは丸瓦の粘土円筒を作成する。つづいて、轆轤を回転させて円筒を調整する。このときの調整痕跡は瓦を観察するたびに目にすることができるが、つぎの研磨工程のため、轆轤の回転痕跡が見落とされることもある。

轆轤での調整後、一部の平瓦や丸瓦には文字を刻印するが、刻印と轆轤調整の重複関係から両者の順序を確定することができる（図4）。

平瓦の広端の波状文は、轆轤調整の前後に完成する。このとき円筒はまだやわらかくキザミや押圧施文などがしやすい。2段の波状文の間には深い沈線があり、指頭で施文したときの指文があることから、このような製作順序を導き出すことができる。



図4 轮轤調整後に押印

円筒の陰干しと分割 表面を調整し終えた円筒は、まだ輪轤上の模骨に張り付いているが、円筒が完全に乾燥する前に、円筒の内側の模骨を取り出す。ナイフの類の鋭器を用いて、内側から外側に向かって、平瓦や丸瓦を分割するための縦方向の切り込みを入れる。この截線の深さは一致しない。一般には、丸瓦は円筒の2分の1、平瓦は円筒の厚さの4分の1ほどである。つぎに、適当な時期に円筒を分割して、平瓦か丸瓦を作成する。この段階の平瓦や丸瓦には、凹面の布目や回転痕跡など、製作時の痕跡が多く残る。これらは、さらなる加工や調整の前段階である（図5）。

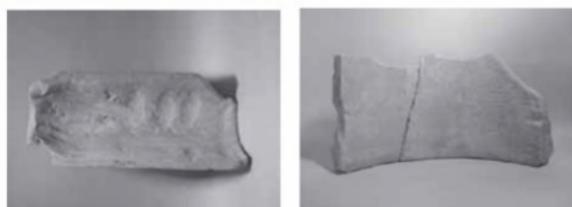


図5 丸瓦と平瓦 凹面にある布目、ミガキの前段階

生瓦の研磨と調整 鄭城の黒光りする瓦の表面は、釉の感じに似ている。この黒光りする面は、おもに丸瓦の凸面と平瓦の凹面である。これは、屋根にのせたときに表に露出する部分であり、明らかに実用と装飾の2つの機能を備えている。一面では、建物の屋根部分の表面を滑らかできれいにし、雨水が浸透するのを防ぐ。また、建物の屋根部分が青黒い光沢をもつというのは、非常に美しいものである。

この瓦の表面を仔细に観察すると、90JYT26⑤：09では、表面に断面円形の棒に似た工具で何度もミガキをかけた痕跡がある。この痕跡はややくぼんでいるように見えるが、反復してミガキをかければ、瓦の表面はさらに滑らかできれいになり、ミガキの痕のくぼんだ溝もほとんど目立たなくなる。それは同時に、ミガキの工程の生瓦が、まだ完全に乾燥していない状態であることを示している。

軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合部分を観察すると、丸瓦部の凸面と瓦当側面は、一連でミガキがおこなわれている。それは、瓦当の接合後にミガキをかけたことを示している。朱明門から出土したT149②：50の蓮華文瓦当は、瓦当裏面の丸瓦接合部分に網状のキザミがあり、これは瓦当と接合する前に、接合部分にキザミをいたるものである（図6）。このことは、接合前の丸瓦の乾燥度合いが瓦当よりも進んでいることを示す。そして、乾燥して接合がしつかりした段階（まだ完全には乾燥していない）で、丸瓦部と瓦当を一気に研磨する。



90JYT26⑤：09



T149②：50

図6 丸瓦凸面のミガキと瓦当裏面のキザミ

生瓦表面の黒塗り技術 北朝時期の黒光りした瓦の大多数は黒灰色だが、一部の表面には銀白色で光沢のある状況がみられる。これは、窯で焼成する前に、瓦の表面になにか特別な物質を塗布したのであろうか。この点に関して、いまだ自然科学的な分析結果はない。

鄭城出土の一部の瓦には、表面に液体が流れた痕跡がみられ、その液体は黒灰色を呈する。文献によると、『嘉靖彰徳府志』が『鄭都宮室志』を引いて、闕闈門内に位置する太極殿の「瓦は胡桃油を用いる。輝きが目を奪う」とある。これは鄭城出土の北朝時期の黒光りする瓦に独特の現象であり、今後の研究が待たれる。

窯入れと焼成 窯入れと焼成は最後の工程である。鄭南城西で瓦磚窯が発見され、うち1

基の窯跡から、「慕容□□」の刻印をもつ丸瓦が集中して出土した。この丸瓦は黒灰色で、焼成温度も非常に高い。窯跡の規模は一般に大きくなり、通長8mほどである。いくつかの窯跡が1箇所に集中して出現する現象がある。

(ii) 鄭城における造瓦技術研究の学術的意義

鄭城の瓦の研究で進歩したのは、類型学方面の分類と比較研究である。これは重要な基礎研究のひとつである。今回は、それにくわえて瓦の製作技法の考察に重点をおき、製作工程を明らかにした。それは、粘土捏ね、円筒成形と輻轂調整、円筒の陰干しと分割、生瓦のミガキと調整、瓦への塗布をへて、最後の焼成にいたる工程である。

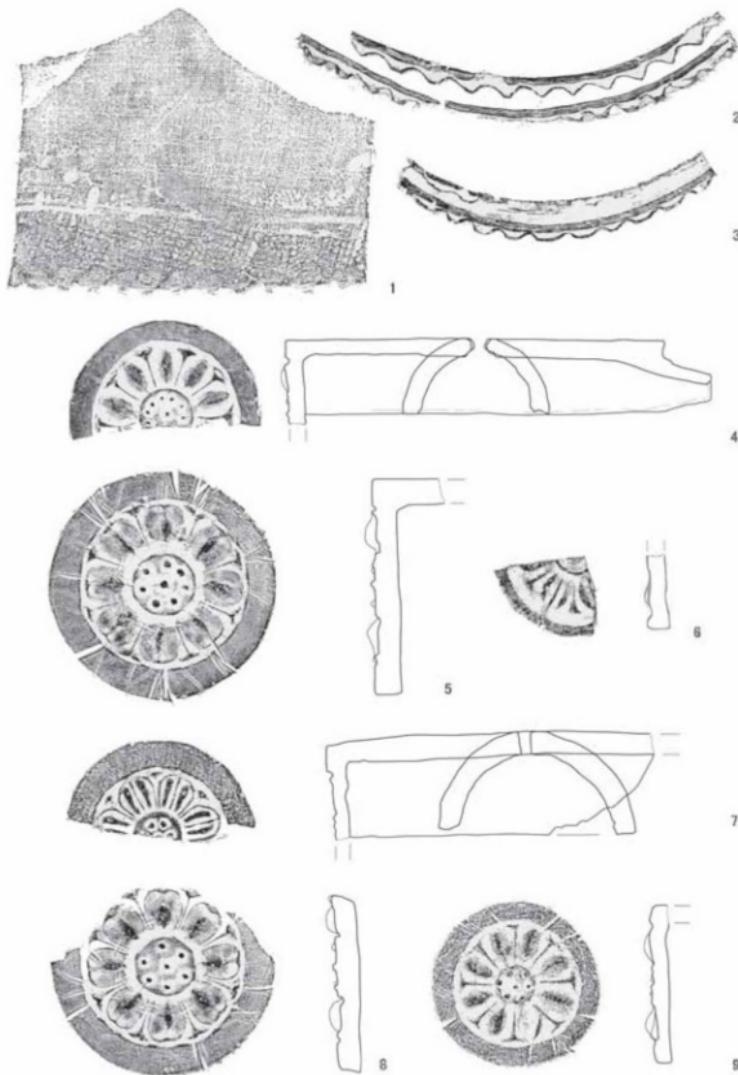
これらの技術は、北魏洛陽城と直接的に関係する。すなわち、534年に東魏が洛陽城から鄭城に遷都し、その政治制度、文化的伝統、技術などを継承したことが、北魏洛陽城と密接で不可分な関係をもつ理由である。瓦の製作技法はその一例にほかならない。

その後、581年には隋が建国するが、その都城である大興城の造営技術は、東魏北齊の鄭城と深い関係をもっていた。鄭城の北朝瓦の製作技術と隋唐長安城の造瓦技術の比較研究が、これらの文化的関係を明らかにすることは疑いない。文化の異同の比較と総括は、まさに都城考古学の重要な課題なのである。

鄭城の造瓦技術の研究の意義もこの点にあるが、鄭城出土の北朝瓦の考察はいまだ不十分で、一部の問題についてはまだ提起されたばかりの状況にある。また、南北朝や隋唐期のそれぞれの大型都市遺跡から出土した資料を整合させる学際的協力も必要である。今後、鄭城におけるこうした方面的研究をさらに深化させる必要があろう。

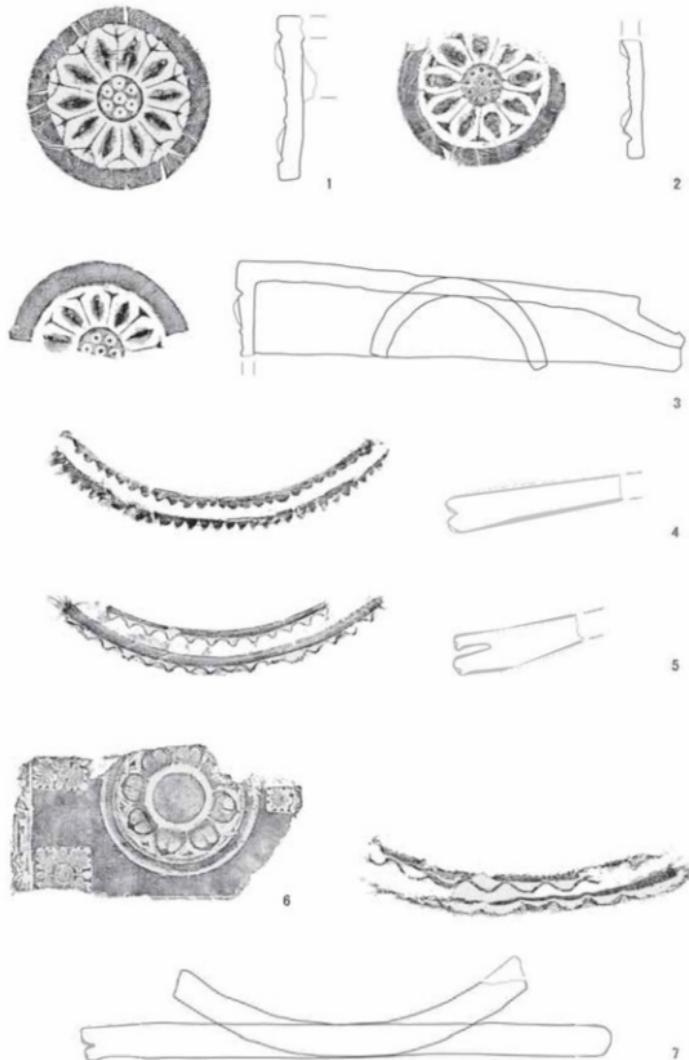
註

- (1) a.中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄭城考古工作隊「河北臨漳鄭北城遺址勘探發掘簡報」『考古』1990年第7期。b.中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄭城考古工作隊「河北臨漳縣鄭南城遺址勘探與發掘」『考古』1997年第3期。
- (2) 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄭城考古工作隊「河北臨漳縣鄭南城朱明門遺址的發掘」『考古』1996年第1期。
- (3) a.中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄭城考古工作隊「河北臨漳縣鄭城遺址東魏北齊佛寺塔基的發現與發掘」『考古』2003年第10期。b.朱岩石・何利群「河北鄭城遺址北朝佛教寺院考古獲階段性成果」『中國文物報』2005年3月4日第1版。
- (4) a.中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所『磁県湾章北朝壁画墓』科学出版社 2003年。b.中国社会科学院考古研究所河北工作隊「河北磁縣北朝墓群發現東魏皇族元結墓」『考古』2007年第11期。
- (5) a.徐光冀「東魏北齊鄭南城平面布局的研究」『宿白先生八秩華誕紀念文集』(上)、文物出版社、2002年、pp.201~215。b.徐光冀「曹魏鄭城的平面復原研究」『中國考古學論叢』科学出版社、1993年。c.朱岩石「東魏北齊鄭南城內城之研究」『漢唐之間的視覺文化与物質文化』文物出版社、2004年、pp.97~114。



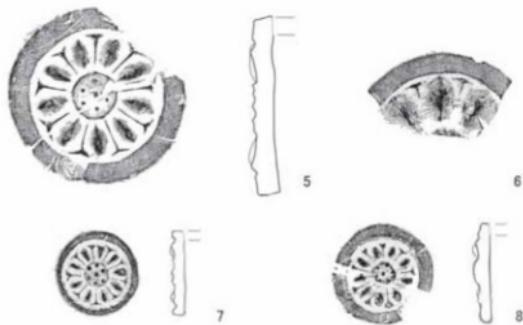
1. 81JYT14 ② :34 2. 92JYT24 ① 3. 88JYT ③ :1 4. 92JYT29 ⑦ :04 5. 92JYT29 ⑦ :220
6. 92JYT29 ⑦ :0254 7. 90JYT26 ⑤ :09 8. 86JYT13 ⑦ :95 9. 86JYT13 ⑦ :21

附圖 1 鄭北城出土瓦 (1:4)



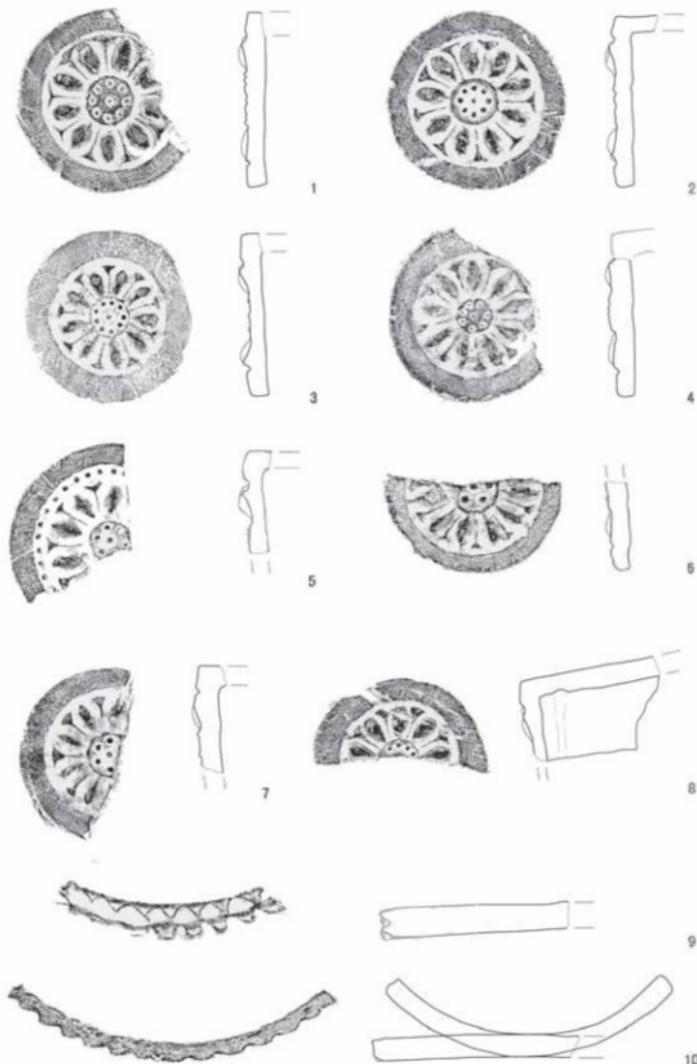
1. 86JYT149 ②:50 2. 86JYT137 ②:51 3. 86JYT116 西隔壁北側④:46 4. 86JYT149 ②:01
5. 85JYT141 ②:39 6. 86JYT154 西拵張区⑤:07 7. 86JYT154 西拵張区⑤:08

附図 2 鄭南城出土瓦 (1:4)



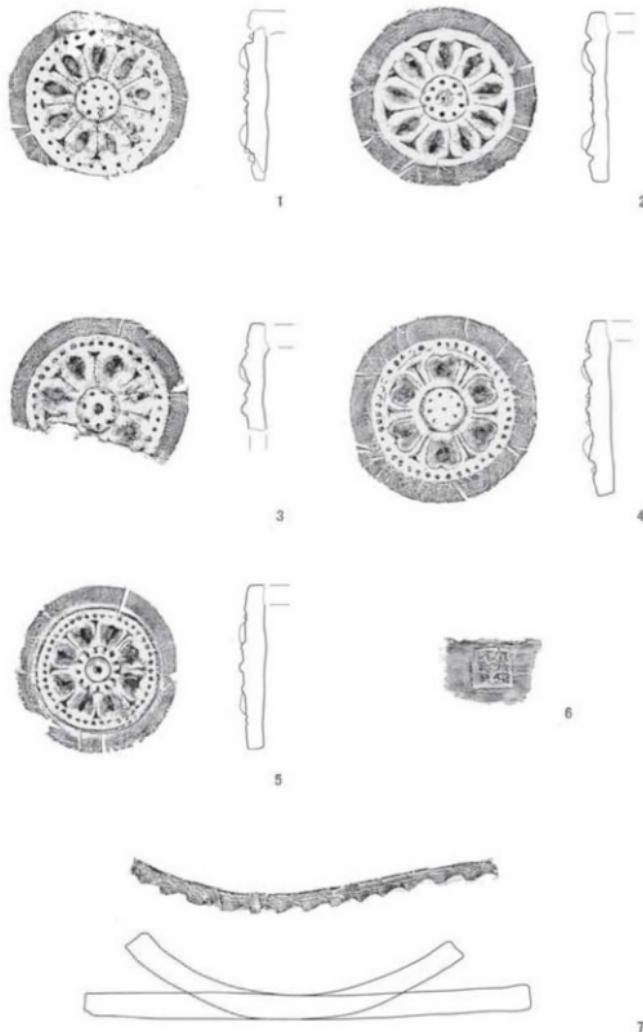
1-4. 漳河採集陶鷀尾 5. 04JYNH2:6 6. 04JYNH2:a
7. 04JYNH2:3 8. 04JYNH2:2

附圖 3 鄄城出土瓦 (1:4)



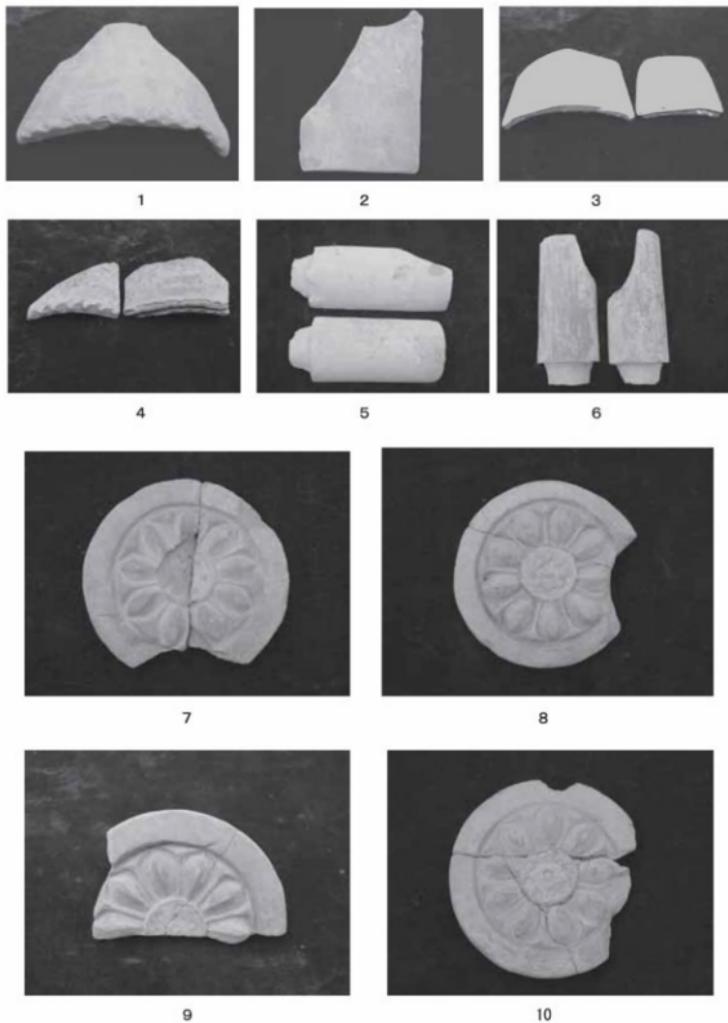
1. 94JYT559 ② 2. 94JYT554 3. 94JYT557 ② 4. 94JYT558 5. 94JYT557 ②
6. 94JYT554 ② 7. 94JYT559 ② 8. 94JYT557 ② 9. 94JYT557 ③ 10. 94JYT554 ②

附図4 鄭南城西郊建物址 (1:4)



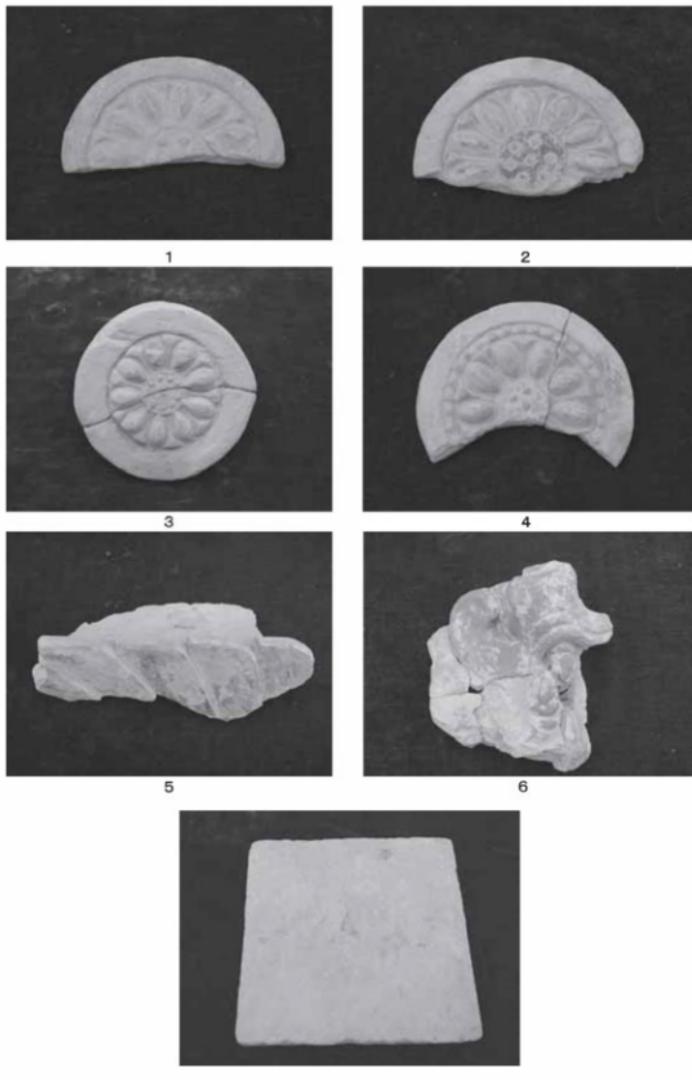
1. 94JYT401H1251:6a 2. 94JYT417 ③:2 3. 94JYT417 4. 94JYT401H1251:6b
5. 94JYT405 ③ 6. 94JYT0913Y3 7. 94JYT0913Y3

附図5 鄭南城西郊および窯址出土瓦 (1:4)



1. 94JYT554②:7 2. 94JYT555②:4 3. 94JYT554②:1 4. 94JYT555②:3
5. 94JYT554②:2, 94JYT555②:2 6. 94JYT555②:1, 94JYT554②:6
7. 94JYT557②:6 8. 94JYT559②:1 9. 94JYT559③:1 10. 94JYT559②:1

附図6 郡南城西郭城内建物址出土の瓦



1.94JYT554②:4 2. 94JYT556②:1 3. 94JYT557②:1 4. 94JYT557②:5
5. 94JYT557②:17 6. 94JYT557②:12 7. 94JYT557③:5

附図7 郡南城西郭城内建物址出土の瓦

4 揚州城における近年の出土瓦

李 久 海・劉 涛・王 小 迎

(揚州唐城考古隊・揚州市文物考古研究所)

A はじめに

揚州は著名な歴史古城で、長江下流域北岸と江淮平原の南端に位置し、北に江淮、南は長江と海口に臨み、地理的条件はすぐれている。史料によると、春秋末期に呉王夫差が北の中原に霸をとなえ、ここに邗溝を開き、邗城を造営したのは、今から 2500 年前になる。その後、楚の懷王の広陵城、漢の呉王劉濞の都城、江都國易王劉非、広陵國歷王劉胥などの諸侯国の大陵城もすべて邗城の上に造営された。つづいて、六朝時代の広陵城、隋の煬帝の江都宮、唐の子（衛）城、南宋時期の宝祐城がある。その城壁は興廢あるいは度重なる戦火破壊に遭遇しているけれども、城壁と濠の中心位置は終始大きく移動せず、今まで使用されている。このように特殊な地位の歴史古城は中国においては少ない。したがって、その保護と研究は高い歴史的価値と保存的価値を有している。

揚州は、第1回全国歴史文化名城 24箇所のうちのひとつである。漢、六朝以後、北方において戦争が絶え間なく続いたことにより、比較的安定していた南方社会に、多くの富豪や手工業者が南下してきた。これらの人々の多くは江淮一帯に遷居し、江淮地区的経済や文化の迅速な発展を促した。そして、のちに重要な繁栄地域のひとつとなり、隋の中国統一と大運河の開削のための巨大な物質的基礎をつくったのである。隋の煬帝の統治時期には、江南を制御するために大運河を開削し、江淮を通じさせると同時に、揚州で土木事業をおこして行宮を造営し、江都宮とした。唐代になると、江都宮を引き続き利用して州府とした。唐代中期の安史の乱以後、北方社会は再び混乱し、経済は大きな打撃を受けたが、南方は比較的安定しており、経済の重点は南に移動した。

揚州は長江と大運河の交差地点にあり、京杭大運河が南北を貫き、自然と中国の南北交通の要所となった。交通運輸は揚州の経済を迅速に発展させ、揚州はわが国最大の商品集積地となるだけでなく、わが国の東南地域のもっとも繁栄した商業都市で著名な対外貿易港のひとつとなつた。当時は「揚（州）一益（成都）二」といわれ、「揚州富庶甲天下」の榮誉もあった。このとき、揚州の繁栄は頂点に達し、商人が雲集して人文の粹を集めた。南北の商業路は錯綜し、夜市には提燈があふれ、店が密集する活気のある景観であった。

卓越した地理条件と安定した政治局面は、多くの外地商人を揚州にひきつけた。彼らは各種の商業貿易活動に従事し、多くの商品が揚州の港を通過し、海のシルクロードをとおって

世界各地に運ばれた。そして対外貿易の発展を促進し、諸国間の友好的往来を活発にするなど、重要な促進作用を引き起した。

経済の繁栄はまた、文化芸術が発展する条件を与えた。これによって、唐代には著名な詩人が揚州を訪問し、人口に贈与した詩篇を多くのこしている。唐代の高僧、鑑真大和上は、揚州の人である。彼は、文化を伝えるために6度の渡海をこころみ、10数年をへて両目の失明にいたるも、ついに日本に到達した。日中文化の交流と両国人の代々の友好のために多大な貢献をしたのである。

商業、手工業と交通運輸業が不斷に発展するにつれて都市の規模も拡大し、もとの蜀岡上の城壁はすでに増大した需要をみたすことができず、蜀岡の下にある運河沿いから長江にむかって拡大していった。唐代の詩人杜牧は、詩のなかでつぎのように描写している。

「通りには多くの柳が茂り、霞は二重の城壁を映す。」

二重の城壁とは、蜀岡上の子（衛）城と蜀岡の下の羅（大）城をさしている。総面積は18.25平方kmである。子城は大都督府となり、淮南道官衙府署があった。面積は羅城の5分の1をしめた。羅城は商工業と庶民の居住区である。都市の規模の拡大と都市の形状機能の区分けは、商工業のさらなる発展を推し進めた。

唐代揚州の繁栄とこの都市の地理的環境は密接に関連している。羅城は蜀岡下の沖積平野にあるため、水路が張りめぐらされ、羅城内には2本の南北方向の水路と2本の東西方向の水路が相互に通じ、井桁状になっている。主要な水路と道路はたがいに直交、平行し、水陸交通の幹線となる。このような構図は南方の水郷都市の特色をもっている。この水路にかけられた橋は「二十四橋」とよばれ、都市内の交通を潤滑にし、景観をも形成した。「二十四橋明月夜」は唐代揚州の美観を表現したものである。

羅城内には南北の大通りが6条、東西の大通りが14条あり、そのうち南北幹道は3条、東西幹道は4条で、南北幹道と幹道の間隔は650m、東西の幹道と幹道の間隔は1000m。道路幅は5~10mだが、幹道は幅10mあり、それぞれ城門に通じている。橋と道路もつながり、縱横に交錯して、城内を基盤のように区画している。こうした里坊の構図は明清時代まで引き継がれ、現在の揚州の老城区にもその一部が保存されている。ただし、これまでの発掘調査によると、唐代の羅城内からは里坊の堀の遺跡が見つからず、唐代の揚州は道路で区画し、坊堀を設置しなかったのではないかという疑問がある。史料にも記載がないため、さらなる調査をとおして検討する必要がある。

唐代の著名な詩人は揚州の橋の美しさを愛でた。行き交う船が多く、夜市も盛んな揚州の繁栄振りを描き出している。たとえば、「二十四橋明月夜、玉人何處教吹簫」「十里長街市井連、月明橋上看神仙」「入郭登橋出郭船」「夜市千灯照碧雲、高楼紅袖客紛々」など、唐代揚州城の構造や夜市がひらいでいるような風景が描かれている。大量の考古学的資料と唐代の詩句のなかの描写を結びつけると、揚州が開放的な商業都市であり、坊と坊の間には堀がな

かつたと想像できる。

揚州の手工業生産はきわめて発達しており、羅城内では大型の手工業工房区や分散した家内工業的工房も多くみつかっている。とくに羅城の中心に位置する南北宮（市）河と「十里長街」の東西両側には、各種の店舗が林立していた。このような店舗では全国の窯で焼成された陶磁器を扱い、自分で生産した手工業品も売買していた。同時に、店舗内には多くの小規模な工房址が発見された。このように表が店で裏が工房であるような家内的工房と、かなり集中的に操業する大規模な工房の分布は、揚州城内における経済的繁栄ぶりを示している。唐代中期以後、揚州の経済的繁栄は全国でもトップクラスであり、唐王朝も集財の地として依存していた。このとき揚州の歴史的地位や都市の規模は、東西の両京（長安、洛陽）につぐ第三位の都会であった。しかし、唐末五代に戦乱がひろがり、繁栄していた揚州の城壁も破壊されて地下に埋没し、千年の謎となつたのである。

唐代揚州城の研究は、国内外の考古学界と歴史学界から注目された。20世紀の初頭には、羅振玉、劉恩培らが、収集した墓誌と文献記載を結合して、揚州城の考証をした。抗日戦争時期、日本の安藤更生が揚州で考古学的調査をおこない、『唐宋時期の揚州』を執筆した。新中国成立後は、南京博物院と揚州の考古学・史学の研究者が揚州城で多くの調査と試掘をおこない、重要な成果をあげた。そして1981年には、揚州で「唐代揚州城遺址学術討論会」が開催された。しかし、考古資料が不足し、零細な遺跡やわずかな文献記載に限られたことから、学界では揚州の羅城の範囲について意見の一一致をみなかつた。

その後、1984年に都市改造建設中に羅城南門遺跡を発見し、考古学界や史学界からも大いに注目された。1987年には、中国社会科学院考古研究所と南京博物院、揚州市文化局が連合して揚州唐城考古隊を結成し、これまでの研究を基礎として関連史料と結びつけ、城内全城に対する系統的な考古調査と重点的な発掘調査をおこなった。この20年ほどの考古調査、ボーリング調査と試掘は、学界の長年にわたる未解決の疑問を解決し、千年も地下に埋没していた揚州城の全貌がだいに明らかになった。そして、発掘調査と大量の遺物、地層の上下関係や文化内容をとおして、揚州の羅城の範囲、規模、構造と造営年代などについて明確な認識をもつことができるようになった。

1996年、揚州城は国家重点保護単位に指定された。唐代揚州城の研究は、現在、羅城内で考古学的調査がおこなわれている。子城は残りが比較的よく、都市保存のための重点核心区に設定されているため、ボーリングと試掘のみの調査を実施しているにすぎない。

2004年から、揚州唐城考古隊と揚州市文物考古研究所は、羅城遺跡内の市文昌広場や錦苑小区、世界動物之窓や瘦西湖レジャー村などの都市改造建設設計画にもとづいて、緊急発掘をおこなった。以下では、ここから出土した瓦当、丸瓦、平瓦、文様磚を紹介する。

文昌広場（考古発掘工地編号 04YWGE）は、市文河路と文昌路の交差点の南東 100m のところにあり、ここは唐代羅城内の中心である。西は有名な「十里長街」と官河に接し、商業

経済繁栄地区の核心地帯になる。遺物はきわめて多く、唐青花磁のほとんどはここから出土した。錦旺苑小区（考古発掘工地編号 06YCJ）は市友誼路と西路の交差点の南東約 100m のところに位置し、官河から西へ 50m 離れている。官河東岸は「十里長街」である。世界動物窓（考古発掘編号 06YSD）は、鉄佛寺の北東の唐子城東南角と唐羅城北城壁が連接するところの南辺に位置し、瘦西湖レジャー村（07YSXD）は、鉄佛寺南の古邗溝の旧河道の南岸に位置する。世界動物窓と瘦西湖レジャー村は唐子城南縁に近い。発掘の層位からみると、六朝、隋代の文化層は比較的豊富である。

以上の 4 地点から出土した比較的完形に近い瓦は、蓮華文軒丸瓦 40 点、丸瓦 3 点、平瓦 8 点、蓮華文磚 3 点がある。以下、これらについて紹介する。軒丸瓦は、蓮弁の形や間弁の有無と形状、中房内の蓮子の数と蓮弁の変化などから分類し、丸瓦と平瓦、蓮華文磚は出土した層にもとづき、形や文様、大きさなどから要點を説明する。

B 軒丸瓦

A 型 7 点。「円弁」蓮華文瓦当。蓮弁装飾の有無から 2 亜型 6 式に分類する。

Aa 亜型 5 点。蓮弁無装飾型。間弁の有無と間弁頂部の形の違い、蓮子の数の違により、I ~ IV 式に分類する。

I 式 1 点。間弁に線がある。頂部は弧辺の三角形で、中房の蓮子は 7 つ。標本 06YCJT3④：7 は、胎土が精良で全体に浅い灰色を呈し、焼成温度は高くない。外縁が欠けている。八弁で円く豊満で突出し、弁の先端に小突起がある。蓮弁の長さ 2.5 cm、幅 1.7 cm。間弁には軸がある。間弁頂部は弧辺三角形。中房は円盤状で、なかに 7 つの蓮子をかざり、突出しない。中房径 3.1 cm、蓮子径 0.6 cm。中房の外側には珠文が一周し、28 個が残っている。おそらく 34 個の珠文があつただろう。珠文の径は 0.4 cm、珠文間の距離は 0.5 cm、大きさは均等で距離も等間隔である。外縁は平坦で基部はややすぼまる。幅 1.3 cm、瓦当面より 0.5 cm 高い。瓦当裏面には同心円状の回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.8 cm、厚さ 3.1 cm、残長 5.4 cm（図版 1-1・附図 3-3）。

II 式 1 点。間弁に軸がある。間弁頂部は Y 字形で、中房には 7 つの蓮子をかざる。標本 06YCJT4④：23 は、胎土が精良で浅い灰色を呈し、外縁が欠けている。八弁の蓮弁は梢円形で突出する。豊満だが、一部の蓮弁は押圧されて平らになっている。蓮弁長 2.8 cm、幅 1.7 cm。円盤状の中房は中くぼみとなる。中房径 3.2 cm、蓮子径 1.6 cm。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周し、圈線は突出して幅 0.4 cm ある。珠文は摩滅しているが、32 個を確認することができた。外縁は平坦で花弁よりやや突出し、基部はすぼまる。幅 1.3 cm、瓦当面より 0.8 cm 突出する。瓦当裏面はかなり平らで、回線文が一周する。接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.7 cm、厚さ 2.6 cm、残存長 3.2 cm（図版 1-2・附図 4-1）。

III 式 2 点。間弁に軸がない。間弁は弧辺三角形のみで、円盤状の中房には 7 つの蓮子を

かざる。標本 06YCJT3④ : 8 は、胎土が精良で青灰色を呈し、焼成温度は高い。瓦当が欠けている。八弁の蓮弁は豊満で突出する。蓮弁長 2.4 cm、幅 1.7 cm。間弁は突出した三角形である。円盤状の中房は径 3.2 cm、蓮子径 0.5 cm。蓮弁の外側には珠文が一周し、計 32 個ある。摩滅がはげしいが等間隔である。外縁は平らで欠けており、基部はすぼまる。幅 1.2 cm、瓦当面より 0.8 cm 高い。瓦当裏面も欠けており、幅が広く深い回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.5 cm、厚さ 2.9 cm、残存長 3.4 cm（図版 1-3）。

IV式 1点。間弁はIII式と同様。ただし、中房には9つの蓮子をかざる。標本 06YCJT4④ : 18 は、胎土が精良で灰黒色を呈し、焼成温度は高い。瓦当は完形で、八弁の蓮弁は梢円形で突出する。全体に豊満で稜が通る。間弁は突起した小さな三角形で、蓮弁長 2.8 cm、幅 2.3 cm。円盤状の中房は突出し、直径 3.2 cm、蓮子径 0.6 cm。蓮弁の外側には圓線と珠文が一周し、圓線幅 0.2 cm。珠文は形が整っており 35 個ある。外縁は平らで欠けており、基部はすぼまる。幅 1.1 cm、瓦当面より 1.2 cm 高い。瓦当裏面は欠けており、幅が広く深い回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.9 cm、厚さ 3.4 cm（図版 1-4・附図 4-3）。

Ab 亜型 2点。蓮弁の外側に輪郭線をかざるタイプである。中房内の蓮子数や間弁によって I 式と II 式に分類する。

I 式 1点。蓮弁外周に輪郭線がある。間弁は突起した三角形文。中房には7つの蓮子がある。標本 06YCJT3④ : 9 は、胎土が精良で浅い灰色。焼成温度は比較的高い。瓦当は欠けており、八弁の蓮弁は梢円形で突出する。蓮弁長 2.3 cm、幅 1.7 cm。蓮弁の周囲には U 字形の凸線の輪郭があり、さらに突起した三角形文がある。円盤状の中房は突出し、直径 2.6 cm、蓮子径 0.6 cm。蓮弁の外側には圓線と珠文が一周する。圓線の幅は 0.1 cm、珠文は明確で 37 個ある。珠文の径は 0.4 cm、間隔は 0.3 cm。瓦当外縁は平らで基部はすぼまる。外縁幅 1.3 cm、厚さ 0.4 cm。瓦当裏面も欠けており、同心円の回転渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.4 cm、厚さ 2.7 cm、残存長 3.1 cm（図版 1-5・附図 3-4）。

II 式 1点。蓮弁外周に輪郭線がある。間弁には軸がある。間弁頂部は弧辺三角形。中房には9つの蓮子がある。標本 06YCJT4③ : 1 は、胎土が精良で青灰色。焼成温度は比較的高い。瓦当は欠けており、八弁の蓮弁はやや扁平である。蓮弁長 2.1 cm、幅 1.7 cm。蓮弁の周囲には U 字形の凸線の輪郭がある。間弁には軸があり、頂部は弧辺三角形である。中房は瓦当面より低く、残存径 2.5 cm。5つの蓮子が残り、蓮子径 0.5 cm。蓮弁の外側には圓線と珠文が一周する。圓線の幅は 0.2 cm、珠文は 21 個残存する。珠文径は 0.4 cm、間隔は 0.3 cm。瓦当外縁は平らで基部はすぼまる。外縁幅 2.1 cm、厚さ 0.4 cm。瓦当裏面も欠けており、比較的平坦で浅い回転渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.1 cm、厚さ 2.3 cm、残存長 2.8 cm（図版 1-6・附図 5-1）。

B 型 14点。先端の尖った蓮華文瓦当で、蓮子の数の違いから 2 亜型 4 式に分類する。

Ba 亜型 5点。瓦当には八弁の蓮華文をかざり、蓮弁は突出して豊満である。間弁に軸

はなく、突出した弧辺三角形の装飾があるだけである。円盤状の中房には5つの蓮子がある。花弁の外側には、珠文と圈線がそれぞれ一周する。外縁は平坦で基部はすぼまる。瓦当裏面には浅い回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。標本 06YSDJ1①：1は、蓮弁長3.1cm、幅2cm、中房径2.6cm、蓮子径0.7cm。圈線の径は10.5cm、珠文は31個ある。珠文径0.4cm、間隔は0.6cm。直径11.6cm、幅0.3cm。瓦当外縁は平坦で幅1.4cm、高さ0.9cm。瓦当裏面は無文で平らである。瓦当径14.8cm、厚さ3.2cm、残存5.8cm（図版1-7・附図1-1）。

Bb型 9点。Ba型と基本的に同じである。ただし、中房の蓮子は7つで、蓮弁の間隔と装飾の有無により、I～III式に大別した。

I式 2点。十弁の蓮華文で、間弁には軸がある。間弁頂部は一字形にちかく、中房は丸餅状を呈する。標本 07YSXDT9③：1は、胎土が精良で青灰色を呈する。表面は灰黒色で、焼成温度は低い。花弁は柳葉形に突出し、弁形は豊満で稜が通る。蓮弁長3.5cm、幅1.4cm。間弁には軸があり、間弁頂部には一字形の模様をかざるので、間弁全体はT字形を呈する。円盤状の中房は突出し、直径1.4cm。蓮弁の外側には圈線が一周し、その幅は0.1cm。瓦当裏面には凹凸のある深い回渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。直径11.8cm、厚さ3cm、厚さ2.5cm。残存長3.0cm（図版1-8）。07YSXDT9④：2は、07YSXDT9③：1と形が類似しており、瓦当には八弁の蓮華文をかざり、弁長2.2cm、幅1.2cm、1.0cm。蓮弁の外側には圈線が二周する。幅0.2cm。瓦当外縁も欠けており、外縁幅1.1cm、厚さ0.4cm。直径9.7cm、厚さ2.5cm、残存長7cm。

II式 1点。八弁の蓮華文で、間弁には軸がある。間弁頂部は一字形に近い。標本 07YCJ T4④H2：4は、胎土が精良な紅色で、表面は灰黒色を呈する。焼成温度は低い。花弁は柳葉形で突出し、稜がとおる。蓮弁長2.8cm、幅2cm。間弁全体はT字形を呈する。円盤状の中房は突出する。中房径2.4cm、蓮子径0.5cm。蓮弁の外側には圈線が一周し、その幅は0.2cm。外縁は平たく、幅1.2cm、厚さ0.6cm。外縁上には2条の回線文をかざり、基部はすぼまる。瓦当裏面はわずかに欠けており、幅のある深い回転渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。直径12.5cm、厚さ3cm、残存長7.5cm（図版1-9・附図3-2）。

III式 1点。基本的にII式と近いが、蓮弁の外側に圈線と珠文がそれぞれ一周する。標本 06YCJT3④：6は、胎土が精良で褐色、瓦の表面は青灰色を呈する。八弁の蓮華があり、花弁は柳葉形で突出し、弁の輪郭線は硬く、稜が通る。蓮弁長2.4cm、幅1.4cm。円盤状の中房は中くぼみで、中房径2.6cm、蓮子径0.5cm。間弁は軸と頂部からなり、頂部は一字形をなして、全体ではT字形になる。蓮弁の外側の圈線の幅は0.3cm。珠文は37個あり、径0.5cm、間隔は0.4cm。大小は均等でやや摩滅している。外縁は平たく、基部はすぼまる。幅1.4cm、厚さ0.3cm。瓦当裏面は欠けており、明確な浅い回転渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。直径12.9cm、厚さ2.8cm、残存長3cm（図版1-10・附図3-5）。

IV式 1点。八弁蓮華文で、間弁には軸がある。間弁頂部は一字形に近い。標本 06YCJT4④：21は、胎土が精良で、表面は灰黒色を呈する。花弁は柳葉形で突出し、豊満で中央に稜がとおる。蓮弁長 2.6 cm、幅 1.8 cm。中房径 2.6 cm、蓮子径 0.5 cm、圓線幅 0.4 cm。珠文は23個残存するが、もとは計 36 個であろう。外縁は平たく、幅 1.9 cm、厚さ 0.6 cm。瓦当径 13.6 cm、厚さ 1.9 cm、残存長 9.2 cm。(図版 1-11)。

V式 2点。八弁蓮華文で、間弁には軸がある。間弁頂部は一字形に近い。標本 06YF-05-03T③H3：1 は胎土が精良で表面は青灰色。焼成温度は高い。花弁は柳葉形で突出し、中央の稜は明瞭ではない。蓮弁長 2.4 cm、幅 1.5 cm。間弁全体は T 字形を呈する。円盤状の中房は径 2.8 cm、蓮子径 0.6 cm。蓮弁の外側には圓線が二重にめぐり、圓線幅 0.4 cm。圓線の間には珠文が一周し、大小は均一で計 43 個ある。外縁は平たく、幅 1.2 cm、厚さ 0.7 cm、基部はすぼまる。瓦当裏面には幅のある深い回転渦文があり中心は乳頭状に突出する。接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 14 cm、厚さ 2.7 cm、残存長 4.2 cm(図版 1-12・附図 10-2)。

VI式 2点。八弁蓮華文で、間弁に軸はないが、三角形の突起をかざる。標本 06YCJT4④：22は、胎土が精良で薄い灰色を呈し、生焼けである。花弁は複弁の柳葉形で突出し、豊満で中央に稜がとおる。蓮弁長 2.8 cm、幅 2 cm。円盤状の中房は径 2.4 cm、蓮子径 0.6 cm。間弁は弧辺の三角形をかざる。蓮弁の外側には圓線と珠文がめぐり、圓線幅 0.4 cm、珠文は計 43 個、珠文径 0.5 cm、珠文間は 0.5 cm。外縁は平たく、基部はすぼまる。幅 1.0 cm、厚さ 0.4 cm。瓦当裏面には浅い回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.5 cm、厚さ 2.7 cm、残存径 3.4 cm(図版 1-13・附図 4-2)。標本 06YCJT3③H2：2 は、泥質灰陶で青灰色。蓮弁長 2.7 cm、幅 1.7 cm。中房はやや突出し、径 2.4 cm、蓮子径 0.5 cm。圓線幅 0.2 cm。珠文は 31 個あり、径は 0.5 cm、間隔も 0.5 cm。外縁は平らで幅 1.0 cm、厚さ 0.8 cm。瓦当径 12.7 cm、厚さ 2.9 cm、残存長 4.0 cm。標本 06YCJT4④：19 は破損がはげしく、残存長 2.4 cm。

C型 20点。変形蓮華文瓦当で、蓮弁の形式の違いによって 3 亜型 10 式に分類する。

Ca 亜型 8点。桃形の変形蓮華文瓦当で、弁数、間弁の有無や違い、中房の蓮子の数から I ~ IV式に分類する。

I式 1点。七弁の桃形弁。中房中央には突出した蓮子があり、その周囲に 6 つの蓮子がめぐる。間弁はやや幅広い T 字形で、突出している。標本 06YCJT2④：9 は、胎土が精良で薄い灰色、表面は青灰色を呈する。破損しており、瓦当の中心部分が残るにすぎない。蓮弁は梢円形で突出し、豊満で、長さ 1.7 cm、幅 1.3 cm。蓮弁の T 字形と中房は連接している。中房径 3.5 cm、珠文径 0.7 cm、瓦当径は 7.2 cm 以上、厚さは 2.5 cm 以上(図版 1-14)。

II式 4点。八弁の桃形弁、中房中央には突出した蓮子があり、その周囲に 6 つの蓮子がめぐる。間弁は突出した Y 字形をかざり、斜縁で瓦当裏面は平滑である。標本 06YCJT2④：8 は、胎土が精良で薄い灰色、表面は深い灰色を呈し、焼成温度は高い。瓦当面は凸面状で

桃形の弁も突出する。弁長 1.5 cm、幅 1.3 cm。中房は蓮弁よりも低く、径 3.2 cm。蓮子径 1 cm と 0.8 cm。間弁の Y 型装飾は中房と接続し、蓮弁よりも低い。蓮弁の外側には圓線と珠文が一周し、圓線幅 0.4 cm。珠文の大きさは均等で、計 35 個。珠文径 0.6 cm、間隔は 0.2 cm。外縁は斜縁で基部はすぼまり、幅 2.5 cm。瓦当裏面は平滑で、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 14 cm、厚さ 1.3 cm、残存長 3.1 cm（図版 1-15・附図 4-4）。標本 06YCJT4④：20 は、蓮弁長 1.8 cm、幅 1.5 cm、瓦当の残存径 11.2 cm、残存長 2.7 cm。標本 06YSDTG 井：11 は、蓮弁長 1.6 cm、幅 1.4 cm、中房径 3.7 cm。瓦当裏面は平坦で、中央に指頭の押圧によるくぼみが 1 箇所ある。瓦当残存径 13.6 cm、残存長 2.6 cm。

III式 1 点。八弁の桃形弁。中房には 1+7 の蓮子がある。瓦当面は全体に凸面で、蓮弁は豊満で突起している。中房は蓮弁よりも突出している。間弁はない。蓮弁の外側には圓線と珠文が一周し、外縁は斜縁。瓦当裏面は平坦で、中央に指頭圧によるくぼみが 1 つある。接合部には指頭圧痕が残る。標本 06YSDTG 井：1 は、胎土が精良で表面は浅い灰色。蓮弁長 1.8 cm、幅 1.5 cm、中房径 3.5 cm、蓮子径 0.9 cm。蓮弁外周の珠文は計 36 個で径 0.4 cm、間隔は 0.4 cm。外縁は幅 1.5 cm で、珠文より 0.3 cm 高い。瓦当径 13.3 cm、厚さ 3.2 cm、残存長 8.2 cm（図版 1-16・附図 2-2）。

IV式 1 点。八弁の桃形弁。中房には 1+7 の蓮子がある。蓮弁の外側には圓線と珠文が一周する。瓦当面は全体に凸面で、平縁。瓦当裏面中央には指頭圧によるくぼみが 1 つある。標本 06YSDTG 井：20 は、泥質灰陶で青灰色。蓮弁は豊満で突起している。蓮弁長 2.2 cm、幅 1.5 cm。中房は蓮弁よりもやや低く、径 3.9 cm、中央の蓮子径 0.9 cm、周囲の蓮子径 0.5 cm。珠文は摩滅しており、31 個が残存する。外縁の幅 1.9 cm。瓦当径 16 cm、厚さ 1.8 cm、残存長 3.9 cm（図版 1-17・附図 1-3）。

V式 1 点。七弁の桃形弁。中房には 1+7 の蓮子があり、7 角形に配置されている。間弁は V 字形で珠文がともなう。標本 06YF-05-03T3③：4 は、胎土が精良で浅い灰色、表面は灰色を呈し、焼成温度は比較的高い。瓦当面は全体に凸面で、桃形蓮弁は突起している。蓮弁長 1.7 cm、幅 1.3 cm。中房中央の蓮子径 1.2 cm、外周の蓮子径 0.4 cm。間弁は V 字形で中房の周囲に接続し、中房より低い。蓮弁の外側には圓線と珠文が一周し、圓線幅 0.2 cm、珠文は大小均等で、計 34 個ある。珠文径 0.6 cm、間隔は 0.3 cm。外縁は平縁で、基部は斜めにすぼまる。外縁幅 1.5 cm。瓦当裏面は凹凸があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.8 cm、厚さ 1.1 cm、残存長 3.4 cm。（図版 1-18・附図 10-1）。

Cb 亜型 9 点。乳釘状の蓮弁をもつ瓦当。弁数の違い、間弁の有無とその形、中房蓮子の数量などにより、I～III式に分類する。

I式 7 点。八弁の桃形弁。中房には 1+12 の蓮子があり、間弁は直線でその基部は中房に接続する。蓮弁の外側には圓線と珠文が一周する。瓦当面は全体に凸面をなす。外縁は斜縁で比較的平たく、瓦当裏面の中央には指頭圧によるくぼみがある。標本 06YSDTG 井：2

は、胎土が精良で青灰色を呈する。桃形弁は豊満で突出し、弁長 1.1 cm、幅 1 cm。中房は蓮弁より低く、直径 3.9 cm、中央の蓮子径 1.6 cm、周囲の蓮子径 0.5 cm。珠文は 42 個あり、径 0.4 cm、間隔 0.3 cm。大小は均等である。外縁の幅 2 cm。瓦当径 12.5 cm、厚さ 3.3 cm、残存長 4.2 cm（図版 1-19）。標本 06YSDTG 井：8 は、胎土が精良で浅い灰色を呈する。桃形弁は突出し、弁長 1.6 cm、幅 1.4 cm。中房径 3.8 cm、中央蓮子径 1.5 cm、周囲の蓮子径 0.6 cm。圓線幅 0.4 cm。珠文は 42 個あり、径 0.5 cm、間隔 0.4 cm。外縁幅 1.9 cm。瓦当裏面中央には指頭圧によるくぼみがあり、接合部両端には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.4 cm、厚さ 2.7 cm、残存長 3.8 cm。

II 式 1 点。06YSDG2：2 は、灰白色の精良な胎土で、表面は浅い灰色を呈する。焼成温度はやや高い。九弁の珠文形弁で、中房の中央に珠文が 1 つあり、その周囲に圓線がめぐり、その外側に 12 個の蓮子がまわる。蓮弁は豊満で突出し、間弁はない。弁の外側には二重の圓線と二重の珠文が飾られる。圓線幅 0.3 cm。珠文は摩滅しており、大小配置は均等である。中房径 3.5 cm、中央の蓮子径 1.3 cm。蓮弁径 1.5 cm、外縁は平縁で基部はすぼまる。蓮弁と外縁は同じ高さである。外縁幅 2.4 cm。瓦当裏面は平坦で、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 16.5 cm、厚さ 1.3 cm、残存長 4 cm（図版 1-20）。

III 式 1 点。十三弁の桃形蓮弁。中房の中央には圓線をともなう蓮子が 1 個あり、その周囲に 11 個の蓮子がめぐる。蓮弁の外側には圓線が一周し、珠文はみられず、間弁もない。瓦当面は平坦の平縁である。形は整っている。標本 06YSDTG 井：5 は、胎土が精良で浅い灰色を呈し、表面に朱をぬっているようだ。桃形弁は円形に近く、豊満で突出し、瓦当面より高い。蓮弁長 1.7 cm、幅 1.5 cm。中房径 5.2 cm、中央連子径 1.6 cm、周囲の蓮子径 1.6 cm。外縁幅 1.5 cm。瓦当裏面は平坦で、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.5 cm、厚さ 2.4 cm、残存長 4.8 cm（図版 1-21・附図 2-1）。

Cc 亜型 異形蓮華文瓦当。3 点。蓮弁の形状の違いから I 式と II 式に分類する。

I 式 2 点。標本 06YCJT2③：1 は八弁の蓮華文で、蓮弁長 1.6 cm、幅 2.0 cm、蓮弁は比較的の写実的である。中房は全体にくぼみ、直径 3.3 cm、蓮子は 7 個で径 0.5 cm。間弁は弧辺の三角形で、かなり扁平（あるいは一字形ともいう）である。蓮弁の外側に残存する珠文は 21 個。平縁の幅 1.3 cm、厚さ 0.2 cm。瓦当裏面は欠けており、同心円状のナデ痕跡がある。瓦当径 12.1 cm、厚さ 2.3 cm、残存長 2.8 cm（図版 1-22・附図 5-2）。

II 式 1 点 標本 06YCJT2④：10 は、胎土が精良で鉄灰色を呈し、焼成温度はやや高い。瓦当面は平坦で、変形の八弁蓮華文をかざり、間弁はない。蓮弁長 2.6 cm、幅 3.0 cm。中房は円盤状をなし、瓦当面と高さが同じで、9 個の蓮子をかざる。中房径 2.9 cm、蓮子径 0.4 cm。蓮弁の外側には圓線と珠文が一周し、圓線幅 0.3 cm、珠文は 23 個残存する。珠文径 0.4 cm、間隔は 0.4 cm。おそらく計 44 個があつたと思われる。瓦当外縁は平縁で比較的狭く、幅 1.2 cm、厚さ 0.3 cm。瓦当面の装飾は簡潔である。瓦当裏面は平坦で、同心円状のナデ痕跡

がある。接合部の両端には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.9 cm、厚さ 2.1 cm、残存長 3.7 cm（図版 1-23・附図 3-1）。

C 丸 瓦

丸瓦は I 式と 2 式に分類する。

I 式 唐代中期。表面はやや赤みをおびた土色を呈し、凹面は布目である。長さ 34.0 cm、幅 15.5 cm、厚さ 1.2 cm。玉縁長 3.5 cm、幅 10 cm（07YSXDT3 : ⑧、図版 2-1）。

II 式 唐代後期。表面は灰黒色を呈し、凹面は布目。長さ 45 cm、幅 16.5 cm、厚さ 1.7 cm。玉縁長 3.7 cm、幅 11.5 cm（04YWGE④ : 39、図版 2-2・附図 6-1）。

D 平 瓦

I ~ III 式に分類する。

I 式 唐代前期。灰色の胎土で、表面は青灰色を呈する。凹面は布目。長さ 29.0 cm、幅 27.0 cm、21.5 cm。厚さ 1.1 cm（07YSXDT9④ : 1、図版 2-3）。

II 式 唐代中期。灰色の胎土で。表面は灰黒色を呈する。凹面は布目。長さ 34.5 cm、幅 29.5 cm、24.0 cm。厚さ 1.3 cm（07YSXDT4⑤ : H1、図版 2-4）。

III 式 唐代後期。灰色の胎土で、表面は赤みをおびた土色を呈する。凹面は布目。長さ 38.0 cm、幅 25.2 cm、21.5 cm。厚さ 1.1 cm（04YWGE④ : 29、図版 2-5・附図 7）。

このほか、揚州城の発掘調査では、比較的文字の多い銘文をもつ平瓦も出土している。灰色の胎土で、表面は赤みをおびた土色あるいは灰黒色を呈する。銘文はスタンプとヘラ書きとがある。内容は、「官」、「六官」「東窯焼造」、「西窯」などがある。スタンプの形状は、円形、方形、長方形、八角形などがある。銘文は、平瓦が出土した時点で多くは破片になっており、標本 1 点は唐代後期。瓦の表面には「官」がスタンプされ、灰赤色の胎土で、表面は赤みを帯びた土色を呈する。凹面は布目。長さ 35.5 cm、幅 24.5 cm、20.0 cm。厚さ 1.5 cm（07YSXDT3④ : H1、図版 2-6・7）。

E 文様磚・獸面文瓦

スタンプ文の磚は灰白色の胎土で、表面は青灰色を呈する。厚さ 5.0 cm。磚の表面には花文、雲気文、圓線文、乳釘文などを組み合わせて図案とする（06YSDTG1 井 1、図版 2-9・附図 2-3）。

スタンプ文の磚は灰色の胎土で表面は青灰色を呈する。厚さ 5.5 cm。磚の表面には連弧文、圓線文、雲気文、乳釘文を組み合わせて図案とする（06YSCJT4④井 1 : 10、図版 2-10）。

獸面文瓦は 2 点ある。標本 06YCJT2④ : 11 は下部が欠けている。高さ 21.9 cm、幅 17.1 cm、厚さ 4.1 cm（図版 2-8・附図 5-3）。

G おわりに

上述の4地点から出土した瓦磚類は、発掘した出土層位によって時代を決定している。文昌広場から出土した丸瓦と平瓦の地層は唐代中～後期であり、同一の地層から出土した陶磁器は長沙窯産を主とし、鞏県窯産の白磁や青花も共伴する。錦旺苑小区出土の瓦当の層は、唐代長沙窯産の磁器片や開元通宝などを含み、唐代中～後期と推測する。ここから出土した瓦当の時代も唐代中後期より遡ることはないだろう。世界動物窓から出土した瓦当は、多くが井戸から出土している。井戸の時代は唐代後期～五代で、瓦当もこの時期に相当する。瘦西湖レジャー村で丸瓦が出土した層は唐代中期で、この層には、陶磁器では宜興窯、洪州窯産の青磁が多い。平瓦の出土した層位は比較的古く、だいたい唐代前期である。共伴した陶磁器は、盤口壺、豆形盤、餅足球腹碗などが多い。ゆえに、平瓦の時代は唐代前期より新しくなることはない。銘文瓦の多くは、唐代後期～五代の時期の土坑から出土しており、共伴しているのは長沙窯、宜興窯、越窯、定窯などであるから、その時代もかなり新しく、唐代後期～五代に相当する。

同時に、Ca型II式に属する06YSDTG井：11と06YSDG2：1は、それぞれ別つの地点から出土しており、Ca型III式、Ca型IV式とCa型V式の絶対年代は唐代後期～五代あるいはさらに新しい時期に相当する。このほか、Bb型I式の06YCJT4④H2：4は南京出土の六朝時期のAb型III式のNYW：106とかなり類似しており⁽¹⁾、その製作年代は六朝時期の可能性がある。現在の揚州天寧寺が、最初は東晋の謝安の邸宅であったという史実とも関連し、錦旺苑の位置が六朝時期の建物である可能性もある。Aa型I式の06YCJT3④：7も、南京出土の隋唐蓮華文瓦当の蓮弁と形状や瓦当面の文様の構造などが類似しており⁽²⁾、また、これらの瓦当と唐代両京地区の瓦当を比較すると、かなり大きな違いがある。したがって、揚州から出土した蓮華文瓦当は六朝時期の伝統をそなえており、かなり強い地方色を示しているといえる。

揚州は、歴史上、江淮ないし中国東南地区の政治、経済、文化の中心のひとつであり、隋代には江都宮を設け、唐代は両京に次ぐ全国第三の都市となり、経済の繁栄は「揚一益二」の称譽を得た⁽³⁾。しかし、揚州城遺跡から出土する瓦当などの報告は比較的少なく⁽⁴⁾、上述の資料は揚州城遺跡の瓦当についての初めてのまとめた紹介である。

錦旺苑小区の建設工事現場は、長征西路の西端にあたり、唐代はにぎやかな羅城内に位置し、東は汝河（唐代城内の官河）から約300mである。世界動物窓の地点は、鉄仏寺の北東の唐代子城東南角と羅城北城壁が接する場所の南縁に近く、南側は邗溝の旧河道になる。世界動物窓の工地では唐代の建物基礎跡と磚敷きの道路遺構、唐から五代時期の瓦当、丸瓦、平瓦、文様磚などの遺物が発掘された。世界動物窓は、鉄仏寺と同じ小高い場所にある。この場所は1984年秋に南京博物院、南京大学歴史系、揚州博物館が200m²の発掘調査をおこ

ない、唐～五代時期の建物基礎と磚敷き道路などを発掘し、スタンプやヘラ書きの銘文をもつ平瓦が出土した。それらは、「官」、「東窯焼造」、「西窯」などの銘がある。世界動物窓の発掘地点は 1984 年発掘地点の東側に近く、層位からみると 2 度の発掘で出土した建物の基礎は同一時期の遺構である。鉄仏寺は、文献によれば、唐の光化年間（899～901 年）に淮南節度使楊行密の旧宅で、後の楊吳時代に楊行密の行宮となる。

総合すると、揚州出土のこれらの瓦磚類は、すべて唐の羅城の範囲内にある唐代中期あるいは後期の層からのもので、同時に大量の遺物や遺構が出土したので、時代は唐代で間違いないだろう。しかし、一部の遺物は、南京や鎮江地区から出土した六朝の遺物と類似している。したがって、揚州から出土した瓦磚のうち一部は、唐代以前のものである可能性も排除できない。唐の羅城の創建年代は唐代中期であるが、揚州城の造営時期はさらに古く、のちにも利用され続けている。上述の 4 地点は唐代羅城内の重要な繁華街であり、出土した大量の遺物や遺構からみると、これらの建物の性格を追究するうえで唐代揚州城の構造や歴史的沿革などはみな重要な手がかりとなる。

註

- (1) 賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社、2005 年、p.40。
- (2) 賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社、2005 年、p.49。
- (3) 『資治通鑑』卷 259。
- (4) 南京博物院・揚州博物館・揚州師範学院発掘工作組「揚州唐城遺址 1975 年考古工作簡報」『文物』1977 年第 9 期。南京博物院「揚州古城 1978 年調査発掘簡報」『文物』1979 年第 9 期。優振曉・谷建祥「揚州市蜀崗唐城遺跡和遺物」『考古』1990 年第 4 期。中国社会科学院考古研究所・南京博物院・揚州市文化局「江蘇揚州市文化宮唐代建築基址発掘簡報」『考古』1994 年第 5 期。李則武「揚州新近出土的一批唐代文物」『考古』1995 年第 2 期。

図版1-1 揚州城出土軒丸瓦の型式分類（1）

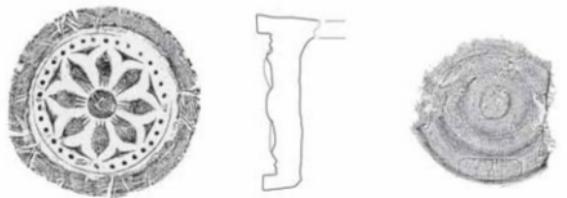
型 番 号	A型（円弁型）		B型（尖弁型）		C型（変形弁型）		
	An型	Ab型	Ba型	Bb型	Ca型	Cb型	Cc型
I式							
II式							
III式							

図版1-2 揚州城出土軒丸瓦の型式分類（2）

型 垂 型	A型（円弁型）		B型（尖弁型）		C型（変形弁型）		
	Aa型	Ab型	Ba型	Bb型	Ca型	Cb型	Cc型
IV 式	 4			 11	 17		
V 式				 12	 18		
VI 式				 13			

図版2 榆州城出土の丸瓦、平瓦、紋様磚の型式分類

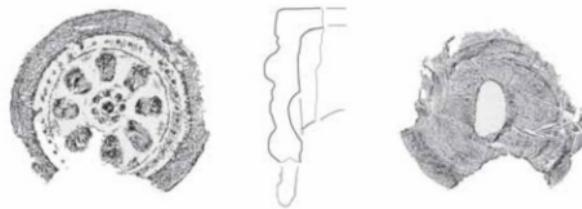
	丸瓦	平瓦	文字瓦	獸面磚	紋様磚
唐代前期		 3			
唐代中期	 1	 4		 8	
唐代後期	 2	 5	 6		 9
			 7		 10



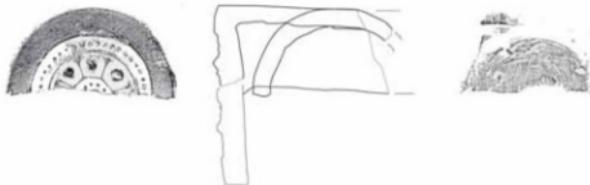
1



2



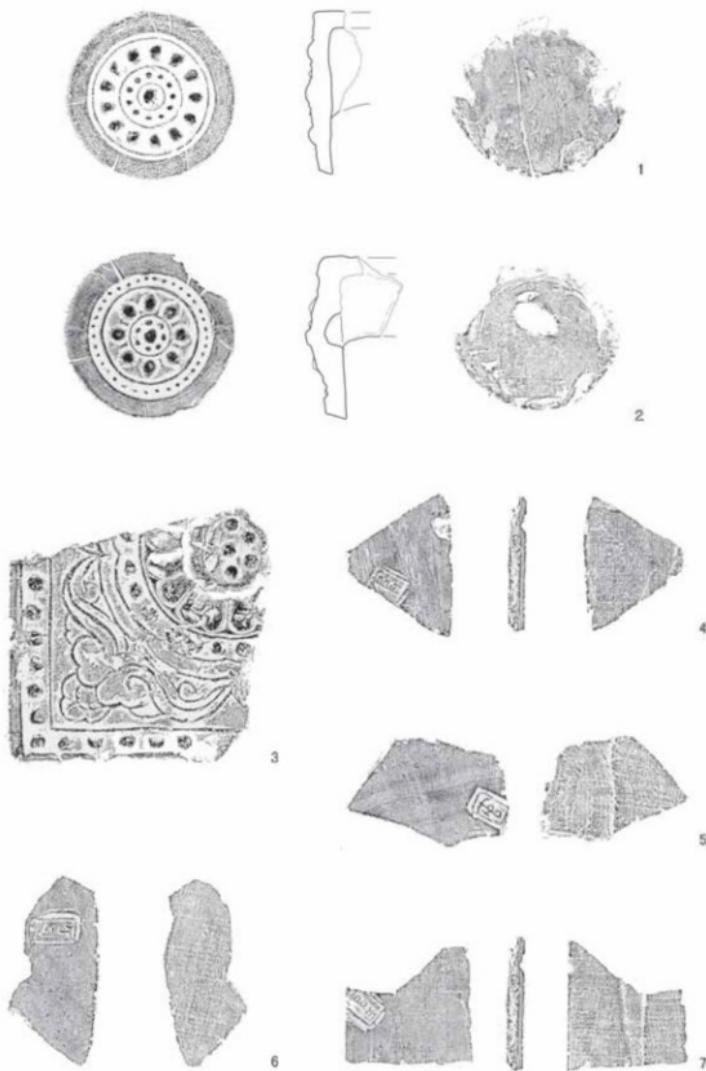
3



4

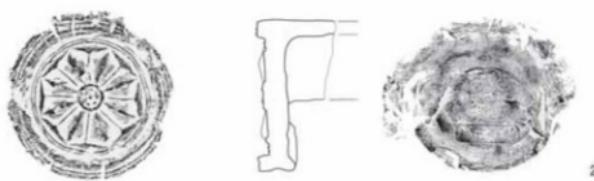
1. 06YSDJ ⑨ :1 2. SD ③ :24 3. 06YSDTG 井 :20 4. SD ③ :26

附圖 1 揚州唐朝出土瓦 (1:4)



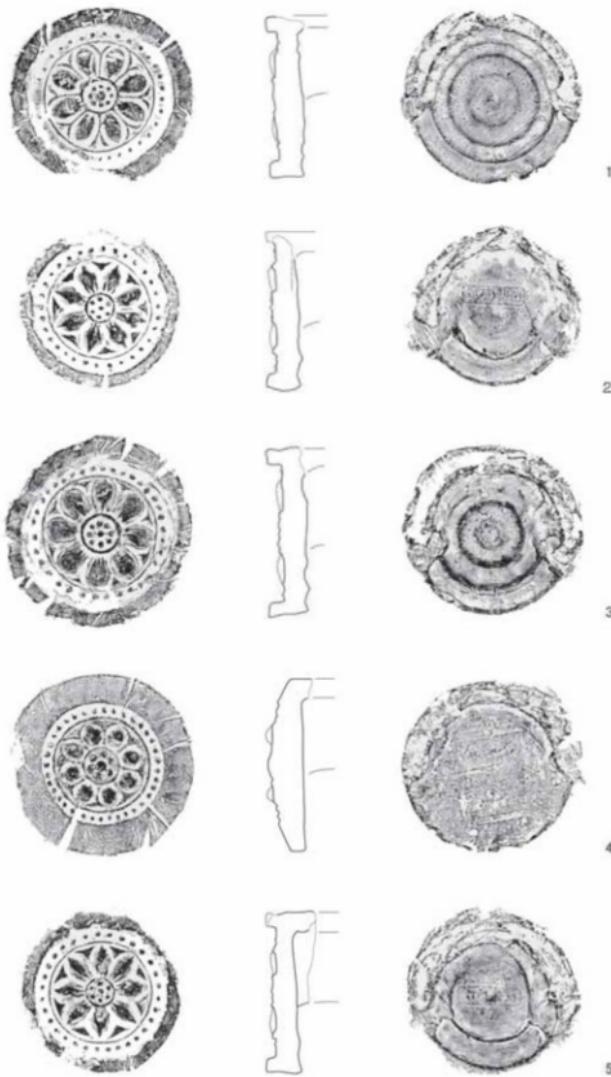
1. 06YSDTG 井:5 2. 06YSDTG 井:1 3. 06YSDTG1 井1 4. SD ③:33
5. SD ③:31 6. SD ③:35 7. SD ③:32

附図2 揭州唐朝出土瓦 (1:4)



1. 06YCJT2 ④ :10 2. 07YCJT4 ④ H2:4 3. 06YCJT3 ④ :7 4. 06YCJT3 ④ :9 5. 06YCJT3 ④ :6

附图3 揭州唐朝出土瓦 (1:4)



1. 06YCJT4 ④ :23 2. 06YCJT4 ④ :22 3. 06YCJT4 ④ :18 4. 06YCJT2 ④ :8 5. JW ④ :10

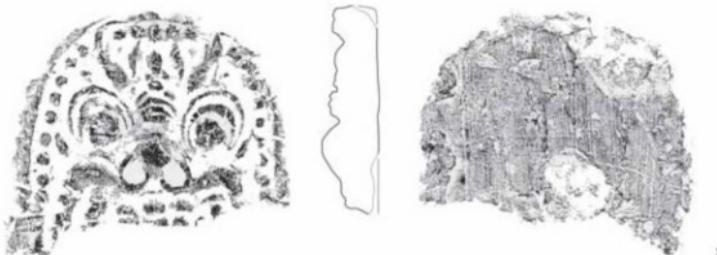
附図4 揭州唐朝出土瓦 (1:4)



1



2



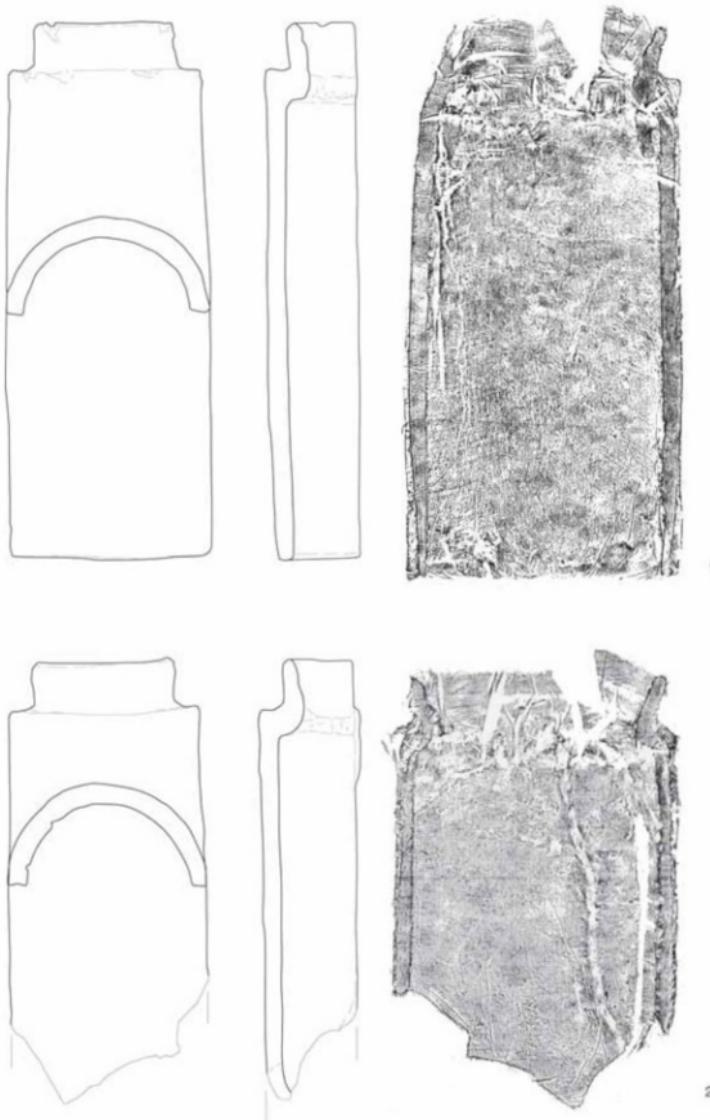
3



4

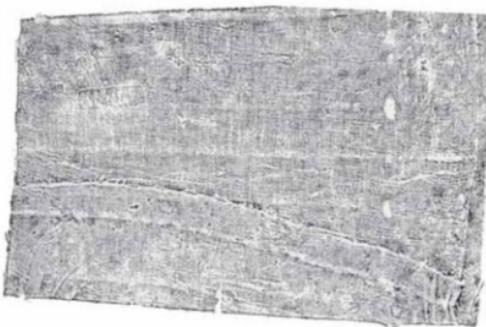
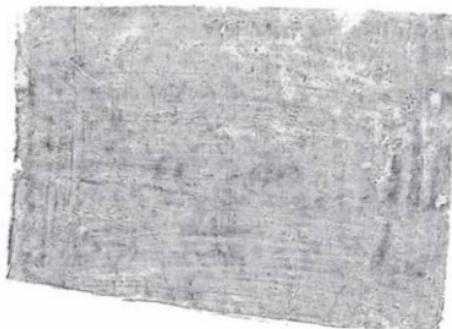
1. 06YCJT4 ③ :1 2. 06YCJT2 ③ :1 3. 06YCJT2 ④ :11 4. JW ④ :13

附圖 5 揭州唐朝出土瓦 (1:4)

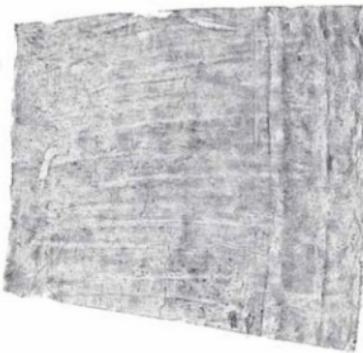
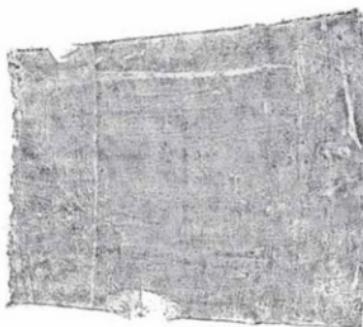


1. 04YWGE ④:39 2. WG ④:40

附図6 揭州唐朝出土瓦 (1:4)



04YWGE ④:29
附圖 7 揭州唐朝出土瓦 (1:4)



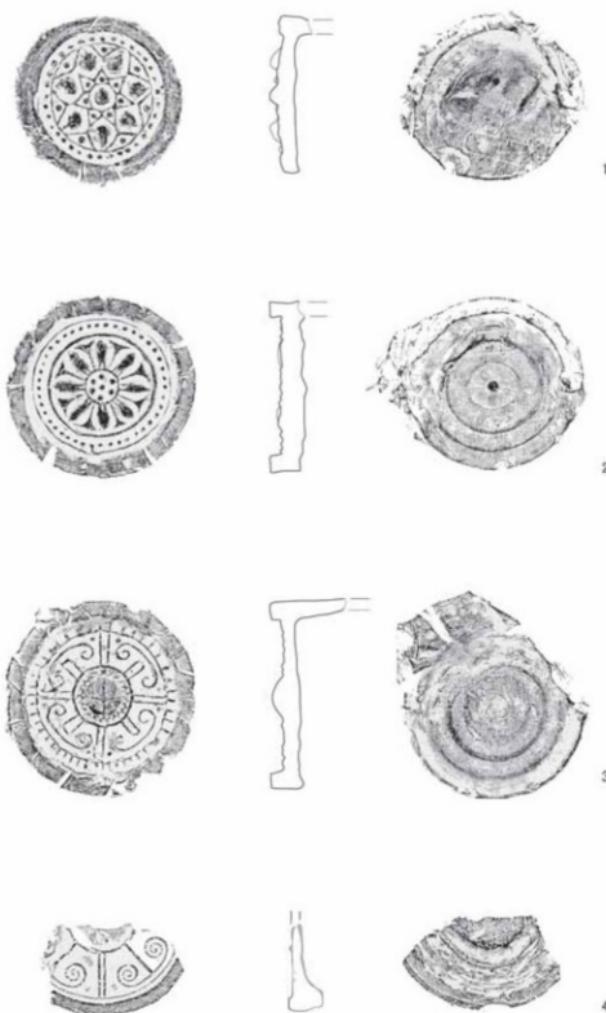
1. WG ④ :30

附図8 揭州唐朝出土瓦 (1:4)



1. WG ④ :23 2. XM ③ :36 3. XM ③ :37 4. SY ④ :19

附圖 9 揚州唐朝出土瓦 (1:4)



1. 06YF-05-03T3 ③ :4 2. 06YF-05-03T ③ H3:1 3. KSS ⑥ :20 4. SKSS ⑥ :38

附図 10 揚州唐朝出土瓦 (1:4)

5 唐大明宮太液池出土瓦磚の基礎的研究

何歳利・龔国強・李春林

(中国社会科学院考古研究所)

A はじめに

大明宮は唐長安城の三大内の1つで、規模が最大で使用期間も長く、歴史的に最も重要な皇宮である。太液池は蓬萊池とも呼ばれ、唐大明宮北部の中央に位置し（現在の陝西省西安市北郊外未央区大明宮郷孫家溝、旧称孫家凹村の西南）、西池と東池からなる。西池は太液池の主要部分で、面積もかなり大きい。太液池は唐代の重要な皇家宮廷苑池の1つで、その周辺にある宮殿、樓閣、亭台などとともに、大明宮の重要な構成要素となっている。

B 太液池遺跡の調査概要

太液池の考古学的調査は、1957年西安唐城工作隊による事前調査にはじまる。1998年に西安唐城工作隊が太液池について再度詳細なボーリング調査をおこない、島の遺構を発見した。2000年春には、西安唐城隊が最初の試掘調査を実施した。2001年秋から2005年春かけては、中華人民共和国國務院の特別許可と国家文物局の批准を受けた後、中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊と日本の奈良文化財研究所が共同で日中連合考古隊を組織し、太液池のおもに西池周辺で、大規模な発掘調査を実施した。

発掘調査では、太液池の南岸、東南岸、西岸、北岸、池をめぐる周回路、南部の宮殿と回廊、苑池、西部の建物群、北部の建物群、蓬萊島南部、新発見の島、西北部の導水路などの遺構を確認し、数多くの資料を得ることができた（図1・2）⁽¹⁾。

C 瓦磚の出土状況

太液池遺跡から出土した遺物は非常に豊富で種類も多い。遺物は瓦磚類を主とし、そのうち瓦の量は最も多く、平瓦、丸瓦、軒丸瓦などがある。ただし、大多数は破片である。

平瓦と丸瓦の多くは表面に光沢があり、内面に布目のある灰色の瓦と、表面に炭素を吸着させた「青棍瓦」がある。一部には瓦の凸面の端部寄りにスタンプがあり、その内容は工人の名前、紀年や月日である。「匠楊氏」、「昭七年」、「左策辛巳」、「使窯」などがある。一部の平瓦の端部には四重弧文が施され、これらは軒平瓦である。このほか単彩や三彩の瓦もある。

軒丸瓦の大部分は蓮華文で、獸面文も少量ある。蓮華文瓦当は範でつくり、単弁と複弁がある。中房は凸球状、柿蒂状、十字文、写実的な中房、蓮華など変化に富んでいる。

D 瓦の製作技法の研究

ここで取り上げる太液池出土の瓦は宮殿、亭台、建物、苑池などで使用されたものを多く含んでおり、唐代の瓦研究からいえば代表的な意義を有している。

従来、中国の瓦磚研究において注目されてきたのは類型学的研究であって、製作技法の研究は少ない。たとえば、瓦（瓦当を含む）についての大多数の研究報告は、瓦の模様や装飾に言及するのみで、製作技法（たとえば瓦当裏面の製作痕跡など）についてはあまり注意されていない。実測図や図版も、多くは瓦の正面だけで、瓦当裏面の資料はない。実測図の平面図と断面図にも製作痕跡についての描写はない。

2005年初頭に、中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所は、「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究」という課題の共同研究を開始し、瓦の研究においてあらたな視点を導入した。これは瓦磚についての細かな研究や全面的な研究を推し進めるだけではなく、考古学研究のほかの分野についても有意義である。

筆者は、太液池から出土した瓦の製作技法について観察するために、大明宮含元殿、三清殿、麟德殿、丹鳳門、含羅門、唐九成宮、唐長安城西市、含光門、西明寺、青龍寺遺跡および隋唐洛陽城、漢長安城、北魏洛陽城などの一部の出土瓦資料を調査した。このほか、東アジアから出土した瓦の資料についても収集した。この場を借りて、太液池から出土した瓦にもとづき、唐代瓦の製作技法に関する分析をおこなって、諸氏の叱正を請いたい。

E 瓦の製作技法

出土した瓦を詳細に観察すると、その辺縁や接合部分には当時の製作時点の痕跡が残っていることがある。これらの痕跡の観察をとおして、その製作技法を解明していきたい。

(i) 唐代の瓦製作における分割方法与中国古代瓦の分割方法

瓦製作の技術は比較的複雑である。たとえば、粘土の選択、水築、粘土の練り、タタラの製作、範の製作、陰干し、分割、丸瓦と瓦当の接合技術などがあり、そのほか各工程の節々でさらに細かい技術のポイントがある。

分割技法の研究は、おもに瓦の辺縁にのこる分割痕跡を観察して、焼成前の瓦の分割方法を研究する（以下、分割方法と略す）。

唐代の瓦製作における分割技法 太液池出土の瓦は、平瓦、丸瓦にかかわらず、瓦の辺縁の分割痕跡は、すべて瓦の左右両側面の凹面寄りにかなり明瞭に残る。分割痕跡の表面はつやがあって滑らかで、ほとんどの瓦は、截面、破面の幅が不均一である。同一の瓦の両側面あるいは異なる瓦の両側面だけでなく、同一の瓦の1側面（左あるいは右）の截面の幅もみな差異がある。左右両側面の截面の幅が比較的統一されているものは少数にすぎない。截面の幅は一般に2～10mmで、およそ側面幅の6分の1から5分の3ほどで、なかには3分の1

から2分の1を占める場合もある。両側面には截面のほか、粗い凹凸のある面もあり、明らかに截面にそって分割するときに割れた部分である（図4・7を参照）。つまり、太液池出土の瓦の製作時における分割方法は、成形した粘土円筒を陰干したのち、内側から2分の1ほど切り込みをいたあとに割る。この種の方法を「内切」とする（注：平瓦の分割は一般に円筒形の粘土を4分割する。丸瓦は2分割）。

太液池出土の瓦以外に、大明宮含元殿、三清殿、麟德殿、丹鳳門、含耀門、唐九成宮など、その他の唐代遺跡から出土した瓦の観察の結果、分割方法はすべて以上のようなものであつた（図5・6）。観察中に発見したのは、少数の瓦の截面が二重になつたり、交差したり分離したりする現象である。また、破面も一部削る、切る、磨くなどの調整をしていることである。すなわち、唐代の瓦の側面の「内切」はすべてが一度だけの切り込みではなく、二度の切り込みや破面の調整をする例などもみられる。ただし、大部分の瓦は一度のみの切り込みで、破面は無調整である（図7）。

分割截面が光沢のある滑らかな面であることや、きわめて細小な分割痕跡からみて、使用した工具は扁平で薄く幅も狭く、表面が滑らかで鋭利な小刀あるいはヘラ状工具であろう。

中国古代瓦の分割技法の分析 唐代瓦の分割技法は、中国古代瓦の分割技法においても重要な位置にあり、この種の分割技法はすでに前漢時代に出現していた。筆者は、前漢長安城から出土した一部の瓦、北魏洛陽城出土の春秋戦国、秦漢、晋、北朝時期の瓦および隋唐洛陽城の瓦について調査したので、ここで中国古代瓦の製作技法における分割技法について初步的な分析を試みたい。ただ、調査した遺跡や数量は限られているので、その結果も初步的な観点にすぎないことを断つておく。

春秋戦国時期の瓦の分割技法 北魏洛陽城出土の春秋戦国時代の瓦をみると、この時期の分割技法は、おもに「糸切」と「外切」と表現することができる。

軒丸瓦の分割は、円筒塊（すなわち瓦筒、あるいは瓦壁部分とも称する）の頂部に円形の瓦当をあてて成形し、その円筒を2つに均等に分割する。この方法はかなり原始的で、分割方法にはおもに2つの工程がある。

第1工程：丸瓦に接合した円形瓦当を糸で均等に2分する。方法は、糸をつけた細い棒を瓦当の下方に横方向に突き通し、糸の一端を固定して別の端をひっぱり、瓦当を2分して半瓦当にする（「糸切」と略称する）。

第2工程：2つの半瓦当がつながった状態の円筒を、外側から小刀あるいはヘラ状工具で分割する（「外切」と略称する）。

また、平瓦の分割は「外切」と推測する。

秦漢時代の瓦の分割技法 秦漢時代は分割技術の黄金期で、造瓦技術の継承、発展、創造の主要な時期である。おもに2つの段階がある。

秦と前漢の初期～中期の分割技法は、基本的に春秋戦国時代の「糸切」「外切」を継承して

いる。ただし、分割の理念と方法には質的な変化がある。「糸切」は瓦当面を2等分することではなく、瓦当裏面に接する丸瓦部の2分の1を瓦当から切り離す。さらに丸瓦（瓦壁）の分割については「外切」のほかに「内切」技法が新たに出現した。

前漢中～後期の瓦当と丸瓦部の接合は、円筒と円形瓦当の接合から、すでに分割した丸瓦と円形瓦当の接合へとしだいに変化していき、「糸切」技法も消滅していった。

北魏時代の瓦の分割技法 北魏時代の瓦の技法は、しだいに「内切」技法が定着していき、「外切」技法は消滅した。この時期、ほぼすべての分割面や凸面側縁などに明確な切り込み、ケズリ、ミガキの痕跡がある点に注目したい。

隋唐時代瓦の分割技法 この時期は北魏、北周時代の「内切」技法を継承発展させ、技術はさらに成熟度を増す。少量の瓦の分割面には切り込み、ケズリの痕跡がある、おそらく、分割時にじた凹凸のある側面を調整したものであろう。

（ii）唐代の瓦当と丸瓦の接合技法とその起源

太液池遺跡から出土した大量の瓦の瓦当裏面をみると、多くは丸瓦端部と接合した痕跡が明瞭に残っている。これらの観察と、唐大明宮のその他の遺跡（含元殿や三清殿遺跡など）、唐九成宮、唐長安城西明寺、隋唐洛陽城遺跡、唐揚州城などの遺跡から出土した瓦との比較分析をした。唐代の軒丸瓦では、すでに分割した丸瓦と円形の瓦当裏面を接合している（以下「半接」と略称する）（図9・附図1・5）。

この種の技法は、唐代で普遍的に使用されており、相当に成熟していた。接合順序は以下のとおりである。

まず、分割した丸瓦と瓦当それぞれの接合面に刻みやかきやぶりを入れて、凹凸をつくる（図9・10）。つぎに接合する。そして接合部に調整を加える。

刻みやかきやぶりの痕跡、断面、丸瓦接合部、瓦当裏面の接合部などの加工方法を総合的に分析すると、以下のとおりである。

使用するのはヘラ状工具で、刃部の形状は、断面から判断して、おもに直刀、曲刀がある。

刻み、かきやぶりの方法は、

A 技法：曲刀ではぎ取り、刻む。まず曲刀を瓦当裏面や丸瓦部端面に斜めに切り込み、反時計回りあるいは時計回りの方向に曲刀を移動させ、刻みをつける（右ききは時計回り方向が多く、左ききは反時計回りが多い）。刻み痕跡の特徴は、切り込み面が滑らかで、削ぎ取り面は粗い（図11・12・14）。

B 技法：直刀の刻み。直刀を斜め方向に入れ、刃部を中心にして押しつけながら、くぼみをつける。この刻みの特徴は、断面が滑らかで三角状を呈する。

C 技法：直刀の削り刻み。直刀を斜めにいれて引き出す。この痕跡の特徴は、ほとんど溝状の痕がなく、刀を切り込んだ痕跡が明確である（図13）。

瓦当と丸瓦の接合部分の加工技法のなかでは、A 技法の使用率が比較的高く、その次に C

技法がつづき。B 技法は相対的に少ない。しかし、決して不变ではなく、ある時期にはある技法が卓越し、またある時期には別な技法が出現して交錯する現象もみられる（附図1）。このほか、接合時に瓦当裏面のみに刻みを入れ、丸瓦端面には刻みを入れないことがあるが、これは比較的少ない特殊な例である。

接合部の調整は、接合技術の成熟段階にあり、接合箇所の縫ぎ目はかなり小さく、接合部の凸面側はナデあるいはミガキをおこない、凹面側ではナデつけ（指か工具に水をつけて縫ぎ目をなでつける）方法をとる（図9）。

唐代の接合技法の起源について、唐代瓦当と丸瓦の接合技法は、北魏、北周、隋代の造瓦技術を直接継承しており、同時に中国古代の製作は、接合技術を発展、変化、創新、成熟させてきた結果である。

中国最古の瓦は周代に出現し、その製作技法は発展・変化し続けてきた。接合技法でいえば、周代は丸瓦円筒全体を円形瓦当に接合した（以下「全体接合」と略称する）のち、分割をおこなう。これは、秦代になんでも大きく変化しない。漢代の瓦製作における接合技術は劉振東、張建鋒両先生が研究されており⁽²⁾、筆者も実見したところ、漢代前～中期には「全体接合」であったが、接合の工程や分割方法には変化がある（漢代の接合技術はバリエーションが比較的多く、丸瓦の接合部を加工する場合としない場合がある。瓦当裏面にも加工の有無がある。接合時には、凹面側の接合部に粘土片、粘土紐、粘土塊などを貼り付ける方法がある）。このほか、秦代以前の接合技法と比較すると、かなり進歩がみられる。漢代中～後期には、分割した丸瓦と円形瓦当を接合する技法（「半接技法」）が出現する。魏晋南北朝時期には「半接技法」が次第に発展し、北魏、北周、隋代になるとこの技法は成熟していく（たとえば、北魏洛陽城で出土した北魏時期の瓦当と丸瓦の接合加工の痕跡や接合技法はほぼ同じで、丸瓦端面と瓦当裏面に刻みやかきやぶりを入れて凹凸を作り出し、接合、押しつけ、接合部のなでつけなどをおこなう）。唐代はまさにこの基礎上に「半接技法」が成熟した段階で、接合部の加工も多様化し、実用的で接合も堅実になり、調整も簡潔で美しく仕上げられる。

（iii）唐代宮城瓦の焼成技術

唐長安城の各遺跡から出土した瓦には、青灰色のものと黒色で光沢のある「青棍」瓦の両種があり、これらは焼成技術が明らかに異なる。これについては饗国強先生の研究がある。

青灰色瓦を焼成する基本原理は、焼成過程で高温の窯に水をしみこませ、瓦を酸化還元状態にして青灰色をつける。1991年に唐洛陽城東城で検出した窯は、この焼成技法を反映している。窯の頂部中央には直径5cmの円孔があり、孔の上には完全に蓋をしていない磚があった。水をためるために水をゆっくりと窯内にしみこませる目的であろう。この窯頂部の穿孔、水をしみこませる焼磚技術は、唐代の文献中にはみられないが、明代の『天工開物』卷中陶埏第7、磚の条に「凡柴薪窯、巔上偏側鑿三孔以出煙、火足止薪之候、泥固塞其孔、……窯巔作一平田様、四周稍弦起、灌水其上。磚瓦百鈞用水四十石。水神透入土膜之下、与火意相

感而成。水火既済、其質千秋矣」とある。上述の窯の燃焼室や土坑に残留した大量の木炭灰、水をしみこませる孔などから、この窯が明代の柴薪窯に相当することは間違いない。

「青棍窯」と「素白窯」は、燃料や瓦磚の製作法にも違いがある。その焼成方法には、還元の過程で煤を発生させる工程が加わる。『營造法式』卷15には「青棍窯燒茲草、次蒿草、松柏柴、羊糞、麻繆、濃油、蓋罋、不令透煙」と見える。具体的工程はまず茲草を燃やし、酸化焰で窯内の瓦磚をすばやく焼成温度に引き上げ、還元状態になるまえに燃して煤を浸透させる。松柏などの燃料が燃やしたときにできる濃い煙には煤が多くふくまれ、それが羊糞や麻繆、濃油を加えたときにすぐに完全燃焼させることができず、大量の濃い煙を発生させる。煙中の炭素は最後に瓦の表面に沈着し、製品を黒く光沢をおびたものにする。青棍瓦の焼成時に消費する燃料の茲草は「素白窯」磚瓦の2倍ちかくである。さらに、青棍瓦の製作時には表面にミガキをかけ、滑面「棍措」を加えることによって、上質で緻密かつ堅実、黒色で光沢があり、炭素が浸透して防水性にもすぐれた製品を生み出す。青棍瓦の製作技法は複雑で経費も非常に高く、当時は高級な建築材料であった。青棍瓦は唐大明宮（太液池、含元殿遺跡を含む）遺跡内で大量に出土し、その外観は今に至るまで光沢があり、新品のようである。その断面も緻密で堅く、唐代瓦磚製作技法のすばらしさを十分に物語っている⁽³⁾。

（iv）丸瓦と瓦当の接合方法からみた4～8世紀の東アジアの造瓦技術

古代の高句麗、百濟、日本の接合技法 高句麗の接合技法について、4世紀初頭に伝わった卷雲文軒丸瓦と丸瓦の接合技法はあまり明確ではない。蓮華文軒丸瓦については、5世紀ごろに瓦当の型作りを採用し、粘土紐で作成する。丸瓦と瓦当の接合部には刻みをおこなったのち（瓦当裏面には接合溝はつくらない）、丸瓦と接合し、さらに少量の接合粘土を隙間に貼り付けて処理している（北魏の技法ときわめてよく似ている）。6世紀初めに輻線蓮華文、忍冬文、獸面文軒丸瓦が出現したのち、丸瓦との接合方法は、瓦当裏面の接合部分に接合溝をつくる方法を採用することが多くなる。接合溝内には刻みがみられ、ときには丸瓦端面にも加工することがある⁽⁴⁾。

百濟の接合方法は、丸瓦端部を加工するものとしないものがある。丸瓦端部の加工には、端部の1面（凹面側）、あるいは2面を削る（1面を削ると二等辺三角形か臍状になり、2面では断面が三角形になる）などして瓦当に接合する。丸瓦端部を加工しない場合、端部は平坦で接合時には瓦当に包み込まれる。あるいは瓦当裏面に溝をつくって丸瓦を差し込むか、直接丸瓦を瓦当裏面に接合する。さらに押しつけたり、ナデつけたり、あるいは指か工具で凹面側の接合部分をナデつけたりして調整する。接合部分の凸面側は一般に調整しない⁽⁵⁾。

日本の接合方法について、日本で瓦の製作が始まるのは6世紀末でややおくれる。丸瓦と瓦当の接合方法は、平城宮でみると2種類ある。第1は丸瓦を直接瓦当裏面においたのち、丸瓦の凸面と凹面に粘土を足して接合し、ときには瓦当裏面に接合溝を作り出し、丸瓦端部を差し込むもの。第2は瓦当と丸瓦を同時に一気につくる。これまでの研究によれば、奈良

時代の瓦当の大部分は第1の方法を採用しており、第2の方法は特殊な例である。

漢唐時期の古代中国と高句麗の造瓦技術 中国的漢唐時期は、高句麗政権が勃興し、滅亡する時期にあたる⁽⁶⁾、集安の高句麗王陵の測量や発掘調査では、多くの卷雲文軒丸瓦と蓮華文軒丸瓦が出土した。

卷雲文軒丸瓦は、西大墓、禹山992号墓、麻線2100号墓や千秋墓から出土した。この種の卷雲文瓦当は戦国時代に出現し、漢魏時代に盛行した。卷雲文は4世紀初めごろに高句麗時代に伝わり、使用されはじめた段階で既に成熟していた⁽⁷⁾。瓦の伝播にさいしては、文様だけではなく、製作技法も借用、模倣された。一般に瓦を使用しない高句麗でありながら、その使用開始段階から形が成熟しており、製作技法のなかでも、少なくとも文様を製作するときには漢代の技法を参考にしたのであろう。丸瓦と瓦当の接合についても、おそらくは漢魏時期の製作技法の影響を受けていると考えられる。

蓮華文軒丸瓦は、千秋墓、太王陵、將軍塚および禹山2112号大墓で大量に出土している。墓上で出土する蓮華文瓦当は成熟した文様で、卷雲文瓦当のうち、北魏の瓦当が流行し、それに取って代わったものである。使用時期は明らかに遅いが（5世紀頃）、形態や文様には新しい創造があり、この後、蓮華文は高句麗陵墓や建物装飾の主要な形式となる⁽⁸⁾。6世紀からは、蓮華文以外にも忍冬文、獸面文も相次いで出現し、高句麗の瓦当文様は次第に多様化していく⁽⁹⁾。高句麗の5、6世紀の瓦当と丸瓦の接合技術は、古代中国の漢魏時代の技法と多くの点で類似している。

高句麗の4世紀における造瓦技術は、おおかた中国古代の造瓦技術の影響を受けており、北魏時代以降も相応の影響を受けている。この種の分析はさらに多くの資料、さらに広汎な調査研究が必要となる（たとえば、さらに多くの高句麗出土軒丸瓦と遼寧朝陽地区の「三燕」の軒丸瓦、江蘇南京の南朝の軒丸瓦との対比研究が必要となろう）。

百済、新羅、高句麗と古代日本の造瓦技術 朝鮮半島の高句麗、百済、新羅瓦に対する研究は、日本や韓国の学者のものが比較的多い⁽¹⁰⁾。百済の漢城時代（？～475年）の瓦は、楽浪郡や高句麗瓦の影響を強く受けている⁽¹¹⁾。その後、熊津時代（475～538年）以降は、おもに中国の南朝瓦の影響を受ける⁽¹²⁾。ただし、少数の学者は、熊津時代以後も高句麗の瓦の影響を受けていると指摘する⁽¹³⁾。

朝鮮半島においては、高句麗瓦の百済瓦や新羅瓦に対する影響は、学界では基本的に認められており、出土品からも実証されている。百済の扶余の双北里寺遺跡、龍井里寺遺跡、宝文山城などの遺跡で出土した瓦の中には、高句麗系丸瓦がある。また、新羅の慶州月城城子遺跡、塔平里遺跡、阿且山城などでも、高句麗系の瓦が出土している。したがって、高句麗の造瓦技術が百済や新羅に影響を与えたことを否定することはできない。ただし、地域差に注目すると、百済や新羅には独自の製作技法の特徴も見いだすことができる。

日本国内においても、古代の高句麗や百済と関係のある瓦が出土する⁽¹⁴⁾。古代日本の造瓦

技術は、高句麗、百濟、新羅と密接な関係にある。これについては、日本人研究者による多くの研究がある。

すなわち、7世紀前半の造瓦技術には百濟の影響が強いが、高句麗や新羅の影響もみられる。7世紀後半の日本の瓦当文様は複弁に変化し、ある研究者は統一新羅や唐代の影響を想定するが、この学説は普遍的な見方ではない。また、造瓦技術においても問題がある。

日本の造瓦技術の特徴の1つは、6世紀末に瓦の製作を開始して以来、百濟の影響を受け、基本的には粘土板を素材とする方法を採用した。しかし、藤原京の時期の瓦は例外で、多く粘土紐巻き上げ技法を採用する。筆者は、藤原京の現象は、おそらく古代中国の造瓦技術の影響をうけたものと考えるが、断定はできない。さらなる調査研究が必要となろう。

日本の瓦当と丸瓦の接合は、内外に粘土を足す方法をとるが、この重厚な接合方法は古代中国の方法とは明確な違いを示しており、日本で発展した独自の技法に違いない。

このほか取り上げたいのは、8世紀初め以降、平瓦の側面に分割痕跡がみられなくなることである。これは、古代日本の異なる時期の平瓦の製作と関係がある。7世紀における平瓦は円筒を4分割するが、8世紀初めに平城京に遷都したのち、平瓦は1枚ずつ単独で製作するようになったのである（必要な大きさの粘土板を凸型台の上にのせ、叩いて1枚の平瓦を製作する）。したがって、平瓦の側面には分割の痕跡が存在しない。この方法はきわめて特殊であり、東アジアでは日本にしか見られない。

以上の分析から、筆者は以下のように認識する。古代東アジアの造瓦技術は、直接的あるいは間接的に、また多かれ少なかれ、古代中国の製作方法の要素を含んでいる。しかし、時代や程度によって差異がある。この点は、漢魏時期の高句麗だけでなく、百濟においても同様である。つづいてそれは高句麗、百濟から古代日本へもおよび、7・8世紀の日中にはさらに広汎な文化交流があった。当然、東アジアの造瓦技術にも、それぞれ異なる特徴と独自の技術があり、異なる文化による違いがあった。

註

- (1) 中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所連合考古隊「唐長安城大明宮太液池遺址考古新収穫」『考古』2003年第11期。「唐長安城大明宮太液池遺址発掘簡報」『考古』2003年第11期。「西安唐大明宮太液池南岸遺址発現大型廊院建築遺存」『考古』2004年第9期。「西安市唐長安城大明宮太液池遺址」『考古』2005年第7期。「西安唐長安城大明宮太液池遺址の新発見」『考古』2005年第12期。何歲利「西安唐太液池皇家園林遺址」『2004中国重要国子發現』文物出版社、2005年。何歲利「唐長安城大明宮太液池遺址」『中國考古學年鑑 2004』文物出版社、2005年。「大明宮太液池遺址出土唐三彩的初步研究」『新世紀的中國考古學』科学出版社、2005年。「大明宮太液池の予備調査と発掘調査研究」『東アジアの古代都城』奈良文化財研究所、2003年などを参照。
- (2) 劉振東・張建鋒「漢代磚瓦初步研究」『考古學報』2007年第3期。
- (3) 龜國強「由銘文磚瓦談唐長安城宮城的磚瓦之作」『漢代考古與漢文化國際學術研討會論文集』齊魯出版社、2006年。
- (4) 谷 豊信「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察」『東洋文化研究所紀要』第108冊、1989年。

- 谷 豊信「平壙土城里発見の初期高句麗瓦当について」『東洋文化研究所紀要』第 112 号、1990 年。千田剛道「高句麗の軒丸瓦」『古代瓦研究 I —飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで—』奈良文化財研究所、2000 年。
- (5) 亀田修一「百濟古瓦考」『百濟研究』12、1981 年。亀田修一「百濟軒丸瓦の製作技法」『古代瓦研究 I —飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで—』奈良文化財研究所、2000 年。
- (6) 漢建昭二年（前 37 年）、東北高句麗族崛起、建立高句麗政權。初、都于乾升骨城（遼寧省桓仁県五女山城）。漢元始三年（3 年）、遷都國內（集安城区内城）。北魏始光四年（427 年）再遷都朝鮮半島之平壤城（今朝鮮平壤市）。唐總章元年（668 年）高句麗被唐朝所滅。在其存在的 705 年中、以集安為都城歷時 425 年。今集安地区保留有高句麗時期的兩座都城、多處遺址、墓葬。其中有 18 王葬在集安。
- (7) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館『集安高句麗王陵 1990—2003 年集安高句麗王陵調査報告』文物出版社、2006 年。
- (8) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館『集安高句麗王陵 1990—2003 年集安高句麗王陵調査報告』文物出版社、2006 年。
- (9) 千田剛道「瓦からみた高句麗古都集安」『青丘學術論集』第 5 集、韓國文化研究振興財團、1994 年。
- (10) 百濟、新羅、高句麗の瓦研究の学者は、日本の亀田修一先生、佐川正敏先生、藤沢一夫先生、福垣晋也先生、千田剛道先生、韓国の金誠亀先生、朴容填先生などがいる。
- (11) 亀田修一「百濟漢城時代の瓦に関する覚書—石村洞 4 号墳出土例を中心として—」『尹武炳博士回甲紀念論叢』1984 年。
- (12) 藤沢一夫「日鮮古代屋瓦の系譜」『世界美術全集』第 2 卷、角川書店、1961 年。朴容填「百濟瓦当の体系分類—軒丸瓦を中心として—」『百濟文化』9、公州師範大学百濟文化研究所 1976 年。亀田修一「百濟古瓦考」『百濟研究』12、忠南大学校百濟研究所 1981 年など。
- (13) 朴容填「高句麗系百濟瓦当」『全北史学』1、1977 年。
- (14) 花谷 浩「豊浦寺の高句麗系軒丸瓦」。佐川正敏・西川雄大「奥山廃寺の高句麗系軒丸瓦」『古代瓦研究 I —飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで—』奈良文化財研究所、2000 年。



図 1 太液池北岸で検出した廊状建物遺構（西から、2003 年）



図2 太液池東南岸と関連遺構（北東から、2005年）



図3 含元殿遺跡の発掘（南から、1996年）



図4 太液池出土の平瓦側面

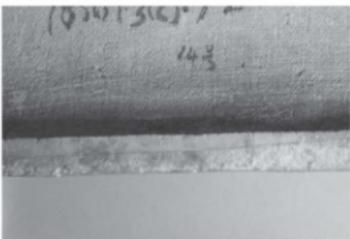


図5 唐九成宮遺跡出土の丸瓦側面

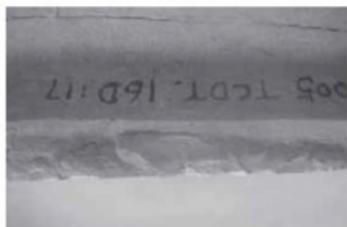


図6 太液池出土の丸瓦側面

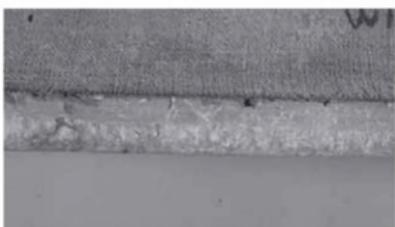


図7 西明寺出土の丸瓦側面



図8 太液池出土の瓦当



図9 太液池出土瓦当裏面の刻みと調整

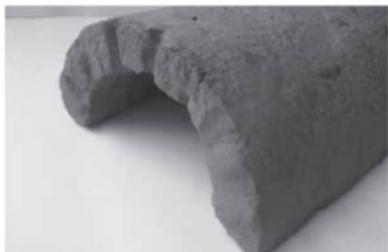


図10 麟德殿出土丸瓦の端面



図11 麟德殿出土丸瓦端面図（A技法）

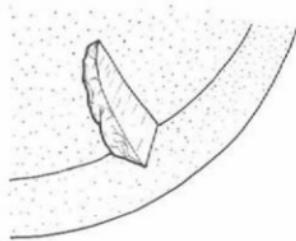


図12 太液池出土瓦当裏面接合部（A技法）



図13 太液池出土瓦当裏面接合部（C技法）

瓦当背部



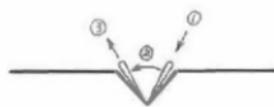
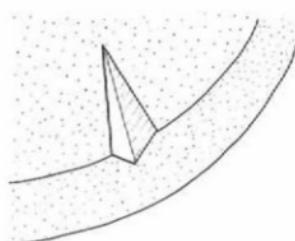
刃形



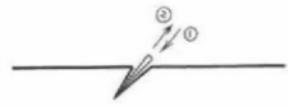
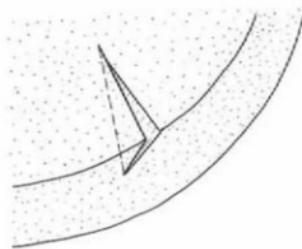
断面



A 技法



B 技法



C 技法

图 14 刻み技法模式图

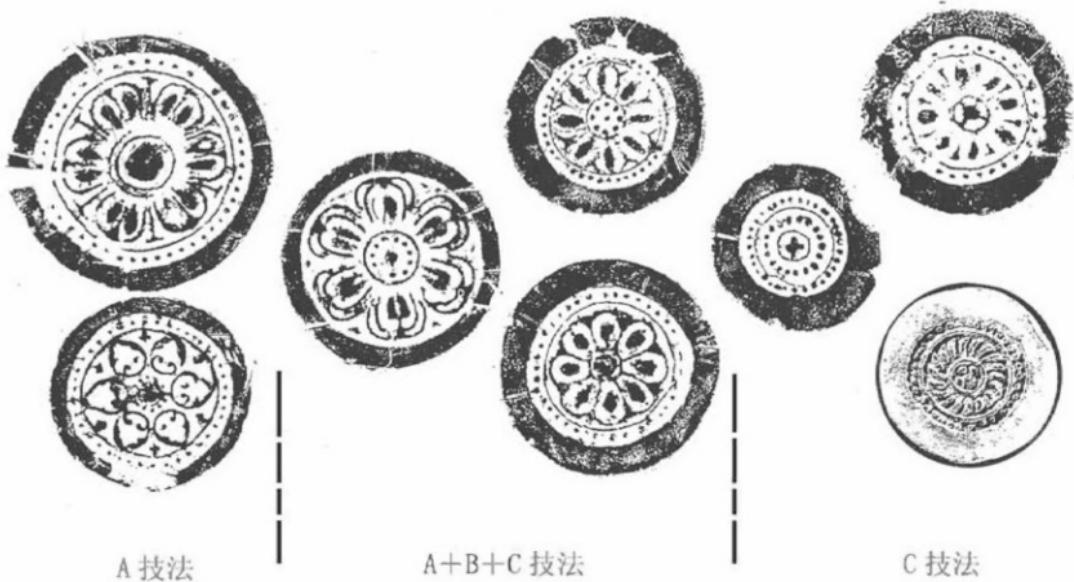


図 15 太液池遺跡出土瓦当と瓦当裏面の刻み法の対照図



1



2



3



4



5

1. 96CTDHT106 4-1 2. 96CTDHT511 9-2 3. 87DMGC43 4. 96CTDHT507 5. 96CTDHT511

附図1 唐大明宮含元殿出土瓦 (1:4)



1. 96CTDHT406 2. 96CTDHT106(5)

附図 2 唐大明宮含元殿出土瓦 (1:4)



1



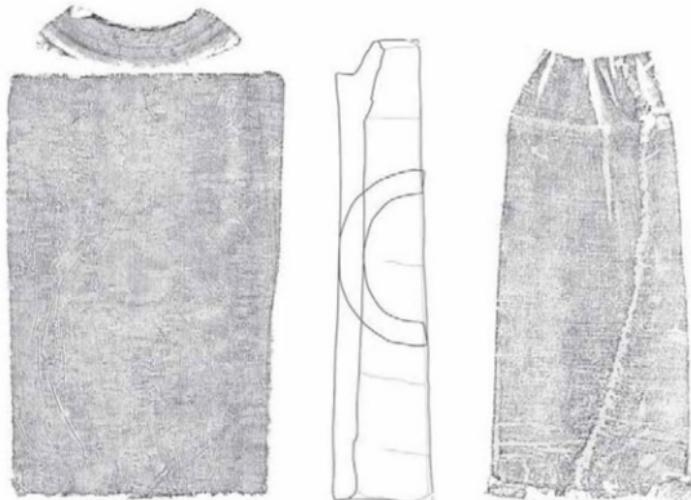
2



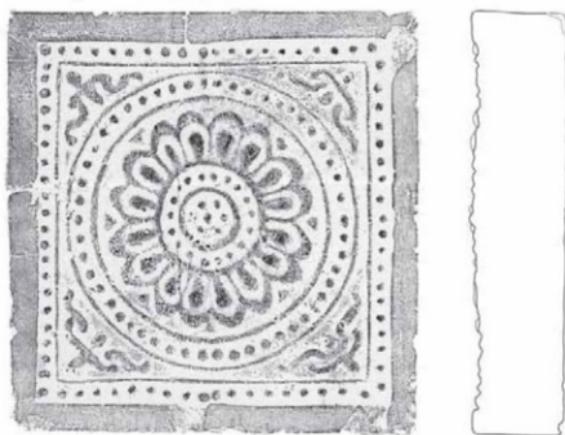
3

1. 96CTDHTY ① 9-1 2. 96CTDHTY ① 3. 96CTDHY ①

附圖 3 唐大明宮含元殿 窯1出土瓦 (1:4)



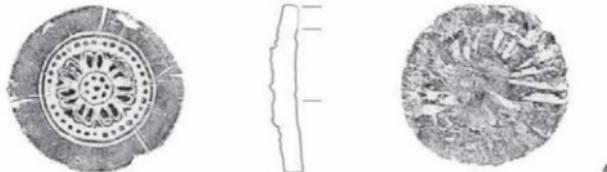
1



2

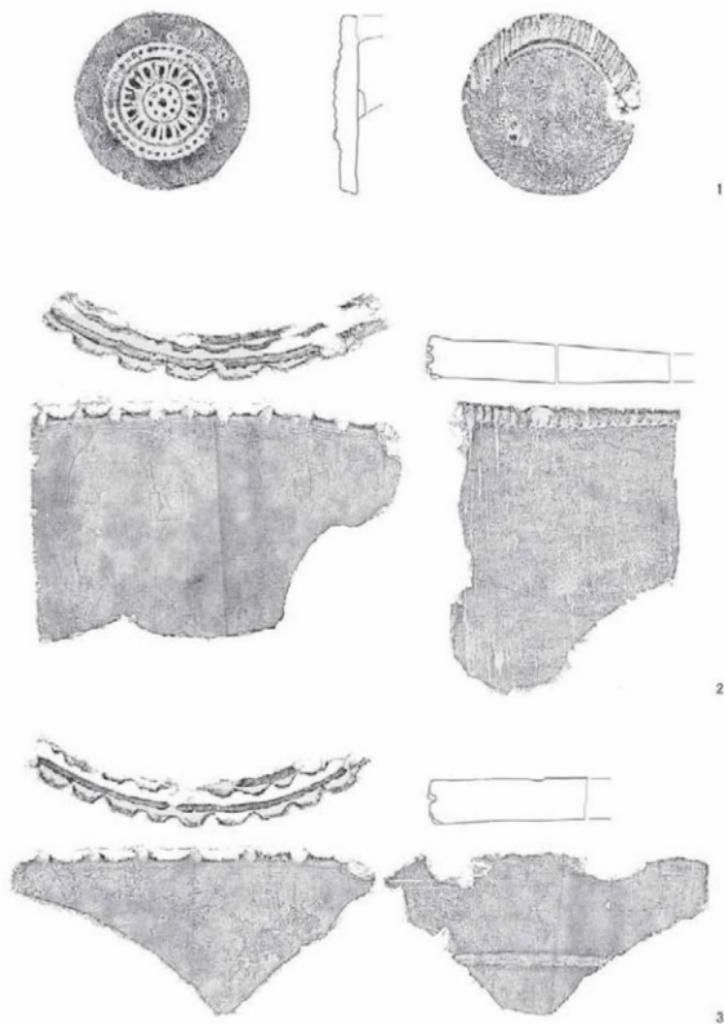
1. 96CTDHT4 区 Y① 2. 96CTDHTY4(276)

附圖 4 唐大明宮含元殿 窯1、窯4出土瓦 (1:4)



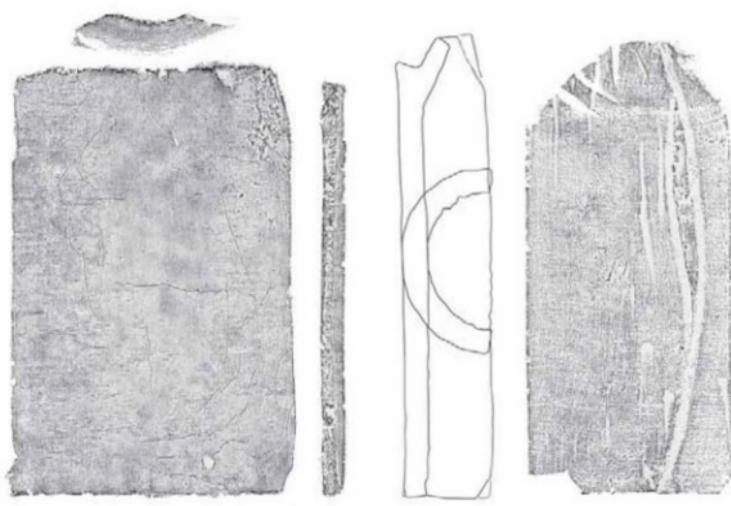
1. 92CTXT ③ :6 2. 85CTCT:W101 B2 3. 92CTXT ③ :17 4. 85CTC:31

附圖 5 唐長安城 西明寺出土瓦 (1:4)

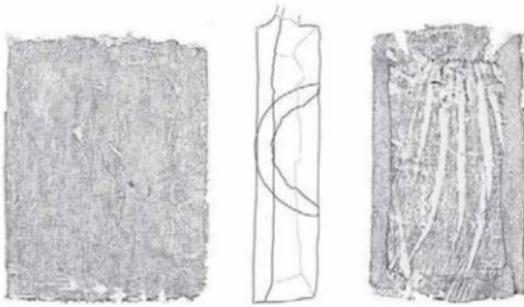


1. 85CTCTA?T32 2. 85CTCW:120 3. 85CTC:394

附圖 6 唐長安城 西明寺出土瓦 (1:4)



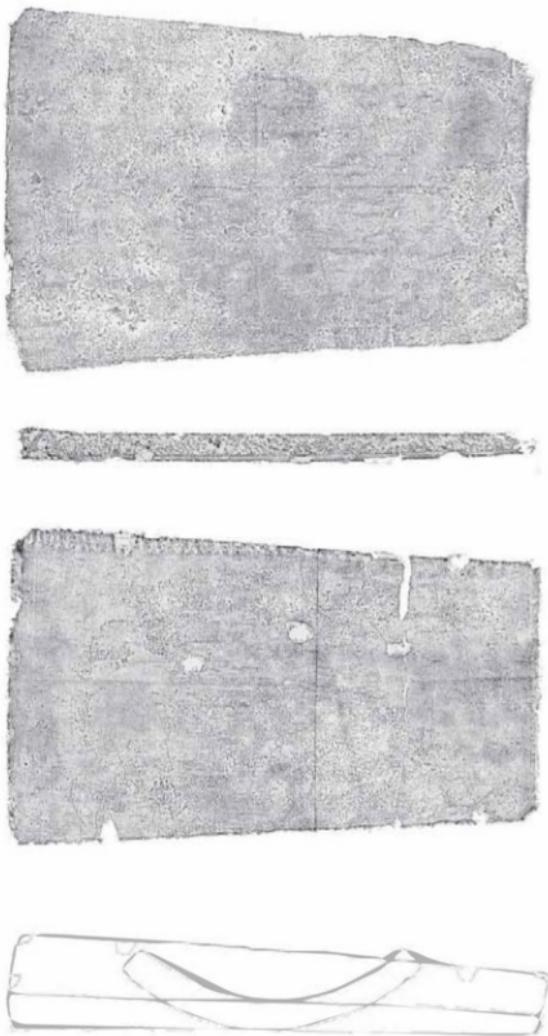
1



2

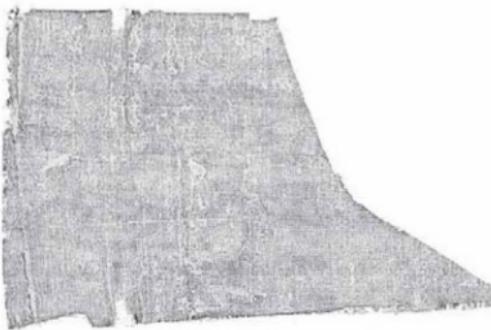
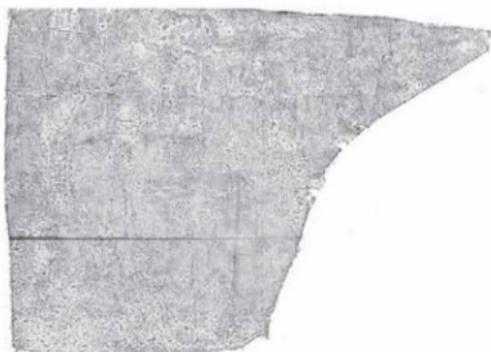
1. 92CTXT ③ :W159 2. 92CYXT ③ :?79

附圖 7 唐長安城 西明寺出土瓦 (1:4)



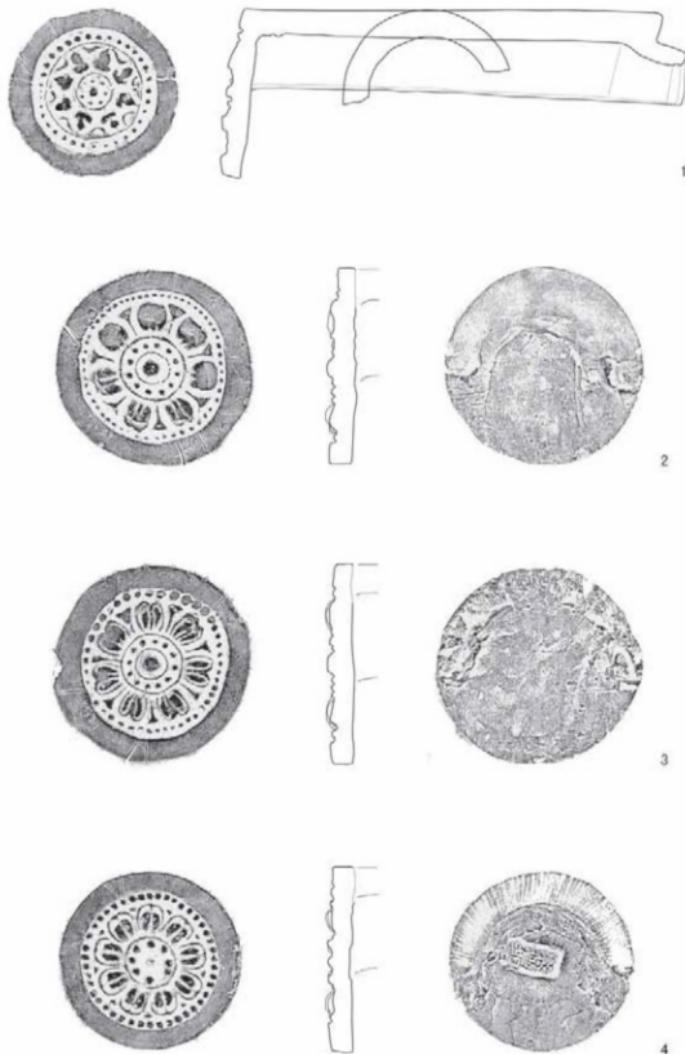
92CTXT ③ :84

附図 8 唐長安城 西明寺出土瓦 (1:4)



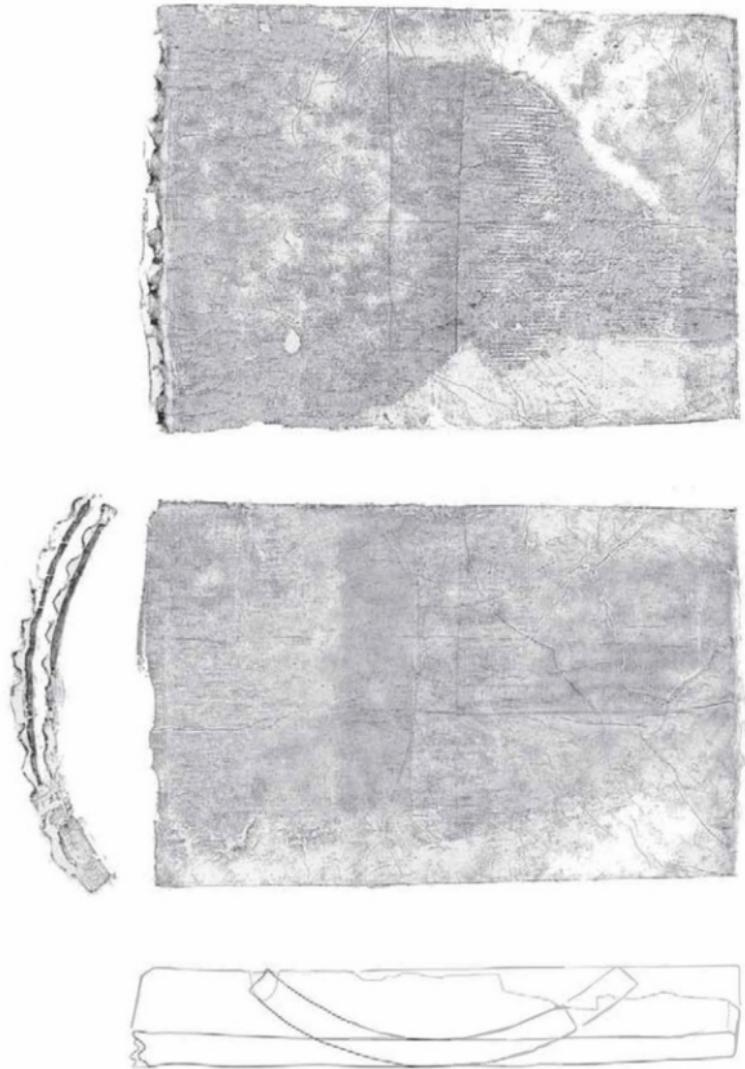
92CTXT ③ :82

附図9 唐長安城 西明寺出土瓦 (1:4)



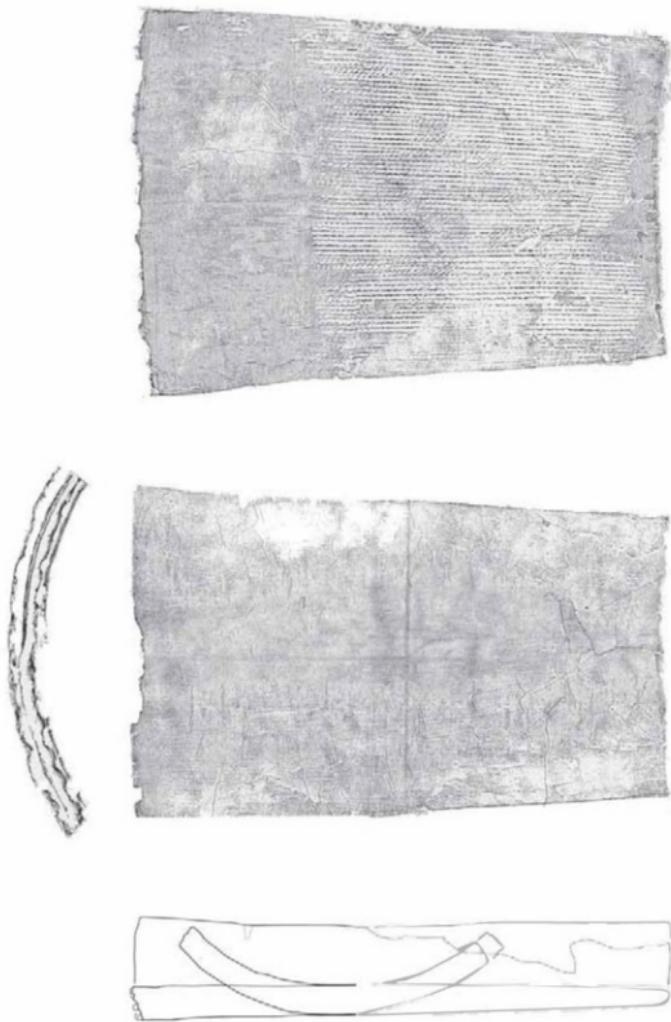
1. 94SLJ ④:72 2. 94SLJ:3 3. 94SLJ ④:1 4. 92SLJ:34

附圖 10 隋九成宮 37 号宫殿出土瓦 (1:4)



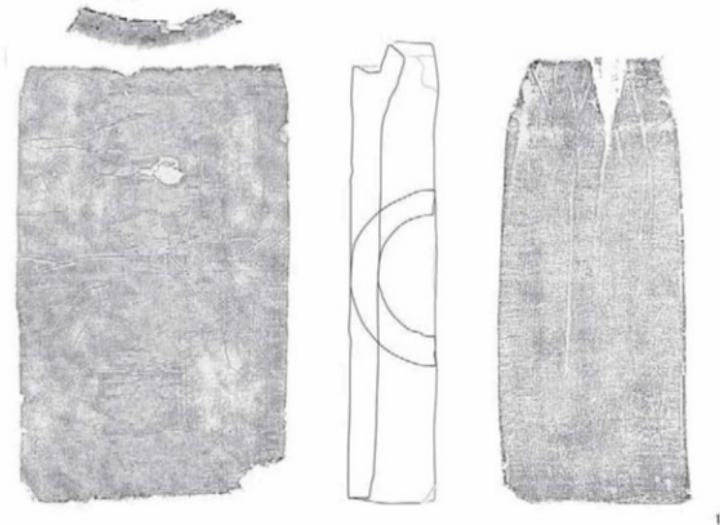
94SLJ84:89

附图 11 隋九成宫 37 号宫殿出土瓦 (1:4)

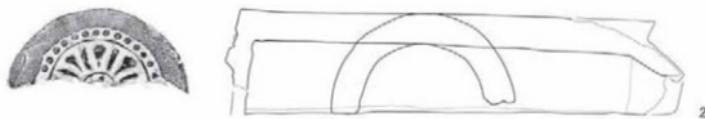


94SLJ ④ :88

附圖 12 隋九成宮 37 号宮殿出土瓦 (1:4)



1



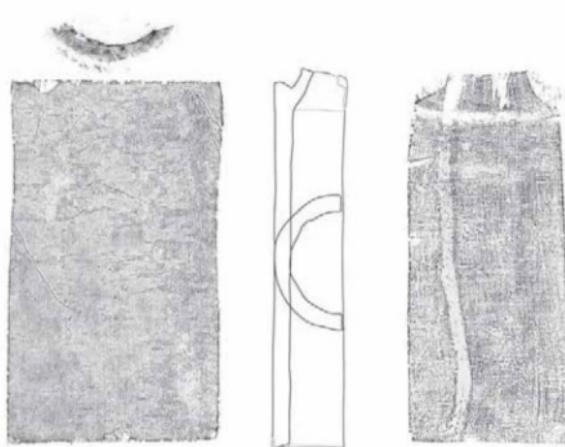
2



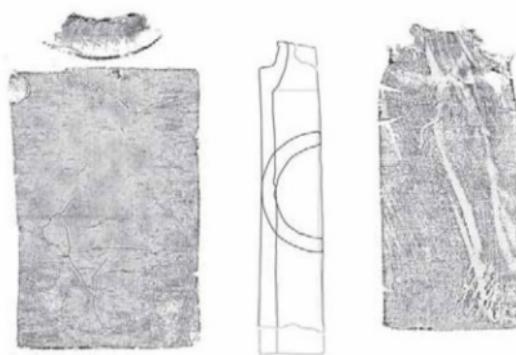
3

1. 94SLJ ④ :101(37号宫殿) 2. 80SLJT306:129 3. 78SLJ312:205

附图 13 隋九成宫 37号宫殿出土瓦 (1:4)



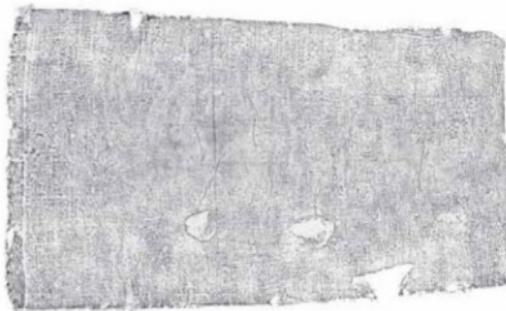
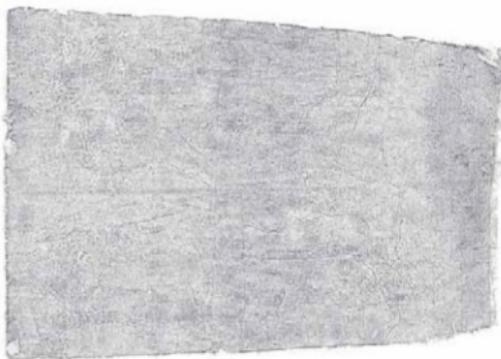
1



2

1. 78SLJT3 ② :14 号 2. 78SLJ3 ② :11 号

附図 14 隋九成宮出土瓦 (1:4)

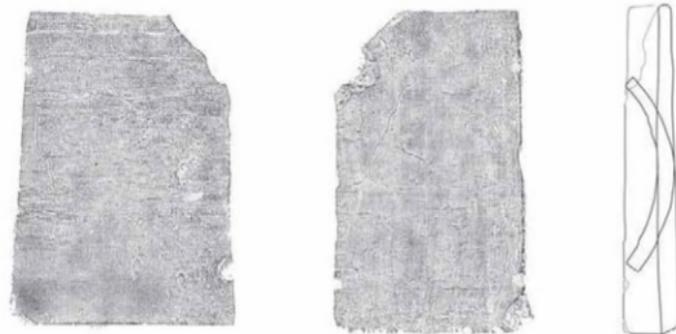


80SLJ:41

附図 15 隋九成宮出土瓦 (1:4)



1



2

1. 78SLJ?;3 号 2. 78SLJT3122;19 号

附図 16 隋九成宮出土瓦 (1:4)

6 隋唐洛陽城出土瓦の製作技法

石自社・韓建華

(中国社会科学院考古研究所)

A はじめに

隋唐洛陽城は中国古代史上重要な都城の1つで、洛陽盆地の西部に位置する。四周は山にかこまれた要害の地である。伊、洛、瀍、澗河などが流れる水陸の交通の要所にあり、中国の中央に位置し、四方を制御するのに優れている。この都市は「前直伊闢、背依邙山、左瀍右澗、洛水貫其中、有河漢之象」といわれた地形的な要因により、宮城皇城は外郭城の西北に偏った独自な配置で、全体を1里四方の里坊で区画しており、中国都城史上においても重要な歴史的地位にある。

隋唐洛陽城は、隋の大業元年に造営を開始し、隋、唐、五代から北宋にいたる間に大規模な修理や増改築をへており、宮殿や園庭は広大かつ壯觀であった。隋より北宋にいたるまで500年あまり使用された。この時期はまさに中国封建社会の隆盛期にあり、その文化内容も豊富で、時代的特徴も鮮明である。したがって、その中国都城史上においても重要な位置を占め、さらに後世の都城の造営と発展に多大な影響を与えた。

1954年以来、我々は隋唐洛陽城において事前調査や発掘をおこない、瓦磚なども大量に出土した。これらは建物遺構と関連があり、基壇の一部でもある。瓦や磚の分析は建物基壇の性格や時代的特徴、文化内容を認識する有効な手がかりとなる。

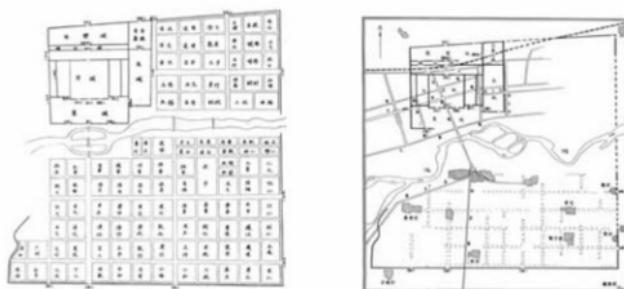


図1 隋唐洛陽城の里坊復原図と実測図

今回考察した隋唐洛陽城出土の瓦は、宮城正門である応天門遺跡、宮城九州池遺跡、宮城中部唐宋殿址、上陽宮遺跡と東城瓦窯址から出土したものである。

応天門遺跡は官城南城壁の正門であり、隋から唐まで使用されていた。この遺跡は城門楼を主体とし、両側に柵樓を従え、正面に向かって闕樓を出す。その間は廊下で結ぶ巨大な建物群である。この門址の建物配置は、後世の都城の建物に多大な影響を与えた。この遺跡からは大量の平瓦、丸瓦、瓦当が出土している。

宮城中部の唐宋殿址は発掘面積に限りがあり、その建物配置は明らかではない。この遺跡は文化層が厚く、唐から宋まで計6度の大規模な改修や補修があった。出土した遺物も豊富で、瓦磚などがある。

上陽宮遺跡は高宗武則天時代の皇家園林で、上元元年に造営が開始され、高宗と武則天が政務を執り、群臣を宴した重要な場所である。発掘で検出した池、釣殿、廊、石敷の道路などの庭園にかかる遺構からは各種の瓦磚が出土した。そのうち、綠釉をかけた胎土の赤い瓦や三彩瓦などが多く出土している。この遺跡から出土した瓦の多くは比較的小ぶりである。

九州池遺跡は宮城内の皇家園林遺跡で、宮城西の外郭城内に位置し、文献の記載によれば皇太子や公主が居住する場所であった。この遺跡では九州池の岸、池中の島亭や岸辺の建物などを検出した。遺物も大量に出土しており、三彩瓦などがある。

東城内瓦窯遺跡は東城中部に位置し、都城建設時の官営の窯場であろう。文献によれば、開元19年以後、城内で瓦磚を焼成することを禁じているので、これ以前に造営された窯であろう。この窯の焼成室の頂部で、還元状態を作り出すための窯水口をはじめて発見した。大量の瓦は建物の時期決定のための重要な根拠となる。

B 出土瓦の分類と製作技法

これまでに、明堂、応天門、九州池、上陽宮など重要な遺跡における発掘調査で、大量の瓦磚類が出土している。これらの瓦は、その形や文様および製作技法の点で同様な時代的特徴を有している。しかし、個々の建物の性格や規模、規格の違いによって、出土した瓦にも一定程度の差異がみとめられる。

隋唐洛陽城から出土した瓦は丸瓦と平瓦が多く、丸瓦は、普通の丸瓦と、瓦当を接合した軒丸瓦の2種に分けることができる。瓦当の文様は豊富な情報を含んでおり、時代的特徴と変遷の規律を示すと同時に、丸瓦から脱落して瓦当単独で出土することが多いため、瓦当そのものの分類を研究に加えることができる。平瓦も、普通の平瓦と、端部に文様を施す軒平瓦の2種に分類することができる。端部に文様を施す軒平瓦も時期的な特徴をもつ。

(i) 平瓦・軒平瓦

隋唐洛陽城からは大量的平瓦が出土している。凹面は布目があり、凸面は無文で、一部、凸面にミガキをかけたものや凹凸両面にミガキを施すものがある。隋から北宋にかけて、瓦

の形と文様には基本的に明確な変化はなく、平瓦の横断面は弓形を呈し、広端と狭端を有する。隋唐前期の平瓦は、一般に重厚で規格性があり、胎土も緻密で、凸面を磨く例が比較的多い。五代から北宋になると作りも粗雑になる。隋唐時期の平瓦端部にある文様は簡単で、多くは斜方格文、麦穗状文、重弧文、波状文などである。施した端面は厚みがある。

平 瓦 平瓦の出土量は非常に多いが、ほとんどが破片である。すべて広端、狭端がある。全体に厚みや重さも等しい。多くは濃い灰色を呈し、胎土は緻密で焼きも堅い。製作時に粘土の水築をおこない、十分にねかせている。宮城内およびその付近から出土した平瓦は、重厚でよく整っている。最も多いのは、凸面が無文で凹面に布目がある例である。この種の平瓦の凸面はナデ調整しているため、表面の曲率が均等で輪轤の回転痕跡が残る。凹面には、模骨と粘土の間に巻いた布袋の布目がのこっている。布目は細密で規則正しく、一部には布の皺の痕がみられる。また、一部の瓦の凹面には、粘土紐巻き上げの痕跡がみてとれる。このほか、両側面の凹面側に分割截面があり、凸面側には破面があることから、成形後、粘土円筒の内側から切り込みをいれる分割技術の痕跡に違いない（図2、3、附図5-1・3）。

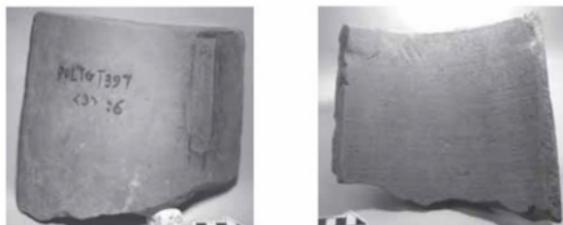


図2 宮城内出土の平瓦（90LTGT397③:6）



図3 宮城内出土の平瓦（99LTGT798、4M3 上部地層）



図4 宮城内出土の平瓦（96LTGTW 下北探洞④:4）

もう1つは凹凸両面にミガキをかける平瓦で、両面ともミガキが緻密である。この種の平瓦は全体に黒色を呈し、かなりの光沢がある。表面には成形時の痕跡が残っていないが、両側面には分割痕跡があり、凹面寄りに截面、凸面寄りに破面がある。この種の瓦は、重厚で全体に整っており、多くは大型の宮殿に使用される（図4）。

軒平瓦 軒平瓦の出土量は多いが、ほとんどが破片である。すべて施文は広端で、後方が狭端である。施文する広端は厚みがある。胎土は緻密で焼きも堅く、作りも精緻で整っている。色調は灰色か濃い灰色を呈し、黒色磨研の平瓦は黒く光沢もある。

軒平瓦の文様でもっとも簡素なのは、広端面を凹凸両面からつまむようにして波状文を施した例である。よくみられるのは三重弧になっており、上下2条の弧線に波状文を施して中央の弧線を挟み、凸面側の弧線にも文様をひねり出している。出土量が最も多いのは四重弧文で、凸面側に波状文をかぎり、中央の2条の弧線には波状文、縄状文、麦穗状文や斜方格文のいずれかを施文する。

隋唐洛陽城から出土した軒平瓦は、凹凸両面の状態から2つに大別できる。ひとつは凸面が無文で凹面は布目。凸面はなんの文様もなく滑らかで、成形時のロクロの回転痕跡が残る。凹面には、成形時に模骨にかぶせた布袋の痕跡があり、その布目は細かく、整っている。ときに布の合わせ目の痕などがみられる。また、凹面に粘土紐の痕跡がみられることがある。両側面は凹面側に截面があり、その截面の痕跡は明瞭で、粘土円筒の内側から切り込んだ工具痕である。側面の凸面側には、分割した際の破面が残る（図5・6、附図6-3・4）。

このほか、凹凸両面に緻密なミガキをかけた例がある。全体が滑らかで灰黒色を呈し、油をぬったような光沢がある。凹凸両面には成形時の痕跡は残っておらず、わずかに両側面の凹面側に切り込みの工具痕があり、凸面側には分割した際の破面がある。この類の瓦は大きく重い。形も整っており、大型宮殿で使用したものである（図7）。



図5 東城内瓦窯出土の軒平瓦（91LTDT41④Y:33）



図6 東城内瓦窯出土の軒平瓦（91LTDT41④Y:32）



図7 宮城出土の軒平瓦（84LTGT131②:40）

(ii) 丸 瓦

丸瓦の出土量も多く、ほとんどが破片である。瓦当をつけた軒丸瓦もある。丸瓦の横断面は半円形で、両端部に瓦当と玉縁がつく。平瓦と同様、隋唐前期の丸瓦は、全体に重厚で整っている。凸面はほとんど無文で、凹面はすべて布目がある。ミガキをかけた丸瓦も比較的多い。凸面に緻密なミガキをかけ、全体に油を塗ったような光沢がある。形も整っている。

出土量が最も多い丸瓦は、凸面が無文で凹面には布目が残り、灰褐色を呈し、形は比較的整っている。泥質灰陶で胎土は緻密であり、焼きも堅い。凸面には成形時のロクロの回転痕が残ることがある。凹面は布目で目は細かい。成形時に模骨にかぶせた布袋の圧痕で、一部に布とのじ合わせ目の痕が残る。粘土紐の痕跡が残る丸瓦もある。玉縁の内側は筒部にくらべて径が小さく、凹面には布袋の皺などが残る。丸瓦側面の凹面側を削って調整した例もある（図8・9、附図7-2）。

ついで出土量の多いものに、凸面ミガキ、凹面布目の丸瓦がある。これらは、製作が精緻

で整っており、全体に重厚で、大型宮殿に多用された。丸瓦の凸面は黒色を呈し、潤いのある光沢をもつが、これは緻密なミガキ調整の結果である。凹面の布目の上に粘土紐の痕跡をみるとことはむずかしい。丸瓦両側の凹面側には内切りの工具痕があり、凸面側には破面が残る（図 10・11、附図 3-2）。

このほか、瓦当を有する軒丸瓦もあり、それらは上述の 2 つの丸瓦と同様に、あらかじめ作成していた丸瓦と瓦当を接合している。凸面の調整は比較的こまかく、接合痕跡はほとんどわからない。凹面側の接合部には粘土をナデつけた痕跡がある（図 12）。

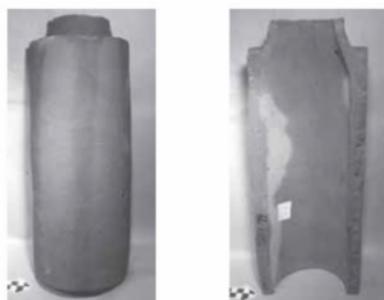


図 8 東城内瓦窯出土の丸瓦 (LTDT41 煙出の中:79)



図 9 宮城内出土の丸瓦 (LTGT627④:3)



図 10 宮城出土の丸瓦 (99LTGT798③:2)

(iii) 軒丸瓦

瓦当の出土量もたいへん多く、明確な変化がみてとれる。瓦当は范型で成形し、文様をつける。仏教の影響をうけて北魏時代に出現した蓮華文瓦当は、隋唐時代にも瓦当文様の圧倒的主流を占めていた。瓦当面の蓮華の図案は、南北朝時代の写実的な蓮華から次第に簡略化し、発展して形式的な蓮華に変化した。この時期の蓮華図案も次第に簡略化する。隋唐前期の蓮華文の蓮弁はかなり肥厚し、その他の装飾的要素も比較的豊富である。また複弁蓮華文もある。唐代中後期になると蓮弁は次第に細くなり、装飾性も簡略化していく。このほか、隋唐前期の瓦当外縁は比較的高く、瓦当面の文様よりも突出している例もある。しかし、外縁は次第に低くなり、北宋時期には瓦当面とほとんど同じか、それより低くなっていく。

獣面文瓦当は南北朝時期には流行し、隋唐時期には出土量が減少していくが、北宋時代になると獣面文瓦当の数量も増加する。唐代の獣面文瓦当とくらべると、宋代の獣面文瓦当の外縁は低くなり、瓦当面と同じかやや低い。獣面文の線表現は比較的細いが、獣面自体の雰囲気は獰猛になる。このほか、北宋時代には菊花文や牡丹文瓦当が出現する。

隋唐洛陽城から出土した隋唐前期の瓦当は、形が整い、重厚で勢いがある。もっとも普遍的なのは蓮華文瓦当で、この時期の蓮弁は肥厚し、外縁も高い。瓦当裏面と丸瓦の接合部には非常に規則的な刻みをつけて接合している。接合部に指頭压痕や指でナデつけた痕跡がある。また、この時期の瓦には裏面に刻印したものもある（図13・14、附図2-4）。

唐代中～後期の瓦当の形も比較的整っており、出土量も最大だが、もっとも代表的な蓮華文瓦当を例にすると、この時期の蓮華文瓦当の蓮弁は以前にくらべ細長くなり、外縁も低く、つくりも雑になってくる。ほとんどの瓦当裏面と丸瓦の接合部の刻みは不規則で、接合の強度も弱まっている（図15・16、附図9-3）。

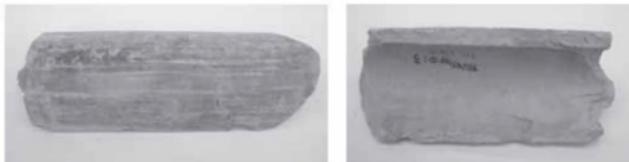


図11 宮城出土の丸瓦（99LTGT798③:3）



図12 宮城出土の軒丸瓦（82LTGT68②:18）



図 13 宮城出土の瓦当 (90LTGT402③:4)



図 14 宮城出土の瓦当 (2001LTGT837②:68)



図 15 宮城出土の瓦当 (LTGT837②:37)



図 16 宮城内出土の瓦当 (2001LTGT854A③水渠出土)

北宋時代における瓦当の出土量は比較的多く、作りはよいが、大型の瓦当は少ない。この時期のもっとも特徴的な瓦当は牡丹文と獸面文で、唐代とくらべるとそれほど精細ではない。外縁は突出せず、瓦当面と同じかやや低い。製作方法はやはり型作りである。接合部の加工は任意で、おもに2種類ある。1つはヘラ状工具でかきやぶりを施すが、その範囲は往々にして大きい。もう1つは尖頭の工具で刺突して凹凸をつくるが、一部の瓦当裏面は全体にこの加工がみられる（図17・18）。



図17 東城内出土瓦当（91LTDT46④:37）



図18 宮城内出土瓦当（82LTGT28②:1）

C 施釉瓦とその特徴

隋唐洛陽城からは施釉瓦も出土しているが、数量は少なく、宮城の九州池遺跡、上陽宮遺跡などの皇帝の庭園区域からの出土に限られる。したがって、隋唐時期の都城のなかで、一般的な大型宮殿建物の多くは灰色あるいは黒色の瓦を使用し、莊厳な雰囲気だが、庭園中の亭台楼閣などの小型建物は施釉瓦を使用し、華麗で精緻な雰囲気であったことがわかる。

出土した施釉瓦は、綠釉で褐色の胎土の瓦と、綠釉三彩瓦の2種がある。その釉彩は唐三彩と同様だが、すべて高温の鉛釉である。施釉瓦には平瓦、丸瓦、瓦当などがあり、作りが精緻で形も整い、少量だが大型の瓦もある。おそらく用途と関連があるのだろう。製作痕跡をみると、型作りで、普通の瓦の製作方法とほぼ同様である（図19～22）。褐色の胎土をもつ綠釉瓦には白色の化粧土があり、表面の色を三彩瓦と同じようにしている（図23）。



図 19 宮城九州池遺跡出土の三彩瓦当 (LTGT802③:14)



図 20 宮城九州池遺跡出土の三彩軒平瓦 (82LTGT30③:5)

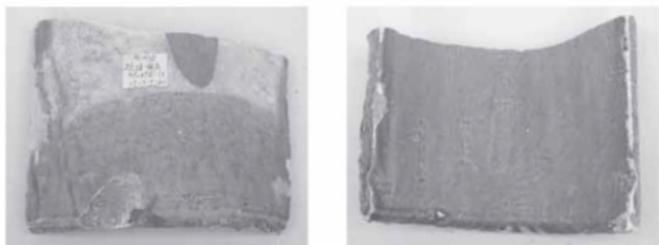


図 21 宮城九州池遺跡出土の三彩平瓦 (LTGT289②:76)

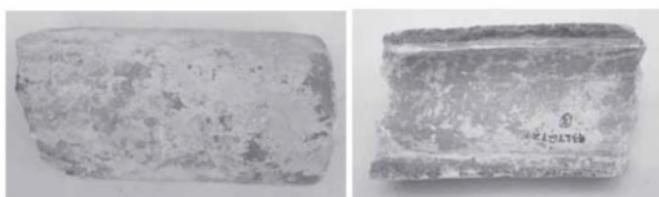


図 22 上陽宮遺跡出土の三彩丸瓦 (93LTGT31③層出土)

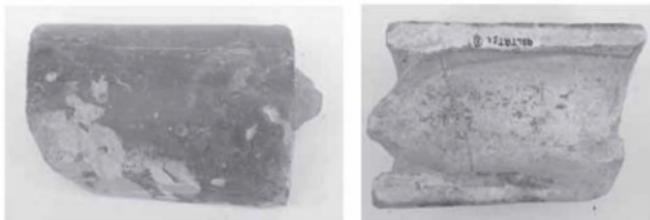


図23 上陽宮遺跡出土の褐色が胎土の綠釉丸瓦（93LTGT31③層出土）

D 瓦の製作技法

隋唐洛陽城から出土した大量の瓦は、当時の瓦磚の製作技法を研究し、考察するうえで貴重な資料である。こうした瓦の分析は、瓦の分類と編年的特徴を整理して、瓦の焼成や製作技法を明らかにし、また、その瓦を多く建物の性質や歴史的沿革などの文化的な面を認識するためにも重要な根拠となる。さらに、都城全体の構造や歴史的変遷などの問題の総合研究を推し進めることも可能になる。

大量的出土瓦のうち、出土量がもっとも多い平瓦、丸瓦と瓦当について考察し、胎土の色調や組成、成形の痕跡、焼成後の色調などを観察して、粘土作成、成形、分割、調整から焼成にいたる工程を検討していきたい。

(i) 粘土の作成

瓦の破片の断面をみると、隋唐洛陽城の瓦の多くは泥質灰陶で、胎土は緻密で堅く、焼成後の色調は青灰色か濃い灰色を呈し、胎土中には少量の夾雑物が含まれる。胎土は何度か水簸し、ねかせてある。隋唐洛陽城の発掘では、瓦窯の遺跡を発見した。とくに宮城内で発見した数ヶ所の瓦窯群は、宮殿建設のために瓦磚を専門に焼成した窯である。洛北里坊区の瀍河両岸の南北綿延2kmの区域内は、隋唐時期の大型の瓦窯区であり、これらは宮殿建設専用の瓦を焼成する官営工房であった。ここでは、窯の近隣から粘土を採取し、瓦を焼成している。これは当時、瓦は城内でさかんに焼成していたことを示している⁽¹⁾。

隋唐洛陽城は、まさに洛河と邙山の第2河岸段丘上に位置し、土壤は単純な紅褐色で粘性があり、瓦を作るのには非常に適している。したがって、出土する瓦の質も緻密で堅く、色調も最上である（図24）。



図24 東城内出土の瓦（凹面）

(ii) 粘土紐巻き上げと轆轤による調整

丸瓦、平瓦をとわず、光沢のある瓦をのぞいては、凹面に布目圧痕がある。これは、模骨と粘土の間にあらる布袋の痕である。また、一部の瓦の凹面には、粘土紐巻き上げの痕跡を明確に観察することができる。これは、成形時にこの方法を採用していたことを物語る。粘土紐の幅は約5cmである（図25）。



図25 瓦の凹面の粘土紐巻き上げ痕跡（東城内出土の瓦）

隋唐時期の成形法は、粘土紐巻き上げだけでなく、桶の模骨による方法を採用していたことも排除できない。それは北宋時代にこの方法が流行しているからである。『營造法式』卷15に「瓦を製作するには、細かくて粘りのある土で、夾雜物のない粘土を使用する。前日に粘土塊をつくり、まず轆轤上に桶を設置し、つぎに桶に布袋をかぶせ、水をつかって粘土紐をつくり、叩いたりなでたりして調整し、桶と布袋を取り、乾燥させる」⁽²⁾。この種の桶型の模骨から作り出される円筒は、均整がとれているだけでなく、成形の速度も速い。いずれの方法で成形しても、瓦の凹面には布目圧痕が残る（図26）。ミガキをかけていない瓦の凸面には、成形時の轆轤の回転痕跡がみられるので、成形時には模骨を轆轤上において成形し、調整していたことがわかる（図27）。



図 26 瓦凹面の布目压痕（東城内出土）



図 27 軸轆の回転痕跡（宮城出土瓦）

（iii）分 割

出土瓦の形と両側面をみると、平瓦、丸瓦はすべて「円筒法」を採用している。まず桶状に成形したのちに分割する。平瓦は4分割、円筒は2分割である。『天工開物』によると「一般の瓦の形は四枚づくりである。桶で円筒をつくり、少し乾くのを待って模骨をはずすと、自然にわれて四片になる。」⁽³⁾。隋唐洛陽城の瓦はすべて内側から切り込む方法で、工具で円筒の凹面側から切り込むが、切り通さずに、少し乾燥させてから割る。側面を調整した瓦以外では、はっきりと内側から切り込んだ痕跡が残る。一部の丸瓦の玉縁の内側には、二度の切り込み痕跡がある。工具については将来検討が必要である（図 28～30）。

（iv）調 整

出土した瓦には、調整の痕跡が観察できる。ミガキをしていない瓦の凸面には、軸轆の回転痕跡が残存している（図 27）。磨いた瓦の表面は非常に光沢があり、それは緻密なミガキによって得られた効果である（図 4・10）。ミガキの痕跡をとどめている例もある（図 11）。瓦の狭端面も滑らかであることが多く、これも調整した結果である。また、両側面を削ったため、截面や破面の痕跡を観察できないものもある。

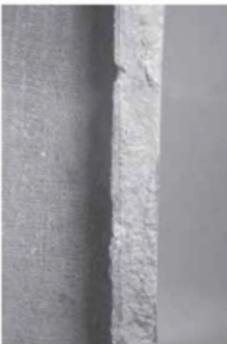


図 28 内切り法の分割痕跡（宮城出土瓦）



図 29 内切り分割痕跡（東城瓦窯出土）



図 30 三彩瓦の内切り痕跡（上陽宮出土）

(v) 瓦当製作および丸瓦との接合

隋唐時代の瓦当はすべて円形で、精美な文様をもつ。瓦当はすべて型づくりで、調整し、大多数は精緻で整っている。瓦当と丸瓦は別につくり、接合して焼成する。この時代は瓦当裏面と丸瓦が接する部分に、刻みやかきやぶりなどをして凹凸をつくり、乾燥前に接合しないでつけるか、粘土を足して接合を強固にする。隋唐から宋にかけて、接合部は規則的な刻みから任意のかきやぶりへと変化し、そのつくりも次第に粗雑になっていく（図 31・32）。

(vi) 青棍瓦の製作

隋唐洛陽城出土の大量のミガキをかけた瓦は、ミガキが緻密で非常に光沢があるだけでなく、表面にしっとりとした漆黒の光沢がある。この重厚で堅緻な瓦は、黒釉を施したようである。この製作方法は南北朝時期にすでに存在していた。北齊鄆城の銅雀台付近にはかつて大量の黒色瓦の破片があった⁽⁴⁾。北魏洛陽城 1 号房址にも、隋唐洛陽城と似たこの種の黒色瓦片が



図31 瓦当と丸瓦の接合痕跡（宮城出土）



図32 瓦当と丸瓦の接合痕跡（東城内瓦窯出土）

あり⁽⁵⁾、唐長安城内でもこの種の瓦が大量に出土している。『河朔訪古記』が引く『鄭中記』によると、「北斉が鄭南城を造営し、其の瓦は胡桃油をぬっている」とある⁽⁶⁾。この胡桃油をぬった瓦は、あるいは磨いた黒色瓦の前身かもしれない。『營造法式』によれば、宋代に青棍瓦を焼成するときには、還元状態にして炭素を吸着させる焼成方法を採用していた。すなわち、焼成の終わりの段階で燃して炭素を吸着させ、瓦の表面に炭素をしみ込ませて、黒色に仕上げるのである。この方法で焼成した瓦は、緻密で孔隙が小さく、瓦の表面は磨いて滑石粉「棍牙」を加え、漆黒の光沢を出している。隋唐洛陽城のこの種の瓦は、『營造法式』に見える青棍瓦であろう（図4・10・11）。

（vii）軒平瓦の製作法

隋唐洛陽城の軒平瓦の文様は簡単で、広端面の上下縁に波状文を指でひねり出している。一般に、この種の瓦の広端面は厚みがあり、工具で3層ないし4層にわけ、その後に指や工具で簡単な文様をつける（図33・34）。

（viii）刻印の銘文

隋唐洛陽城内の多くの遺跡から、大量の銘文をもつ瓦磚が出土している。銘文には、省、児、玄、沮、官、新、官瓦、官匠、防匠、将作、内作、供内などがある。これらの銘文は、瓦磚を製作しているときに刻印したもので、銘文はさまざまな情報を提供する。これらは瓦自体の研究において貴重な資料となるだけでなく、同時に当時の社会制度、都城造営などの



図 33 宮城と東城出土の軒平瓦



図 34 宮城出土の軒平瓦

諸問題についても重要な資料となる。

(ix) 瓦の焼成

隋唐洛陽城内で発見された多くの瓦窯群のなかで、一部の窯区の規模は非常に大きく、都城造営の際の官営工房に違いない。窯址から出土した瓦磚の規格は非常に高く、宮城の宮殿基壇から出土した瓦磚と類似し、とくにある窯址の瓦と宮殿から出土した瓦には同一の工人の刻印があつて、宮城の瓦の生産地を確認することができる。瓦窯の形態は多様で、対になるもの、一列にならぶもの、円形に配置されるものなどがある。また、数ヶ所の窯が1つの作業坑を共用するか、多くの窯の作業坑が連結するかしており、こうした配置は作業効率を非常に高めた。これは、当時の焼成技術が相当発達していたことを物語る（図35）。

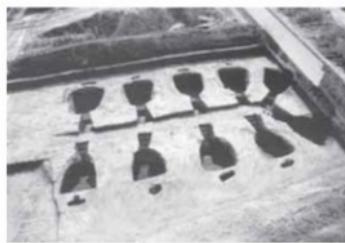


図 35 隋唐城の瓦窯址

E 瓦の製作技法

この50年の発掘調査によって大量の瓦磚が出土し、豊富な文化内容を理解するとともに、

瓦の製作痕跡の観察をとおして、隋唐時代の造瓦技術の流れを把握することができた。この時期の造瓦技術は、おおよそ以下のとおりである。

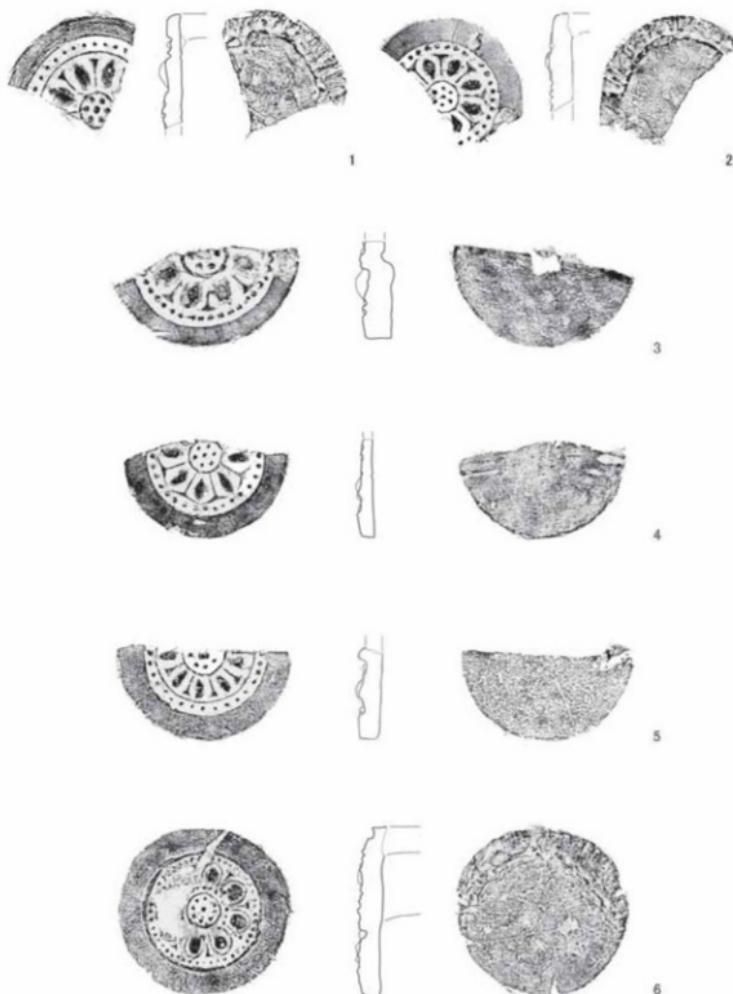
まず、粘土を水簸して精良な粘土をつくる。成形はおもに粘土紐巻き上げと輶轡の技法で、おそらく桶状の模骨も使用している。つづいて円筒の粘土を分割し、平瓦あるいは丸瓦をつくる。分割した瓦を調整するが、そのもっとも顕著なものは、光沢のある瓦のミガキの技術である。最後に陰干しして焼成する。

以上、隋唐洛陽城の瓦の製作技法を観察してきた。この時期の造瓦技術は比較的単純で、成形、分割、接合、調整などの工程は、基本的には同一の方法をもちいている。これは、造瓦技術が相当成熟していたことを表している。造瓦の過程で同様の方法を採用すれば、作業効率が高まって生産量も向上し、この時期の経済発展にともなう瓦磚の需要にも適応することができたであろう。

また、製作技法の観察をとおして、瓦の焼成についても理解を深めることができ、瓦の生産と流通の研究の手がかりを得た。さらに瓦の理解を深めることで、製作技法や文化的特徴の発展や変化を検討するための良好な基礎となろう。そして、瓦に対する徹底した認識は、それを葺いた建物の性質や機能、歴史的沿革などについても根拠を提供し、都城の構造や歴史などの総合的な研究をおしすすめることとなろう。

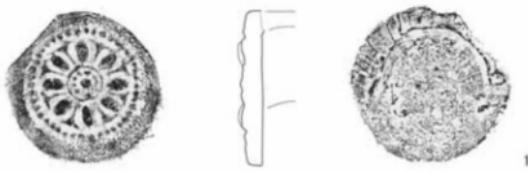
註

- (1)『唐会要』卷 86 街巷条に「開元十九年六月勅、京洛両都、是惟帝宅。街衢坊市、固須修築、城内不得穿掘為窟、燒造磚瓦。其有公私修造、不得于街巷穿坑取土。」中華書局出版、1955 年 6 月第 1 版、p.1575。
- (2)『梁思成全集』第 7 卷、中国建築工業出版社、2004 年 4 月第 1 版。
- (3) 明 宋応星『天工開物』中国社会出版社、2004 年 10 月第 1 版。
- (4) 俞偉超『鄆城調査記』『考古』1963 年第 1 期。
- (5) 中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城一号房址和出土的瓦文」『考古』1973 年第 4 期。
- (6) 許作民 集校注『鄆都佚志集校注』中州古籍出版社、1996 年 1 月第 1 版。



1. 2001LTGT837(2):69 2. 2001LTGT837(2):22 3. 2000LTGT802 4. 2001LTGT837(2):19
5. 2001LTGT837(3):17 早期水道専 6. 2001LTGT837:71

附圖1 隋唐洛陽城出土瓦 (1:4)



1

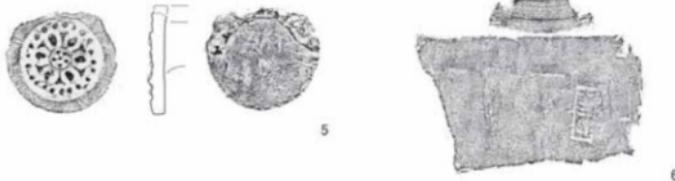


2



3

4

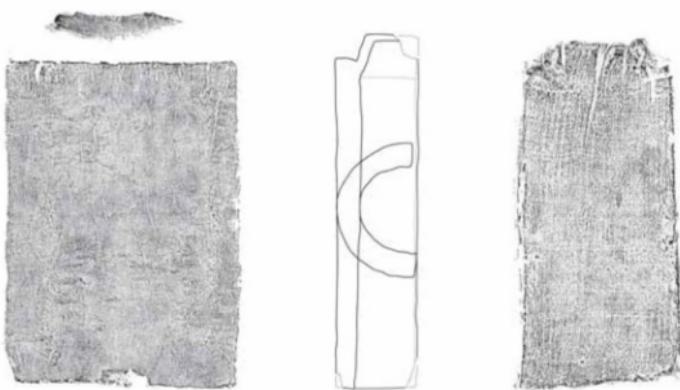


5

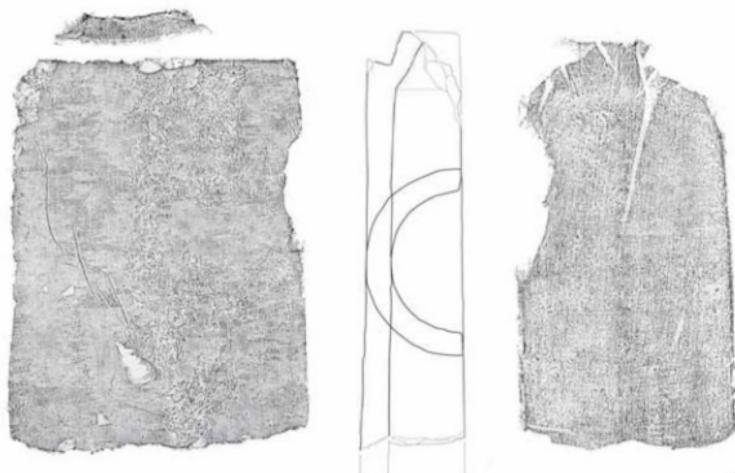
6

1. 2001LTGT837 建築散水下地層 2. 2001LTGT837(2):64 9. 2001LTGT837(3):19 早期水道處
4. 2001LTGT837(2):68 5. 2001LTGT839(2):63 6. 88LTGT330(3):14

附圖2 隋唐洛陽城出土瓦 (1:4)



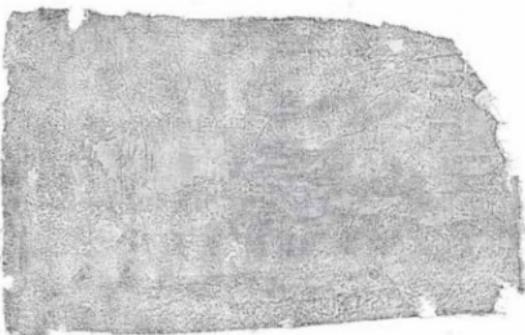
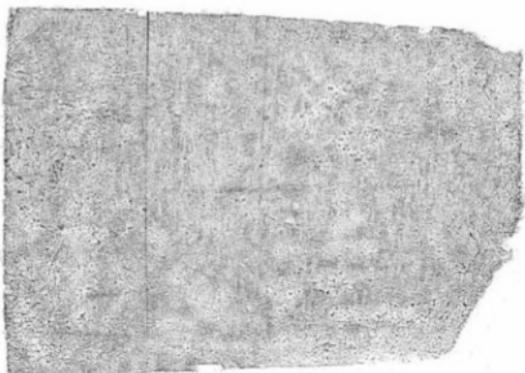
1



2

1. 2001LTGT837(4):20 2. 99LTGT798(3):2

附圖3 隋唐洛陽城出土瓦 (1:4)



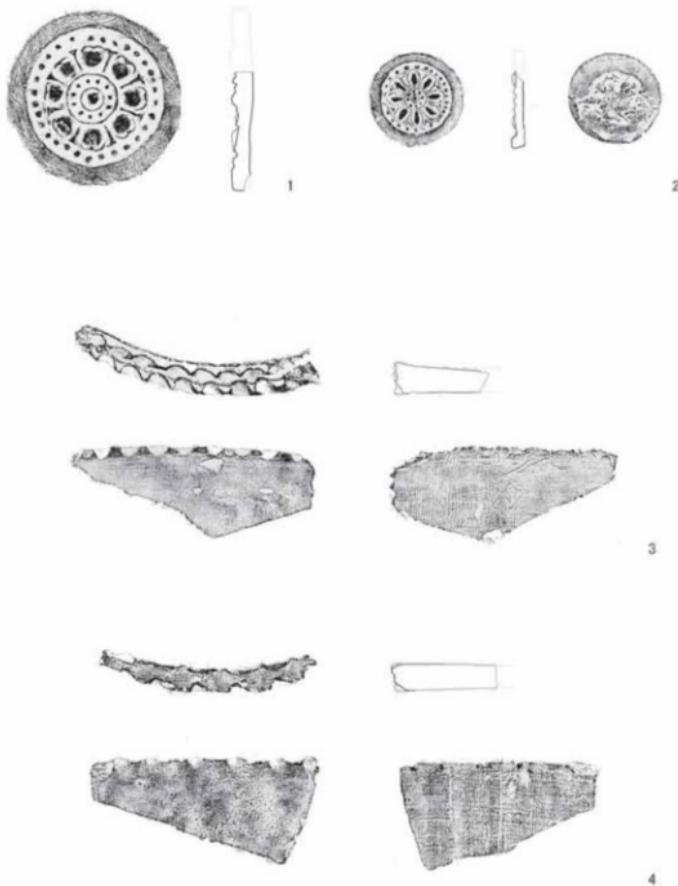
96LTGTW 下 北探洞③ :5

附圖4 隋唐洛陽城出土瓦 (1:4)



1. 99LTGT798 ③ : 4M3 上部地層 2. 64LTGT173 ② H3 3. 90LTGT397:6

附圖5 隋唐洛陽城出土瓦 (1:4)



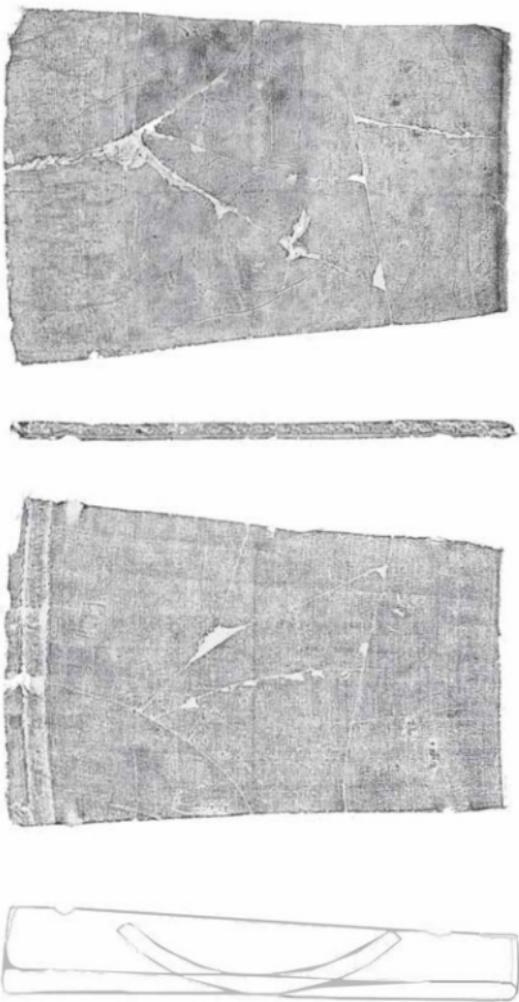
1. 9ILTGT41 ④ 1:2 2. 85LTGT11 ② :1 3. 9ILTGT41 ④ Y:32 4. 9ILTGT41 ④ Y:33

附圖6 隋唐洛陽城 東城內瓦窯出土瓦 (1:4)

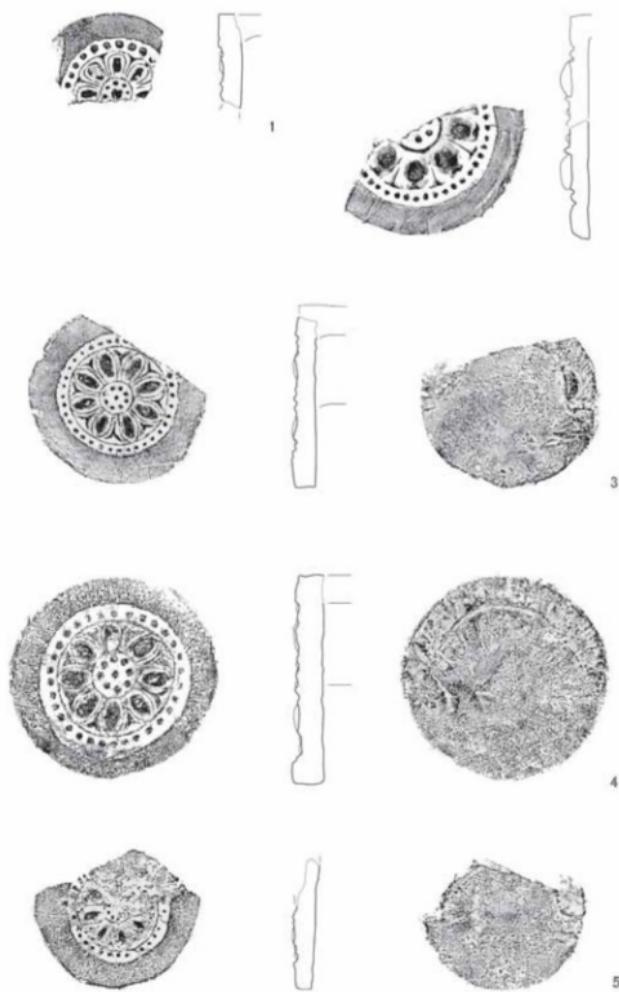


1. 85LTDT11 ③ Y:9 窯室② 2. 91LTDT41Y1 煙辺中 :79

附圖7 隋唐洛陽城 東城內瓦窯出土瓦 (1:4)

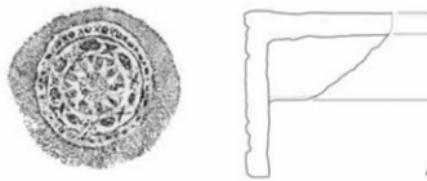


85LTDT Y1 ③ :13
附圖8 隋唐洛陽城 東城內瓦窯出土瓦 (1:4)



1. 2001LTGT854A ③坑:4 2. 2001LTGT854A ③水渠 3. 2001LTGT854A ③水渠
4. 2001LTGT854A ③坑 5. 2001LTGT854A ③坑

附図9 隋唐洛陽城 応天門3坑出土瓦 (1:4)



1. 2001LTGT854 ③坑 :2 2. 2001LTGT854A ③坑 :12 3. 2001LTGT854A ③坑
4. 2001LTGT854A ③坑 :10

附圖 10 隋唐洛陽城 忻天門3坑出土瓦 (1:4)

7 六朝建康城の主要発掘調査成果

王志高
(南京市博物館)

A はじめに

六朝建康城は、同時代の北魏洛陽城、東魏北齊鄆城、朝鮮半島、日本の都城および隋唐都城の設計と造営に多大な影響を与えており、わが国の古代都城の発展史においては後世の発展につながる重要な役割を果たしてきた。しかし、隋が陳を滅亡させたのち、建康城は削平と開墾によって城壁や壕、宮城の建物などが大きく破壊された。そのため、少なくとも明代以降、六朝の建康宮城（台城）の位置と都城の構造を含めた多くの問題は、すでに難解な謎となっていた。

南京は典型的な重層型の都城で、六朝以来の都市の中心区と空間配置は大きくは変化していない。新しい都市は旧都市の上に造営するため、古い遺跡を破壊せざるをえなくなる。一代の名城、六朝建康城は現在の市街地の下に深く埋没しており、大規模なボーリング調査や発掘を実施することは難しく、その研究の進展には制約がある。こうした状況から、漢唐長安城、漢魏洛陽城などの著名な古都にくらべると、六朝建康城遺跡の発掘調査と研究は手薄で、中国古代都城の研究においては大きな空白部分となっていた。

近年、都市化が急速に進展するとともに経済発展も加速し、南京の市街区における大規模な都市建設は、都市の景観を大幅に変えるだけでなく、大量の建設工事で地下を浸食するため、六朝建康城遺跡の探査と発掘調査にとっては大変な危機である。建康宮城の位置を究明し、都城の構造などを明らかにするために、2001年5月から南京市博物館考古部は、都市開発計画が六朝建康城の範囲に及ぶような成賢街、大行宮ほか30数ヶ所の工事現場において緊急の発掘調査を実施した。こうした調査によって多くの成果を獲得し、六朝都城を千数百年覆っていた神秘的な覆いをはぎ取ったのである。

B 六朝建康城の重要な発見

広義の六朝建康城とは、宮城、都城、外郭の三重の城壁と壕を含み、さらに周囲には石頭城、西州城、東府城、丹陽郡城、越城、白下城などを代表とする衛星都市群を含んでいる。さらに、その間に広く分布している礼制、宗教、官衙、市場、里坊、庭園などの各種の建物、および都市交通の命脈である道路や水路などがある。したがって、六朝建康城遺跡の考古学的な調査や発掘と研究は体系的な仕事であり、なかでも建康宮城（台城）はその核心である。

これは宮城に当時の建物や芸術の粹が集中しているだけでなく、宮城の位置の問題がいったん確定すると、その他も問題も解決していくからである。ゆえに、宮城は六朝建康城考古学の第一の課題であり、問題解決の突破口でもある。

六朝建康の宮城遺跡の探究と発掘調査は、前後 2 段階に分けられる。最初の段階は、おもに伝統的な見解にしたがって、台城の北は北京東路、南は珠江路、東は珍珠河、西は進香河にのぞむ今の東南大学と成賢街地区と理解していた。そして、この地区に位置する旧老虎橋監獄、成賢街西 43 号大院、北京東路南側、東南大学校地北部科技樓、成賢街東側星漢大厦、成賢街東側東南大学成園、成賢街東南浮橋、珍珠河東側、珠江路北側の華能都市花園など多くの地点で発掘調査を実施した。華能都市花園以外の場所で、珍珠河西側のいくつかの発掘地点では六朝文化層が比較的薄く、六朝建康宮城ないし都城と関連する遺構は発見されなかった。これは、台城がいまの東南大学と成賢街地区に位置するという伝統的見解を、考古学が否定したことになる。

次の段階では、調査の重点が今の大行宮とその周囲に移された。大行宮地区的考古学的調査と発掘は 2002 年 3 月から開始し、2007 年 12 月に終了するまで、この地区的近代史博物館、市民広場、日月大厦、華夏証券大厦、新世紀広場、南京図書館新館、市体育局、鄧府巷東西両側広厦公司、延齡巷、利濟巷西長發大厦、游府西街小学校、長江後街、省警察博物館、省美術館新館、南京テレビ大学、省タバコ公司などの建設工事にさきだつ調査地点 20 数カ所で、大規模な発掘調査をおこなった。大行宮路口東南、太平南路東側の新世紀広場の現場でめざましい成果をえて、その北側の南京図書館新館、利濟巷西長發大厦、鄧府巷東西両側広厦公司の現場でも六朝時代の重要な遺構を検出した。

それらの遺構には、道路、城壁、壕、木橋、大型版築基壇、磚積みの建物遺構、排水溝、磚組み井戸などがあり、遺物では各種の瓦当、釉下青磁などの精美な製品がある。これまでの六朝建康城の発掘では、もっとも重要な成果である。その規模や格などは尋常ではなく、出土した磚の銘も、これらの遺構が台城と関連があることを示している。以下、主要な成果を紹介していきたい。

(i) 城壁、壕

台城の東南隅の城壁と壕の遺構 長江路南側にある南京図書館新館予定地の北部に位置し、2002 年 8 月から 2003 年 5 月まで発掘調査した。そのうち、東西方向の城壁の使用期間は東晋から南朝まで 3 段階あり、各時期の城壁の外側には外装の磚積みが残存している。前期の城壁地業部分は幅 12.4m、深さ 1.4m。後期の版築城壁は 0.7m の高さで残っている。

版築層は、きれいな土で、厚さ 5~10 cm ほどある。掘込地業は、繰り返し木杭で版築し、城壁内側の裾部分には未加工の大きな石が 1 層埋め込まれていた。南北方向の版築城壁は、改修とともに次第に幅を増していく。後期段階の城壁は幅 13.15m、残存高 0.1~0.45m、城壁外側には長さ 11.5m の外装の磚積みが比較的よく残っている。磚の積み方は、2 つの磚を

縦に平置きし、1つの磚を立てて積む方法である。

後期の城壁東側の拡張部分は、東晉と呉の道路側溝の上に構築されている。ここは地盤が軟弱なので、拡張部分の掘込地業は2～3mおきに版築土台を築いている。検出した4基の版築土台は平面凸形を呈する。断ち割りしたところ、東側に長さ2.14m、幅1.5m、深さ1.7mの土坑を掘り、その底部に厚い木板を1枚敷く。そのうえに割れた磚をつかって長さ0.9m、幅0.68m、高さ0.7mの磚の台を築く。さらにそのうえに土を盛り、版築して土台をつくる。土坑の西側に連続するのは長方形の土坑で、長さ3.84m、幅0.88m、深さ約1m。土坑の西側に長さ1.15m、幅0.7mの木板を敷き、その上に版築して台をつくる。

東西方向の城壁の外側では、数時期にわたる壕が発見されている。南朝の壕は幅5.6m、深さ1.1m、護岸の磚積みを部分的に検出した。呉の時期の壕は幅9.75m、深さ約2m。両岸に護岸の木杭がある。上述の2ヵ所の城壁の規模、構造、周囲にある関連遺構の状況から判断すると、これらは台城内の2重目あるいは3重目の城壁の東南隅である可能性が高い。

台城の最外郭城壁の東壁と壕 利济巷西側の長發公司建設予定地の東部に位置し、2003年8月から11月まで発掘調査した。発見した南北方向の城壁の使用期間は、呉から南朝までの4段階にわけることができる。もっとも新しい段階の城壁は幅24.5mにも達し、残存高0.15m、掘込地業の深さは0.7m～1.4mある。城壁中部の土は比較的きれいな版築層で、ごく少量の瓦磚の破片を含む。城壁の両側には外装の磚積みが残る。内側の磚積みは残りが悪く、外側の磚積みには2種ある。下部の4層は磚が比較的小小さく、長さ33cm、幅17cm、厚さ5cmであるが、上層1層の磚は長さ49cm、幅24cm、厚さ7cmある。

各時期の城壁の外側には壕があり、もっとも古い時期の壕は幅17.25m、深さ2.5m。後期段階の壕は城壁から14mほど距離がある。しかし、壕の東岸は利濟巷東側の城南電局大行宮変電所大楼の地下にあるので、正確な幅はわからない。文献の記載と結びつけると、この城壁は、台城の最外郭城壁の東壁に違いない。

台城の最外郭城壁の西壁と壕 長江路以南、鄧府巷東側の現場に位置し、2007年10月、2008年1月に発掘調査した。壕は南北方向で、呉から南朝までの数時期に分けられる。もっとも古い壕の西側は鄧府巷道路の下に位置し、幅は不明である。新しい壕の西側は、細かく碎いた石を積み上げた護岸の痕跡が残存しており、幅約18.5mある。壕の東側には同時期の版築の城壁があり、その外側には外装の磚積みが残る。しかし、城壁の東側は調査区の外になるので、城壁の幅はわからない。

台城の最外郭城壁の南壁と北壁については未確認である。しかし、東西両壁の状況と文献記載を総合すると、比較的正確な推測が可能である。台城の北は、現在の如意里と長江後街を結ぶ線にあたり、南はだいたい游府西街、文昌巷北側の線であろう。これらをつなげた台城の範囲は南北がやや長く、東西が短い方形で、四面の城壁の長さを合計すると、文献に記載のある周八里（今の3499.2m）にほぼ一致する。

(ii) 道路、橋、水門

南北方向の道路 4本 もっとも重要なのは南北方向の道路で、新浦新世紀広場建設予定地の北部に位置し、方向は南で 25 度西に振っている。この道路の北は、現在の中山東路、長江路をこえて南京図書館新館予定地、省警察博物館予定地に至り、吳から南朝までのいくつかの時期の路面が重なっている。道幅は時期によって東西に移動しているのが明らかで、東晉時期の道路は、吳時代の道路を基礎として西に 6 m 移動している。南朝の道路は東晉の道路から東へ 10m 近く拡張している。

各時期の道路の両側には、幅の一定しない磚組みの側溝があり、もっとも古い吳の時期の側溝がいちばん狭い。路面幅 15.4m にたいして、側溝幅は 5m 以上、深さは 2 m 以上ある。路面にも 2 条の浅い溝があり、それによって道路は 3 つの部分に分かれている。南朝時期の道路がもっとも広く、路面幅 23.3m に達し、磚組みの側溝幅は約 2 m、深さ 0.6m である。東晉時期の道路にも「一路三途」の現象がみられる。

新浦の現場の東晋道路の両側の路面は磚敷であり、路面には轍の跡が明確に残っている。一方、中央の路面は版築の路面である。磚に刻印された紀年の銘文によれば、この磚敷の道路は東晋の成帝と康帝の時期にあたる。近年の発掘成果からみて、この道路は台城東側の主要幹線道路であろう（図 1・2）。

このほか、利濟巷西側の長發大厦建設予定地、洪武路東側の南京放送大学予定地、中山東路北側の市体育局予定地で、それぞれ南北方向の立派な道路を発見した。道路の両側にはやはり磚組みの側溝がある。市体育局で検出した道路は幅 17m をこえ、南朝時期の道路側溝は東晋の側溝の磚のうえに磚を積み足して構築している。

東西方向の道路 1条 南京図書館新館予定地の北部に位置し、この現場と南北方向の道路とは直交する。吳から南朝までの各時期の路面が重なっている。古い時期の南方の道路は、新しい時期の路面によって破壊されており、幅は不明である。南朝後期の道路は残りがよく、路面幅約 20m、両側には磚組みの側溝があり幅 0.85m である。

六朝前期の木橋 南京図書館新館予定地の北部に位置し、東西方向の壕と南北方向の道路とが直交している。橋の床板は残っていないが、橋脚の木杭はよく残っている。2列 6 本の木杭が検出され、いずれも壕のなかに打ち込まれている。杭の配列からみて単孔の木橋で、東西幅 4.7m、橋孔の南北間隔は 4.5m ある。橋脚部分の壕の両岸には、比較的太い護岸の杭がある。北岸の橋脚の杭と護岸の杭との間では、残存長 4.6m の橋をまもる磚積みの壁が発見された。幅 0.8m、残存高 0.1~0.55m。南側の橋脚と壕南岸との距離は 3.8m あり、その間に碎いた石や磚をつめ、さらに木の枝や大量の大きな石をつかった構築物があり、南岸の橋の保護を強化している。

水門 鄧府巷東側の広廈公司予定地にあり、東西方向にこの現場を貫く城壁がある。検出した部分は東西長 16.8m。頂部はすでに破壊されている。構造の違いから 3 段に分けられ

る。東段は幅 2.2m。両側の溝壁は木板をもちいて木杭で護岸し、溝底には木板を敷いている。中段は幅 2.1m。両側の溝の壁は磚積みで、その壁の下部の内側には、さらに木板をもちいて木杭で護岸を強化している。溝底には木板を敷く。東段と中段の溝底と溝壁の木板と木杭は、ほとんどが腐食していたが、痕跡が残っていた。西段は、東段や中段より幅がひろく、内法幅 2.4m、残存深 2 m。両側の壁には大きな磚を組み、底には長い木板を階段状に敷く。排水の方向は東から西へむかっていたと推測する。

(iii) 磚組み住居址と大型の建物基壇

磚組み住居址 10 基ほど発見した。多くは南京図書館新館の場所である。建物の規模や形はさまざままで、最大の F8 を例にすると、南北幅 12.5m、東西残存長 13.5m ある。柱穴の配置とその他の遺構の状況から、F8 は間口 5 間、奥行き 3 間で、北壁の中央には幅 2.1m の出入り口があったと考えられる。磚組みの壁の中には磚敷の活動面があり、壁の外側には犬走りが一周して、その外側に磚敷の雨落ちと排水溝がある。

南朝の大型基壇 長江後街南側の現場に位置する。発掘面積に限りがあったため、遺構を全面調査していない。ボーリング調査の成果と総合すると、この基壇は少なくとも南北 50m 以上あり、北は長江後街の地下に達している。東西は 38.4m 以上あり、西は太平北路の下に至る。後期の版築基壇は、前期の基壇を基礎として、さらに外側に拡張している。拡張部分の版築は 8~10 層に分層でき、厚さは 6~20 cm。版築層の間には、規則的に敷かれた石がある。版築基壇の上面では、2 つの南朝時期の大型の礎石が検出された。この基壇の規模は非常に大きく、おそらくは宮殿の基壇であろう。

(iv) 磚組みの排水溝と磚組みの井戸

磚組みの排水溝 おもに南京図書館新館予定地と游府西街小学校予定地で検出した。比較的密集した住居址の間にある。ほとんどが明渠で、1 条は当時の道路をこえるために、道路下の部分だけ磚を積み、天井を設けて暗渠にしている。溝の両壁にも磚を積む（図 3）。

東晉および南朝時期の磚組み井戸 十数基ある。ほとんどの現場で発見されており、よく残っている。井戸の底はすべて木板を敷き、壁には磚を積み上げる。ただし、一部の井戸壁では、底の木板の上に磚を積み上げた特製の灰陶壁を構築しており、その壁面には 4 カ所の入水口が設けられている。ほとんどの井戸の中から、壊れた方形円口の石製井戸枠が出土し、またある井戸の開口部分の周囲には、方形の版築基壇があつて、その四隅に柱穴が発見された。おそらく、井戸の覆い屋であろう。また、別の井戸の周囲には、2.2m×1.9m の範囲を磚敷にした井戸周りの足場を構築しており、特殊な例である（図 4）。

C 建康城の主要成果

大行宮地区の六朝建康宮城遺跡をのぞいた、六朝建康城の範囲内にある建設現予定地の遺構について緊急調査を実施し、重要な成果をあげたので以下に紹介する。

- 1 2002年9月、鼎新路中段紅土橋の西側にあるもとの建鄴区国税局大楼の現場で、南朝の陶製の仏像の破片が発見された。一部の像には施釉の痕跡が残っている。同時にこわれた窯壁の破片も出土しているので、窯の廃棄物が堆積した場所であろうと考えられる。文献を参照すると、付近には寺院が分布している。
- 2 2004年4月、城南の秦淮河南岸の船板巷そばにある皇冊家園の現場で、南朝の磚組み井戸と整然と配列された木柵、おそらく軍事施設の一部を検出した。大量の六朝前期の青磁や鉄鏹、鉄の甲冑片などが出土し、そのなかには軸下彩絵で蓋つきの青磁双領罐と40数点の木筒が含まれている。
- 3 2004年4月～6月と12月、鄧府巷の西側にある広厦公司建設予定地と程閣老巷と洪武南路の境界の西南側の現場で、南北方向の東晉から南朝時期の道路を検出した。
- 4 2006年6月～9月、中華門内信府河巷の現場、建鄴路中段南側の金鼎湾の建設予定地で、秦淮河の旧河道と古い運河遺構を発掘し、2条の河道の六朝時期における幅を確認した。
- 5 2007年3月～5月、中華路東側の中華広場の現場で、幅の広い南北方向の道路を1条発見した。位置は南唐時代の御道の東側にあたり、呉の時代から唐代まで使用されたもので、おそらくは六朝都城の宣陽門と朱雀門を結ぶ御道と考えられる。

D 建康城の主要な遺物

(i) 瓦 磚

六朝建康城の発掘調査で出土した遺物には、土器、陶磁器、銅器、鉄器、石器などがある。そのうち瓦磚がもっとも多い。各種の軒丸瓦は計800点をかぞえ、文様は雲文、人面文、獸面文、蓮華文の4つに大別される。六朝の軒丸瓦に関するもっとも重要な成果である。瓦当の型式は豊富で、出土層位が明らかのことから、従来、採集品を主としてきた六朝瓦当の研究を改変し、きわめて豊富な六朝瓦当の出土品を提供した。六朝瓦当の分類と編年研究において重要な科学的根拠となる。

2004年以前に出土した雲文、人面文の瓦当資料は、すでに整理して、『文物』2007年第1期に発表している。獸面文と蓮華文瓦当は現在整理中である。出土した多くの磚の側面と端面には、各種の文字や図案が刻印されている。その内容は紀年、記事、方位、用途、姓名など豊富で、各種建物遺構の具体的時代や性質について検討する際の手がかりとなる。

(ii) 軸下彩絵磁器

城南の秦淮河南岸の船板巷のそばにある皇冊家園の現場や大行宮地区の新浦新世纪広場の現場、南京図書館新館の現場で発見されている。蓋つきの青磁双領罐と盤口壺が修復できたほか、三十数点の破片があり、器形がわかるものには洗、盞と蓋がある。時代は呉時代後期である。これらの軸下彩絵磁器は、出土層位が明らかで時期的な特徴も明確で器種も多い。、

彩絵の内容も多岐にわたり、非常にすぐれたつくりである。これは長岡村5号墓以来の重大な発見である。これらの磁器は、胎土や釉、製作技術も同時代の一般の青磁にくらべて優れており、その装飾も独特で華麗であり、当時の一般の磁器とは顯著な差がある。おそらく、吳の宮廷のために特別に焼成された高級な容器であったのだろう。これらの釉下彩磁器の資料は『文物』2005年第5期に発表したのち、学界で大きな注目をあびた。

(iii) 木簡

城南の秦淮河南岸の船板巷のそばにある皇冊家園の現場で発見された。地表から4mほどの深さの古秦淮河の堆積層から大量の六朝時代の遺物が出土し、そのうち釉下彩絵で蓋つきの青磁双領罐と四十数点の木簡は大変貴重である。これらの木簡はみな木質で、出土層位と共に伴した遺物をみると、吳、西晋の時期にあたる。数点の木簡には正確な紀年があり、吳の年号である赤鳥元年(238)、赤鳥13年(250)、永安4年(261)の3種、西晋の建興3年(315)があり、時代の確定に重要な根拠となった。木簡の種類には、名刺、荷札、符券牌、封検などがある。内容は豊富で、名刺以外に米や食糧の貢納、道教の符など、当時の経済、宗教、および地名や官職の研究にも重要な史料となる。これらの木簡の一部については『書法叢刊』2005年第3期に発表した。

E 今後の調査の重点

目下のところ我々は、六朝建康宮城（台城）の中心位置、台城の東辺、西辺、台城内部の城壁や道路の配置の把握、瓦当や釉下彩絵磁器を代表とする遺物の研究について、大きな進展をみた。しかし、現在発掘で明らかにした遺構は、埋没している六朝建康城跡の冰山の一角にすぎない。解決すべき問題、完成すべき重要な調査研究は山積している。六朝都城の発掘調査の全面的な展開を積極的に推進するために、できるかぎり早く既定の学術目標を実現し、今後の調査研究の計画と調整を実行すべきであると考える。

- 1 発掘資料が増加し、城壁や壕などの重要な遺構の性質が明らかになるにつれて、これまでの発掘資料を体系的に整理し、消化してその成果を公表しなければならない。
- 2 目下、取得した手がかりにもとづいて、重要な建設現場をひきつづき発掘調査し、早急に宮城の北限と南限、城門の形や内側の城壁の構造などを確認する。台城の四至がほぼ明らかになった状況下では、当時の財産、知識と技術を集中して造営した最高級の建物、宮殿基壇の解明を今後の発掘調査の重要課題の1つにしたい。
- 3 資料不足により、六朝建康都城の四至、城壁の構造、都城内の空間構造などの重要な問題について、学界では定説がない。したがって、都城の城壁、道路などの遺構の発掘調査を開始する必要がある。
- 4 宮城と都城以外にも、建康城の周囲には多くの衛星都市があり、その間にも各種の建物が分布している。これらもまた建康城の発掘調査の重要な課題である。現状では

石頭城、西州城、東府城などの主要な城址、仏教寺院を代表とする宗教関連の建物などを選択し、優先的に調査することができる。

5 六朝建康城の保護事業は、発掘調査と同様に重要である。中国古代都城発展史上における六朝建康城の位置を考慮し、その保護事業を都市計画と法制管理の軌道に乗せる必要がある。当面、発掘調査計画を見直し、南京市の埋蔵文化財の重点保護対象である六朝建康宮城の具体的な保護範囲を早急に作成する。台城外周の建康都城および石頭城、西州城、東府城、越城などを代表とする主要な城址の地下にも大量の遺構が埋没している。それらが都市開発で破壊されるのを防ぐために、法律をつくり保護する必要がある。当然、都市計画の実際の状況を検討し、各城址の重要な程度や緊急性の違いを考慮したうえで、適切な保護措置をとる。

発掘した重要な建物遺構については、過去にも若干の保護措置をおこなってきた。たとえば、新世紀広場で発見した東晋時代の磚敷きの車道のなかの一部や南京図書館新館で検出した磚組みの井戸、南朝の城壁などは全体を南京市博物館に移設、展示している。また、南京地下鉄2号線大行宮駅の現場で発見した南朝の磚組み井戸、郵府巷東側の現場の磚と木で構築した南朝の水門も、建設工事終了後に現地に保存展示了。南京図書館新館の東部の地下1階ロビーの下にも六朝建康宮城の建物遺構を現地保存展示している。これらの保護事業は社会的に認められ、高い評価を得ている。

しかし、さまざまな理由で、重要な遺跡の保護事業に対する関心は、関連部門においても十分とはいえない。一部の遺跡が、発掘終了後に埋め戻されるか破壊されることには遺憾の意を禁じえない。今後、重要な遺跡の保護や展示については継続的に強化するとともに、さまざまな方法でさらに多くの遺跡を保護し、六朝の古都南京のために、名実ともに六朝文化の新景観を現出できるよう努力しなければならない。

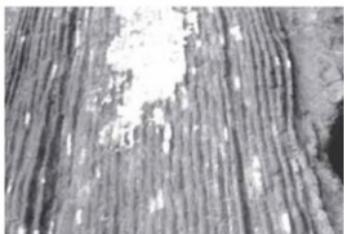


図1 東晉時期の磚敷車道（細部）



図3 南朝時期の磚組み井戸底部の水穴



図2 南朝時期の磚組み排水溝



図4 新浦新世紀広場 東晉時期の磚道

8 晋陽古城における近年の調査成果

常一民

(太原市文物考古研究所)

A はじめに

晋陽の名は『左伝』定公 13 年（前 497）の条にはじめて登場し、「秋、晋の趙鞅、晋陽に入り反旗をあげる」と見える。

晋陽城は、春秋時代の末年、晋の趙卿簡子の家臣である董安于と尹鐸が造営した。くだつて東魏の都府、北齊の別都として発展繁栄した時期があり、最終的には唐の北都として最盛期をむかえる。宋の太平興国 4 年（979）に、宋の太宗、趙光義は、火と水でこの古城を破壊した。こののち数百年、晋陽城における大規模な造営計画はなく、明の洪武 4 年（1371）にいたって、古城南門の旧址に太原県城を造営した。景泰元年（1450）には城壁外装に磚を積み、面積は 0.75 平方キロメートル。今日、晋源鎮には明代の状態が保存されている。

遺跡の概況 晋陽古城は太原市西南部に位置し、城壁と壕、寺觀、墓葬の三部の遺構から構成されている。総面積は 200 平方キロメートルである。

城壁と壕は面積 20 平方キロメートルほどあり、遺跡内の古城營村の西には長さ 600m の城壁が遺存する。南城角村は城壁の西南角の上にある。地表には 50~150 cm の高さの城壁が長さ 200m ほど残っている。古城營村の中には 2 基の版築基壇があり、周囲の地面より 50 cm ほど高い。現在は民家の下になっている。古城南部には面積 0.75 平方キロメートルの明代太原城址があり、一部の城壁や城門のほか、多くの民家や寺、廟などがある。

寺觀の遺跡は城壁から西へ 2 km ほどのところにある西山一帯に分布し、晋祠、天龍山石窟、天龍聖寿寺、龍山童子寺、龍山石窟、石門寺、姑姑洞石窟、蒙山大仏、開化寺連理塔がある。

地下の遺跡は、西山の東麓や東山の西麓に分布する。建国以来、5000 基以上の墓葬の緊急発掘を実施してきた。たとえば、金勝村晋国趙卿墓とその車馬坑、東太堡村西漢清河太后墓、王郭村北齊婁睿墓、隋代虞弘墓、晋源果樹場漢唐墓群、王家峰村北齊徐顯秀墓、狄湛墓、義井村賀拔昌墓、化肥廠唐代壁画墓などである。

B 既往の調査

1965 年、晋陽古城遺跡は山西省重点文物保护単位に指定された。2001 年 6 月 25 日には國務院が確定した全国重点文物保护単位となり、国家文物局、国家が公布した「15 期間百大遺跡保護總体規格項目」になった。1998 年に、太原市文物局は太原市文物考古研究所を設立

し、翌 1999 年には太原市晋陽古城研究所が発足して、古城遺跡の考古学的研究と保護を専門におこなうこととなった。

20 世紀初頭に、水野清一と日比野丈夫が古城遺跡において初步的な調査を行い、1950 年代には著名な考古学者である宿白先生が、晋陽古城で踏査とボーリングを実施した。60 年代になると、謝元路と張頤両先生が晋国新田遺跡の発掘調査と研究にともない、古城についても初步的な調査を実施し、『晋陽古城勘查記』を発表された。ここでは、古城遺跡の年代と建物の規模について考察しており、以後の調査研究の基礎となった。

2002 年から、太原市は晋陽古城考古工作隊を組織して、計画的な調査と発掘を開始した。ボーリングにより 20100m あまりにわたって城壁を発見し、城壁の基本的は範囲を確認し、城内ではいくつかの基壇を発見した。

(i) 踏査とボーリング調査

西城壁と城の四至 西城壁は南城角村と羅城村の高速道路料金所の間にあり、版築土は赤褐色で南北長 3750m、東西幅 18~20m ある。方向は北で東に 18 度振れている。地上に残る長さ 600m ほどの城壁以外は、すべて地下に埋没している。

南城壁は、南城角村と南北瓦窯村の城角の間にある。版築土は灰褐色で、東西長 4780m、東西幅 18~20m、方向は 108 度。この城壁の検出深度は東にいくほど深くなり、南城角村の西南城角では地上 1.5m の高さで残存しているが、そこから 1km ほど東のところでは地表から 3.8~5.5m のところに埋没し、2.5 km 東では深さ 8~9.5m、3.7 km 東では 13.5~15m 下で検出される。

北城壁は、羅城村の高速道路料金所と西寨村の高速道路のカーブの間にある。長さ 610m 分を断続的に発見した。羅城村高速道路料金所の西北角を基点として、東へ向かう東西方向の版築 560m と、東北角から西にむかう東西方向の版築 50m 分を確認した。

東城壁は、西寨村の高速道路のカーブと南北瓦窯村の城角地の間にある。東南角を基点として、ボーリング調査により、北へ向かう 3000m 分の版築を確認した。

このように、城壁は全体に横長の長方形を呈し、東西長は 4780m、南北長 3750m である。北辺の西端は羅城村高速道路料金所を基点とし、東は西寨村高速道路のカーブまでである。西辺は羅城村高速道路料金所を北端とし、南城角村までである。南辺は南城角村を西端とし、東端は南北瓦窯村の間の城角地に至る。東辺は南北瓦窯村の間の城角地を基点とし、西寨村高速道路のカーブを北端とする。

『晋陽記』によれば、「城周四十二里、東西十二里、南北八里二百三十二歩」とある。『新唐書』地理志では「北都城左汾右晋、潛丘在中、長四千三百二十步、廣三千一百二十二步、周万五千一百五十步、其崇四丈」とある。東、北、南の城壁は未発掘のため、時代は不明であるが、発見した城壁は文献に見える唐代の晋陽西城と考えている。

西城壁内で発見したいくつかの版築遺構 南北方向の版築は西城壁の東 2.2 km のところにあ

り、南は高速道路と僕友路の間の境界を越えている。版築の南北長は 2000m あまり、幅は 18~20m、方向は 18 度。

東西方向の版築は 2 条。うち 1 条は 73 公路に近く、城壁の西北角から南へ 1000m のところにあり、途中断絶して 3 部分に分かれる。東西長はそれぞれ 700m、1200m、1000m、幅は 18~20m。もう 1 条は南城角村の北 1400m にあり、2 つの版築を発見した。東西長はそれぞれ 200m と 70m、南方幅は 16~18m。

数年にわたるボーリング調査をとおして、西城壁には 3 カ所の開口部があることが明らかになった。1 つは城壁の西北角から南へ 900m のところで、開口幅は 70m あまり。2 つめは西城壁の中央。ボーリングののち、2006 年に試掘を実施した。3 つめは城壁の西南角の北 900m のところで、康培公司院内にあたり、開口幅は 30m。底部には礫層がある。

南城壁では 2 カ所の開口部を発見した。1 つは城壁の西南角から東へ 760m のところで、開口幅は 4~4.2m。底部には礫層がある。2 つめは新晋祠公路の東、南街村煤黑廠付近にあたり、城壁の西南角から東へ 2000m の位置にあたる。開口部は地表下 9.5m で検出し、幅 15m。底部には礫層がある。

(ii) 発掘調査

西城壁の西北角と城壁の断ち割り・試掘 2001 年の大運高速道路建設工事にともない、山西省考古研究所と共同して、羅城老爺閣で緊急発掘をおこなった。2003 年にはその重点地の 01TJ II T141 号グリッドを拡張し、西に 3 m 拡張したところで古城の西北角の内側部分を検出した。城壁角は版築の残存高が 2.75m あり、古城遺跡について正確な座標を提供した。

城角は版築方法を採用し、版築の 1 層の厚さは 7~10 cm、突き棒の径は 2.5 cm、突き棒の穴の深さは 0.8 cm である。版築層の下には厚さ 2.5m の包含層があり、計 11 層。各層の厚さは 10~30 cm ほど。版築層、包含層からは開元通宝、磁器の碗の底部、網目の磚などが出土し、2001 年の発掘成果（2001 年は城壁の西側に試掘坑をあけ、城壁の下から漢晋時代の土坑 1 基を検出した）とあわせると、この城壁の造営年代は両晋と唐代の間となる。

西城壁西側の壕と城壁の発掘 2001 年の大運高速道路建設工事にともない、山西省考古研究所と共同で晋源鎮西門の外、約 500m のところで城壕を試掘し、01TJ II T201 とした。城壕の幅は約 39m あり、地表からの深さ 4.5m、方向は 18 度である。

2006 年には、西城壁に東西方向の長さ 80m の試掘坑を設けた。発掘により、壕と西城壁、城内の層の年代の関係を解決した。

壕の試掘点は 01TJ II T201 である。壕は 2 時期あり、後期の壕の底は現地表からの深さ 4.5m。底面中央には突出した稜があり、西側は波形を呈する。おそらく耕作面であろう。出土遺物は明清時代の青花磁器片、黒磁片などである。前期の壕の底は現地表から 7.5m の深さで、出土遺物には唐代の折沿白磁碗、碗底などがある。前期の壕の造営は唐代より下らず、後期の壕は明清時代まで使用されていたと推測する。壕と城壁の間は古城營村の生活道路で

あるため、地層の関係を徹底的に解決することはできなかつた。今後継続していきたい。

城壁の断ち割りと試掘は3年にわたつた。断ち割りをとおして、城壁は幾度かの大規模な改修をへていることが判明した。最初の時期の城壁は城壁全体の東寄りにあり、春秋戦国時代の陶鬲、陶豆、縄文のある土器片などが出土する。中期は城壁の中央部に位置し、土色は灰褐色で、後期の城壁は主として城壁の外側に造営する。夾雜物の多い土を使用し、紅褐色を呈するところは、後期の補修部分である。遺物と地層の関係からみると、城壁の主体は北朝時期で、唐代に補修をしている。城壁東寄りの前期の版築は、春秋時代の後期から戦国時代前期にあたると考える。

城内の試掘は、2006年と2007年に2度実施した。西城壁東側の基本層序を明らかにし、道路や水路などの施設を発見した。現在も西城壁の立ち割りや試掘を継続中である。

古城營村内の城壁の調査と発掘 1960年代、謝元路と張額は晋陽古城遺跡で初步的な踏査をおこなつた。古城營村内の古城西城壁と南城壁の一部は地上に残つてゐる（残存していた城壁は、その後、70年代までに削平されてしまった）。我々は2003年にこの城址においてボーリングをおこない、3カ所の城壁の角を確認した（東南の角は明代の城壁に破壊されている）。西城壁の長さ475m、北城壁の長さ430m、城壁幅は18m、方向は6度。城壁の周囲には幅約38mの壕があつた。

2004年、古城村内にある小城の北城壁について試掘をおこない04TJII T201とした。城壁の幅は16.4m、版築層は計12層、版築層は全体で1.9mの厚さをもつ。城内とその下の地層には金元時代の黒磁片があつた。

この試掘坑の北部では、地表下1.7mのところにある第7層の下で版築遺構を検出した。版築層は計4層。厚さは全体で90cmある。突き棒の穴は不規則で、直径は3~12cm、穴の底部は比較的平らである。この版築遺構の下には墓坑が1基あり、副葬品はなかつたが、人骨1体が見つかった。墓坑の一部は試掘坑の東壁にかかつてゐたが、墓坑の発掘が終了する前に壁が崩壊してしまつた。出土した遺物や地層の関係から、この版築遺構は今回試掘した大明城の北城壁の時代より古いことが判明した。

2006年に再び古城營村内の小城の東城壁と壕を試掘し、06TJII T401とした。2度の調査をとおして、この小城は元代と明代の間に位置づけられると判断した。

城壁の下にある7つの層からは版築層を発見し、大量の北朝の瓦が出土した。最も多いのは磨研の青棍瓦で、丸瓦、平瓦、縄目の磚のほか、刻印のある平瓦や棟飾りがある。

西城壁「水門」遺跡の発掘 『永楽大典』太原府志によると、「水門、今城西晋所入之道、尚名水窓門」とある。先年の調査で、ここは城壁の開口部であったことがわかつており、2006年に試掘し、06TJII T301とした。開口部の幅は2.5mあり、過去に水が流れた痕跡を確認したが、後世の擾乱がひどく、道路遺構など城門にかかわる遺構は未発見である。

八演地の試掘 この試掘地点は晋祠路複線の西側100mのところに位置し、舊友路の北

300mにあたる。04TJ II T401とした。ここは地下水位が非常に高いため、試掘が地表下6mに達したところで壁がくずれた。深さ6mより浅い部分の状況は以下の通りである。

版築土は地表から0.3mで検出し、幅は12mある。黄色と黒色が互層になり、黄色土は厚さ8~12cm、土質は単純で密度は低い。黒色土は厚さ7~10cm。土質は比較的雑で、密度はやや高い。この版築土内には金末~元初の磁器片があり、その年代は元代より下らない。

C 出土瓦

近年、晋陽古城では、城壁や城門などの城址構造にかかる部分の調査を重点的におこなってきた。発掘は西城壁の断ち割りに偏っている。こうした調査では一定量の瓦が出土したが、ほとんどは細片である。2006年に、古城營村内の小城の東城壁の発掘調査で比較的完形に近い遺物が出土し、それは磚と瓦が主体で、時代は北朝から唐代のものが多い。瓦は模骨に粘土紐を巻き付ける方法を採用しており、すべて内側から切り込みをいれていた（外側から切り込みをいれた例は確認していない）。現在、出土した瓦の時代や製作技法について系統的な整理、研究はしておらず、晋陽古城遺跡の磚、瓦、瓦当などの前後関係も確立していない。以下、発掘の過程で層位と時代が判明した平瓦・軒平瓦、丸瓦、軒丸瓦を紹介する。

古城營村内城（06TJ II T401）

発掘中に、版築の下の第7層から大量の縄目の磚、青棍瓦、平瓦、棟飾りなどの破片が出土した。この発掘では古城遺跡内でもっとも多く瓦が出土し、かつ刻印のある平瓦や丸瓦がある（刻印平瓦23点、刻印丸瓦1点）。

平瓦・軒平瓦 主に3種ある。胎土は精良で、表面はミガキをかけるものが多い。凹面はミガキをかけているが、布目が残る。一部には凹面に布目がない例もある。06TJ II T401⑦:3はミガキをせず、凸面は無文、凹面はミガキをかけるが、布目が残る。端面には指頭圧痕がある。長さ36.5cm、厚さ1.2~1.5cm、広端幅27cm、狭端幅21cm。06TJ II T401⑦は黒色磨研で、凹凸面無文。端面は二重弧文。06TJ II T401⑦:6は黒色磨研で凹面無文。凸面に刻印があり、すべて1文字。

丸瓦 胎土が精良な黒色磨研の青棍丸瓦が多く、ミガキをかけない灰色の瓦もある。06TJ II T401⑦:2は黒色磨研。凸面無文、凹面には布目。玉縁凸面に刻印。長さ37.5cm、厚さ1.7~2.0cm、玉縁長4.5cm。

軒丸瓦 蓮華文を主とするが、雲文が1点ある。すべて破片。06TJ II T401⑦:12は雲文瓦当。中心飾りは斜方格で、雲文をかざる。06TJ II T401⑦:14は蓮華文瓦当。中房に連子をかざる。連弁は豊満。

西城壁発掘地点（07TJ II T101）

軒平瓦 胎土が精良で、凹面はミガキをかける。端面には刻んだ鰯齒文がある。

乳牛場 03TJ II T101 発掘地点

蓮華文軒丸瓦 中房には連子をかざる。連弁は十弁で豊満。径 14.3 cm、外縁幅 2~2.3 cm、厚さ 1.5 cm。

晋陽古城周辺にある、時代の明確な墓坑と寺觀遺跡から出土した瓦を紹介する。

王家峰北齊徐顯秀墓

軒平瓦 02TWBX425。胎土は精良で、凸面は黒色磨研で無文。凹面は布目がある。端面は二重弧文。長さ 35.5 cm、広端幅 24 cm、狭端幅 21 cm、厚さ 1.7 cm。

蓮華文軒丸瓦 02TWBX419。中房には連子をかざる。十弁の豊満な連弁。瓦当径 12.3 cm、外縁高 1.5 cm。

西山大仏遺跡

獸面文瓦当 中央部は瓦当外縁よりも突出する。瓦当面には獸面をかざる。瓦当裏面にはかなり深い規則的なキザミがある。TJW00422 は瓦当径 19.5 cm、外縁幅 3~3.2 cm、外縁の高さ 1.7 cm。TJW00426 は瓦当径 16.5 cm、外縁幅 2.5 cm、外縁の高さ 1.8~2 cm。TJW00423 は瓦当径 18 cm、外縁幅 3~4 cm、外縁の高さ 1.5 cm。TJW00427 は瓦当径 18.5 cm、外縁幅 2~2.5 cm、外縁の高さ 1.5~1.7 cm。

平 瓦 TJW00420 は凸面無文、凹面布目。長さ 48.3 cm、広端幅 32 cm、狭端幅 27.5 cm、厚さ 1.8~2.8 cm。

丸 瓦 規格は比較的大きく、数量も多い。凸面無文で凹面は布目。大型丸瓦 TJW00410 は凸面無文、凹面布目。長さ 46 cm、広端幅 32 cm、狭端幅 19 cm、厚さ 2~2.5 cm。玉縁長 2.5 cm。小型丸瓦 TJW00419 は凸面無文、凹面布目。長さ 32 cm、端幅 14 cm、厚さ 1.3 cm。玉縁長 2 cm。側面は残存しない。

D おわりに

晋陽古城遺跡の考古学的調査は、先人の業績を基礎として、1999 年に晋陽考古研究所が設立されてから現在にいたるまで十年にわたる努力により、一定の成果を得てきた。ただし、これはたんなる幕開けにすぎない。今後の道のりは非常に長く、調査も困難をともなうであろう。当然、直面する任務も大きくなる。

また、検出した城壁の年代を確定させ、城門や道路、城内の空間配置などの調査を進めなければならない。このためには、晋陽古城遺跡の調査資料を整理する必要がある。そして調査や発掘の技術を拡大し、整理研究をおこない、成果の公開展示に努めたい。社会各層のさらなる支持を獲得し、晋陽古城遺跡の考古学的研究と保護事業を推進していきたい。

2010年 11月30日発行

古代東アジアの造瓦技術

奈良文化財研究所研究報告 第3冊

発 行 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1

TEL 0742-30-6852 (代)

印 刷 株式会社 明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

TEL 0742-63-0661

www.meishin.co.jp

ISBN 978-4-902010-87-9
